

ろ

禁ずべし(P)「虚言(S)は悪なり(M)」  
「故に、虚言(S)は禁ずべし(P)」を、  
「<sup>ロ</sup>」の如く示す類。他に、なほ三種あ  
り。略して、圖式とのみいふ。  
ろりてきかいじやく論理的解釋「名」  
「法」ろりかいじやく(論理解釋)に同じ。  
ろれつ論列「名」是非をならべて論  
ずること。「のいのち」  
ろめい露命「名」はかなきいのち。つゆ  
露命を繋ぐ「句」たよりなきくらし  
をなす。辛うじて生活す。  
ろめん路面「名」道路の表面。  
ろやう魯陽「名」(「地」支那の地名。今  
の河南省汝州魯山縣の治。春秋戰國時代  
には楚の縣。日「人」ろやう(魯陽公)  
の略。

魯陽の戈(「句」次條に同じ。  
魯陽、日を返す「句」次條に同じ。太  
平記、項羽が山を抜く力、魯陽が日を返  
す勢ありとは、この堅陣に懸け入って  
戦ふべしとは見えざりけり」  
魯陽、日を應(「句」古、支那楚  
の魯陽公が、韓と戦ひ、日の暮れんとす  
る時、戈を以て日を招きたるに、日、こ  
れがために、三舍ばかり引返したりと  
いふ故事(淮南子の覽冥訓に出づ)。  
ろやう(「句」魯陽公「名」(「人」支那戰  
國時代の楚の平王の孫、司馬子期の子。魯  
陽縣の守たり。「銀。路錢。旅費。  
ろやう路用「名」路中の入費。路費。路  
ろらう路粮「名」しりやう(資糧)に同じ。  
ろり「名」産婦の、分娩後、産屋に居る期間。  
ろり露里「助數」露國の道程の單位。我  
國の九町四十六間四尺餘に相當す。  
ろりく盧陸「名」(「人」盧全(「名」)と陸羽  
(「名」)と。共に支那唐の人にて、共に茶を  
好みて名あり。

ろりつがは 呂律川「名」(「地」山城國愛  
宕(「名」)郡大原村にある川。南を呂川、北  
を律川といひ共に音無瀧の下流にして、  
三千院を挟み、兩岸、楓樹多く、春秋の風  
景佳なり。

ろ

ろりん 盧綸「名」(「人」支那唐の詩人。字  
は允言。河中の人。徳宗の時、召されて、  
常に帝の作に度せしめらる。古中学、韓  
翃、錢起、司空曙、崔峒、耿湋、侯峩、  
李端等と名を齊しくし、大曆の十才子と  
稱せらる。「取ること」  
ろりやく 撈掠 鹵掠「名」財物をかすめ  
ろれち 路料「名」旅に用ふる食物。  
ろりつ 呂律「物」(「呂律」の訛な  
るべしといふ)物言ふ調子。  
ろれつが 廻らず「句」酒に酔ひなど  
して、言語分明ならず。「ぬること」  
ろれつ 臘列「名」ならぶること。つら  
ろれん 簾簾「名」(「簾」を編みて作りた  
るすだれ。  
ろれん 魯連「名」(「人」ろちゆうれん(魯仲  
ろれん)ばうず 路連坊主「名」能(「名」)の狂  
言の「。旅僧を一宿せしめたる家の主人。  
その僧の弟子たらんことを望みて、俄か  
に剃髪し、名を路連坊と附けられしに、  
妻、その席に出て、夫の出家姿を見るや、  
僧に、頭髪を元の如くして返せとて怒る  
筋のもの。

ろろ 羅羅(英「名」)支那雲南省の  
東北部、四川省の西部なる山間に棲める、  
支那印度種系統の人種。支那人の謂はゆ  
る南蠻の一にして、身體長大、性質慷慨、  
言語は單綴語にして、一種の象形文字を  
有し、貴族平民奴隸の三階級に異なる。  
ろろん 魯論「名」(「書」論語の異本の  
一。魯人の傳へたるものにて、二十篇よ  
り成り、夏侯勝、蕭望之、韋賢及びその子  
玄成等、これを傳ふ。「今」の論語は、前  
項の魯論を本とするものなるよりいふ、  
ろん(論語)に同じ。太平記、不義而富且  
貴、於我如浮雲と云へること、これ、孔  
子の善言、魯論に記する所なれば」  
ろわけせん 船別錢「名」ろへつせん(船別  
錢)を見よ。  
ろお 賂遺「名」賂(「名」)としてのおくり  
ろお 蘆葦「名」蘆は、葦の未だ秀てざ  
るもの」あし。よし。  
ろをく 露屋「名」屋根なき家。

# わ

【發音】わ行第一の音。  
子音wが母音nに結び  
附きて發す。他のわ行音  
あ、う、え、を、元來、子音  
wの母音i-n-e-oに  
結び附きて發する音に  
しなるべけれども、中  
古以後、子音脱落して、あ  
行のいうえおと發音上  
何等の區別なきに至り  
しのみならず、ろの如き  
は、古くよりあ行のと同  
一の假名を用ひ來れり。  
wは、氣息の咽喉より鼻  
腔へ通ずる路を閉ぢ、上  
下兩唇を、母音を發す  
る時よりも一層窄め、そ  
の間の僅かなる空隙よ  
り、聲帶の振動を帶びた  
る氣息を通過せしめて  
發する音にして、摩擦音  
に屬し、その發する場所  
よりすれば唇音(又、兩  
唇音)に屬す。又、その  
氣息は聲帶の振動を帶  
びたるが故に、濁音の一  
にして、これに對する清  
音は、同じく唇音に屬す  
る。又、はに近き音な  
り。さわやか(爽か)とさ  
ばりとの關係、又、しり  
(尻尾)のしほと轉訛す  
るが如き、これがたまた  
なり。子音wの母音nと  
異なる所は、ただ唇の開  
度の一層狭きと、氣息通  
過の際摩擦を生ずると  
の二點に在るのみなる  
が故に、ろ列音の直下に  
あ音の續く時、その中間  
にw音加はりて、あは  
の如くに發音せらるる  
場合あり。あ音の條下は、  
參照せよ。日長音は、

わあと書くわと書くとの兩法あり。  
本書にては前者に依れり。日一語の中  
にてわの直後にろの續く時は、あ行のあ  
の場合と同様に、相合してオの長音に  
發音す。一旦、ろの長音となり、更にその  
w音の脱落したる結果にして、例へばわ  
る(王)をオと發音する類。日わは、わ  
又とはくの假名の下に記してあ列拗音を示  
すことあり。即ちくわ(くわ)くわ(くわ)  
これなり。殊に、漢字の音にては、この  
場合、すべて拗音に發音すること、くわじ  
(火事・ぐわいこく・外國)などの例の如  
し。古くは同じくわ行のめ及びえを用ひ  
たるい列とえ列との拗音くめ(くめ)之系  
(くめ)くめ(くめ)も存せしことは、日  
條下に説けるが如し。漢字の音の拗音  
ぐわが熟語中の第二音以下に位する時  
は、くわと發音せず、くわの半濁音に變  
ずること、か日條下に説ける所の如  
し。これらの音の發音の方法、位置に就  
きては、日條下に説けり。又、こ  
れら拗音の場合に、くわくわの如く、  
そのわ行の假名を、右方に片寄せて小  
記す方法もあり。なほ、西洋語を寫せる  
ものには、くわくわの外、ふわ(ふ)の拗音  
もあり。日漢語の熟語の中、足利時代  
以前のもの、又、その餘習に依れるもの  
にて、nの韻を有する文字の直後に、わ  
の頭音を有する文字の續く時、そのわの  
音、上nの韻の影響を受けてナと發音  
する場合に就きては、なは條下に説けり。  
【字源】平假名わは漢字「和」(吳音ワ)の  
草體變體平假名己は「王」(漢・吳音共にワ)  
の草體より出で、片假名ワは「和」の略體、  
又、萬葉假名として、前記「和」(王)の  
倭外の字音に據れるものに「過」(丸)等  
訓を取れるものに「輪」等あり。  
わ輪「名」長きものを捲めて、固くし  
たるもの總稱。環(「名」)。「環」日  
車の左右にありて、軸にて支へ、輪の廻る  
につれて車を進め進る、聞き具。轂(「名」)  
輻(「名」)輞(「名」)鈎(「名」)等の部分より成る。  
和名輪、和。車脚所(二轉進一也)日屋根

をろるろ ろれるり ろら よゆや めめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

の石の下に置いて、その石の轉落を防ぐための、竹木を繞めて圍くしたる物。四紋所の一。二重輪(二重輪)・蛇目輪(蛇目輪)・唐草輪(唐草輪)などの種類あり。田が(田)を云ふ。(畿内・四國・九州等の方言)輪に掛ける(句)「輪に輪を掛ける」に同じ。

輪になる(句)「輪の如き形となる。狂言竹生島(蛇目輪)……きりりきりりと輪になりまして、鎌首をも立てまして」

輪に輪を掛ける(句)「次條に同じ。輪を掛ける(句)「之繞(之繞)を掛ける」に同じ。

輪を抜く(句)「輪抜(輪抜)の輕業をなす。才智を以て、危急なる場合を凌ぎ越す。後撰夷曲集(輪を多く抜けたと自慢する人はいはば山雀利根(山雀利根)なるべし)」

輪を乗る(句)「輪乗(輪乗)を爲す。わ回曲(名)「わ(輪)と、語源相同じ」まはり。めぐり。期次(期次)あはれしや焼野に洩れし峰のわの村草がくれ雉子(雉子)鳴くなり」

わ和(名)「やはらぐこと。宜しきになふこと。柔和。温和。中和。調和。平和。なかなかなほり。たひらぎ。和睦。氣候の熱からず、寒からぬこと。のどか。うららか。和暖。温和。中和。あはすること。ひとしくすること。まぜあはすること。調和。混和。他人の詩、又は音楽に合はすること。他の聲に應じて、聲を出すこと。【數】英「和」加法の結果の數。【地】古、支那にて、我國を倭(倭)と呼び、倭人倭夷倭奴倭寇などの熟語もあり、和は倭に通ずる字なるよりいふ。わが日本帝國の稱。【倭】風俗文選山水譜「唐の僧、和の江湖を見ていへる事あり、これ、唐の西湖に十倍せりと」【地】やま(大和)に同じ。

わ倭(名)「地」前條に同じ。

わ話(名)「佛」ごうあん(公案)に同じ。わ我・吾(代)「われ(我)に同じ。萬葉草

枕旅の紐解く家の妹(妹)しわを待ちかねてなげきすらしも」領格の助辭が添へたる形として、親愛の意を示すに用ふる語。「わが國」「わが校」前項の意にて複合語に用ふ。「わ主」「わ殿」「わ借」わが家の關白(句)「自己の家にては、絶大の權力を有すること。【諺語】町人義「我が家の關白とやらんいふことあれば、おのが家内にては、何ともいへば、わが家樂(家樂)の釜盥(釜盥)」「釜盥は、釜を盥に代用する程の不自山なる生活の義といふ。いかに貧しくとも、我家にまさる樂しき場所は無し。【諺語】わが榮樂の金盥(金盥)前條の訛。【諺語】

わが立つ袖(句)「地」ま(袖)に同じ。わが身をつねて人の痛さを知る(句)「身を掴みみて、人の痛さを知る」に同じ。【諺語】わが身を掴む(句)「身を掴む」に同じ。わ我(句)「我が」の「が」の、下の語の母韻に同化した「ご」となりたる語。【古語】萬葉「かけまぐもあやにかしとし神(か)ながわく大君の」

わ(感)「驚きて發する聲。狂言どぶかつちり「わ、勾當様」泣く聲。【助】「わ」に同じ。【古語】萬葉「はの松原わく子どもいざわ出て見む」はの轉。狂言義大名「いかう喜ぶわ」

わあ(感)「わに同じ。狂言八句連歌「わあ、これは見事でありやるはいの」同名取用「わあ、これは、大きな川へ出た」

わあめ(感)「わの發する聲。狂言三人片轉「此方」へ通れ。わあ。それに居よ。わあ。わあ。輪燈(名)「燈の一種。形、單に一箇の輪にて、上に鉸具(鉸具)を附けたるもの。支那傳來のものにて、唐鞍(唐鞍)に懸けて用ふ。からあぶみ。

わあわあ(感)「泣き又は騒ぎ立つ聲。わい(助)「わ」に同じ。狂言義大名「なるまいわい」

わい我吾(代)「わ(私)の音便か」われ

わいん(我)に同じ。「畿内の方言」わいん(名)「人」かんしん(韓信)を見よ。誘ひ出すこと。わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

わい(和誘)「名」相手と和談の上にてわい(和誘)「名」わき(脇)の音便。平家(平家)船に櫓(櫓)を立てて、わい(和誘)を入れて、どなたも安う推す様にし候はばや」

行(脅迫)を以て、十三歳以上の男女に對して、猥褻の行爲をなすによりて成立する罪。【便】

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

わい(脇)「脇」大體の脇の右脇、即ち引合(引合)の空際(空際)に當てて、これを塞ぐためのもの。札(札)の上を染革にて包み、壺板に草摺を附けて、鍔の草摺と並ぶやうにし、これを、脇摺の草摺又は馬手(馬手)の草摺といふ。わきあて。保正安房の國の住人丸の太郎も、鬼田の典三に、脇立射させて引き退く」

をゑわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

わうぎ 横議 [名] ほしいままに政事を議すること。

わうきし 王微之 [名] 「人」支那東晉の人。字は子猷。王羲之の子、王獻之の兄。性、放達、官を棄てて、會稽の山陰に棲し、竹を愛して、これを植ゑしめ「何ぞ一日も此の君なかるべけんや」と云へり。又空宅の中に寄居せしことあり。官は黃門侍郎に至れり。

わうきし 王羲之 [名] 「人」支那東晉の書家。字は逸少。司徒王導の從子。隸書、草書に於て、古今獨歩の稱あり。官、右軍將軍、會稽内史に至る。その子猷之字は子敬も、草書を善くし、併せて二王と稱せらる。

わうきふ 厓給 [名] 次條を見よ。

厓給の仲人 [句] 貧者の賣る者を受け取りて、富者に買はせ、代金を受けて、貧者に與へ、自ら手數料を得る者。牙儉(一)。一説に、少しの利を得る仲人なりと。庭訓雜載「辯舌博覽類、厓給仲人等、尤大切也」。

わうきん 黃董 [名] 「植」きげん(黃董)。

わうきやく 横逆 [名] ほしいままにて、よこしまなること。非道。横道。

わうきやく 横虐 [名] ほしいままににして、しへたぐること。

わうきゆう 王宮 [名] 王の住む宮殿。皇

わうきよ かくは 横渠學派 [名] 支那宋の張横渠の學派。

わうきよく 枉曲 [名] 法を枉(こ)げて罪すること。冤枉。冤罪。[よこしま]。

わうきよく 黃玉 [名] 「礦」[英] Topaz 斜方晶系に屬する柱狀の石。成分は鐵と礬土との珪酸化化合物。質、硬くして脆く、透明又は半透明にして、無色又は黃赤、紫青、綠、瑠璃等の諸色を呈し、我國にては、美濃・近江に、主として無色のものを産す。黃色にして美なるは寶石とす。とつばあず。

わうきよやう 王漁洋 [名] 「人」わうして

わうく 横句 [名] 一いつはりの語。妄言。

太平記 誠に不思議の神託なり、但し、かやうの事には、何にも、横句・謀計あつて、傳奏の短才、人の嘲哂となること多ければ、よくよく事の實否を尋ね聞きて」。

わうくつ 枉屈 [名] 身を屈して、へりくだること。[抑へつけられて屈伏すること。冤罪に落さるること]。

わうくわ 王化 [名] 君王の徳化。平家「平氏、王化を蔑如し、政道に憚る所なし」。

わうくわ 横禍 [名] 不慮のわざはひ。

わうくわ 王瓜 [名] 「植」からすり(烏瓜)の漢名。

わうくわ 横臥 [名] 横さまに臥すること、

わうくわ 黄卷 [名] 「わうくわん」(黄卷)を見よ。次條に同じ。

黄卷赤軸 [句] 「佛」もと黄色の紙に記し、巻軸を赤色にせしよりいふ。佛敎の經卷。黄紙(一)。朱軸。遠藤天臺下根の行者は、黄卷赤軸を把へて、讀誦、書寫、解説し」。

わうくわん 往還 [名] 往くことと、還ること。ゆきかへり。往来。

往還。雲霧、わうくわんの人」。

わうくわん 往來 [名] 往来すべき路。街道。道路。往来。丹波興隆海

道は往還」。

わうけ 王家 [名] わか(王家)に同じ。

わうけ 王氣 [名] 王者たるべき氣品。貴族の態度。「古語」狭衣、わうげぞ附かせたまへる御氣色」。

わうけい 王卿 [名] 王と執政の大臣と。正統記「その日は、御醍醐の御門、中務の親王とて、王卿の座につかせおはします」。

わうけい 往詣 [名] 貴人の許に詣ること。[参詣に同じ。盛衰記

「往詣參籠の人」]

わうけいこう 王荆公 [名] 「人」わうあん

せき(王安石)に同じ。

わうけう 王喬 [名] 「人」支那漢代の仙人。周の靈王の太子にして、好んで笙を吹き、後、白鶴に乗りて登仙せりと傳ふ。

わうけき 横撃 [名] 側面より攻撃すること。

わうけつえん 黃血鹽 [名] 「化」[英] Potassium persulfate of potash 皮毛、血角、蹄

などの如き、窒素を含有する有機物を、炭酸カリウム及び鐵と共に熱し、更に水に溶解して結晶せしめて得る、黄色の物質。この水溶液に第二鐵鹽の水溶液を加ふれば、綠青色の沈澱物即ちプロシヤン青又はペレンスとて、染料及び繪具に用ふるものを生じ、又、稀硫酸を加へて蒸溜すれば、シヤン化水素を生ず。黄色鹽、黄色血鹼。ふえろしやん化かりうむ。

わうげく 王氣附く [動自四] 王者たる氣品見ゆ。貴族の如く見ゆ。「古語」源氏、わうげつきて、けだかうこそおはします」。

わうげふ 王業 [名] 國王の國を統治する事業。[王者の國を統治する事業。[新業に對して]。]

わうけん 王權 [名] 國王の權力。王者の權勢。

わうげん 王言 [名] 王者のことば。綸言。

わうげん 横言 [名] ほしいままなる言葉。横暴なるものいひ。太平記「賢王の横言」。

わうげん 横痃 [名] 「醫」よね(横根)に

わうげんし 王獻之 [名] 「人」わうきし(王羲之)を見よ。

わうげんじやう 王彦章 [名] 「人」支那

五代の梁の人。字は子明。武人にして字を知らず。しかも、その忠誠は天性に出づ。自ら俚語を作りて「豹死留皮、人死留名」と云へり。驍勇無比なり、跳足にして能く棘を踏み、その戦ふや、二つの鐵槍、重量各百斤なるを用ひ、一は鞍上に置き、一は手に持し、所隨して馳突し、疾きこと飛ぶが如く、向ふ所敵なし。軍中、因つて王鐵槍と號す。後唐(一)の軍に擒にせらるるに及び、莊宗(一)これを諭して降らしめんとしたれども、屈せず、遂に殺さる。

わうげんにかう 往還二回向 [名]

「佛」往相回向と還相(一)回向との併稱。

わうげんひ 王元美 [名] 「人」わうせい

「王世貞)に同じ。

わうこ 往古 [名] おほむかし。上古。上

世。太古。往昔。[「往古、ワウゴ」]

わうこ 往古 [名] 前條の轉。運歩色集

わうこ 枉顧 [名] わうが(枉駕)に同じ。

わうこ 王公 [名] 「史記」の老子傳に「自王公大人、不能器之」とあり。王と公と。貴顯。貴族。

王公の孫 [句] 「後漢書」に「蔡邕……開玉璽至門、倒屣迎之、曰、此王公之孫、有異才、吾不、如也」とあり。王孫と公孫と。貴族の子孫。貴公子。

わうこ 王侯 [名] 王と諸侯と。

王侯將相、寧(一)ぞ種(一)あらんや

「史記」の陳涉世家に「壯士不死即已、死即舉大名耳。王侯將相寧有種乎」とあるに本づく。王侯も、武將も、宰相も、先天的血統に依るにあらず、誰にても、心がけ次第にてなることを得。

「諺語」]

王侯に事へず、その事を高尙にす

「易經」の蠱卦に「不事王侯、高尚其事」とあり。隱居して、操守あるをいふ。

わうこう 王后 [名] 「詩經」の大雅文王有聲篇に「王后烝哉」とあり。きさき。皇后。

わうこうるお 横口類 [名] 「動」魚類中、板鰓類に屬する一目。口は、兩鼻孔と共に頭の下面に在りて横裂し、皮膚は、顆粒狀の鱗にて被はる。鰻類、鰻類の二亞目に分つ。

わうこ 往古 [名] 往古大判 [名] けいちや

うおはんきん(慶長大判金)に同じ。

わうこ 往古 [名] けいちやうきん(慶長銀)に同じ。

わうこ 往古 [名] けいちやうきん(慶長銀)に同じ。

わうこ 往古 [名] 王の統治する國。

「英 Kingdom」君主制の國の中に、第二等(即ち帝國の次に位する國。例へば西班牙(一)、伊太利など。

わうこ 枉告 [名] ぶつ(誣告)に同じ。

わうこ 横谷 [名] 「地」[英] Transversal valley] 山脈の軸線に平行せずして、これを横斷せる谷。(縱谷に對して)。

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わうごん(慶長小判)に同じ。

わうごん(金鳳花)「名」「植」(金)科に

属する灌木又は小喬木。枝上に針あり

葉は羽状複葉をなし、各小葉は葉柄を缺

き、花辦に距を具ふる赤黄色の花を開

き、雄蕊は赤色にして、花冠よりも長く

細長き二三寸の莢を結ぶ。印度等の熱帯

地方に産す。おほごてふ。

わうごん(黄金)「名」「礦」(金)に

同じ。黄金。貨幣。おほばんきん

(大判金)の俗稱。黄金なるによりて

いふ。だいばん(大銀)の聲。「但語」

黄金の術「句」れんたん(煉丹)に同じ。

嚴華雜詠衰病日に冒して、黄金の術、成

り難し。

黄金の膚「句」(佛)紫磨黄金(シヤウ

モウ)の膚に同じ。諸曲卒都婆小町「砂を塔と

重ねて、黄金の膚こまやかに」

子に黄金滿體を遺すは、一經に如か

ず「句」あけん(章賢)を見よ、「謬語」

わうごん(黄岑)「名」「植」こがねは黄金

花「句」に同じ。

わうごんのすず(黄金鈴)「名」「植」へひ

のほろ(蛇不登)に同じ。

わうごん(黄金梅)「名」「植」梅の一

品種。花細かにして疎らに、蕊の末に黄

色を多く露出するもの。

わうごん(黄金佛)「名」「黄金にて

造りたる佛像。黄金に陥りたる人を

嘲りていふ語。「次條に同じ」

わうごん(黄金分劃)「名」「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

黄金分劃「名」「數」(英)「數」

わうさう(王相祭)「名」陰陽家にて、

王相神を祭ること。

わうさう(王相神)「名」陰陽家にて

祭る王神と相神と、毎月方角を變動すと

て、その方角を月塞(ツキサ)と稱し、移轉修

築などを思ひ、王相。王神。

わうさう(往相回向)「名」(佛)わ

うさう(往相)に同じ。(還相)回向に對

して。

往相回向の願「句」(佛)阿彌陀如來

の四十八願中の第十七願。

わうさう(往來)「名」(佛)往來

の四十八願中の第十七願。

わうさう(往來)「名」(佛)往來

の四十八願中の第十七願。

わうさう(往來)「名」(佛)往來

の四十八願中の第十七願。

わうさう(往來)「名」(佛)往來

の四十八願中の第十七願。

わうさう(往來)「名」(佛)往來

の四十八願中の第十七願。

わうさう(往來)「名」(佛)往來

わう(横恣横肆)「名」わがまま。きま

わう(黄紙)「名」黄色なる紙。古、佛經

を書くに用ひたり。平家(一生不犯の)

の座主(一)、かの箱を開けて見たまふに

佛經(黄紙に書ける文)「一卷あり」

黄紙朱軸「句」(黄卷)「赤軸」に

同じ。

わう(皇子)「名」天子の御子。みこ。み

や。みこのみや。みこのみこと。

わう(王子)「名」(八王子)に同じ。平家

「山王七社王子眷屬」(京都より紀伊國

熊野神社への參詣の途次の所所に、若王

子(王子)を勸誘(ササヰ)して祀り、所在の地

名その他を冠らせて呼びしもの。例へ

ば、攝津國の久保津の王子、阿倍野

の王子、和泉國の堺の王子、紀伊國の

切目(一)の王子、那智の王子など。全

體にて九十九箇所、京都の若王子神社を

合はせて、百箇所と定められしがごとし

といふ。平家宿願あるに依つて、熊野へ

參りけり。切目の王子の御前にて、平家

「藤代の王子を始として、王子、王子、伏し

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

わう

たる者、王事のためには、家事を捨てておきて、力を盡す。〔諺語〕「廢棄」不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>父命辭王命、以<sub>レ</sub>王命辭父命、不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>家事辭王事、以<sub>レ</sub>王事辭家事」といふ本文あり。

わうじ 王寺〔名〕「地」大和國北葛城〔山〕郡にある村。龍田口の別路たる龜瀬越〔山〕の東口。鐵道關西本線と和歌山線との分岐點。

わうじ 往事〔名〕過往時の事。過去に。し。往年。往世。往代。以前。

わうじ 王子猷〔名〕「人」わろきし〔王徽之〕に同じ。

わうじ 王秋〔名〕陰曆八月の異稱。

わうじ 黃色〔名〕くわうしよく〔黃色〕に同じ。運歩色葉集、黃色、ワウシキ。

わうじ 黃鐘〔名〕次條の略。『圓滿相應の御神とて、黃鐘に調べたり』

わうじ 黃鐘調〔名〕じふにてうし〔十二調子〕を見よ。源氏「琵琶……わうしきてうの掻合〔々々〕」。『廢棄』順に甲の音〔々〕より乙の音に下〔る〕時は、肺の臓より金の音に同ず。故〔々々〕に、土の色を黃〔々〕と名づけ、金の色を鐘〔々〕と名づく。當知、土與金は陰陽の義にて、男女相應の儀式なり。……又、この調子は、呂〔々〕の音〔々〕なり。

わうじ 王權現〔名〕次條の略。

わうじ 王子神社〔名〕武藏國北豐島〔山〕郡王子町に鎮座せる神社。祭神は伊弉諾〔神〕尊、伊弉册〔神〕尊、速玉男〔神〕尊、神事解男〔神〕尊、天照大神。元亨中、鎮主豐島清光が紀伊國の熊野神社を勸請〔々々〕せるなりともいへど、緣起には、康平年中、源義家、奥州平定の歸途、社頭に甲冑を納めし由を傳ふ。後醍醐天皇の御代、郡の豪族豐島氏の崇敬を始として、小田原の北條氏及び徳川氏、亦社領を寄せ、明治元年、勅祭に準じて、勅使參向、奉幣の儀ありたり。舊稱、王子權現。

わうじ 王侍從〔名〕諸王にて、侍從の職を勤むる人。大龜わうじじゅうな

と聞えて、殿上人にておはしましける時

わうじ 王室〔名〕帝王の御家。王家。

わうじ 王質〔名〕「人」らんか〔爛柯〕を見よ。支那北朝の臣。字は子野。宰相王旦の姪。揚郡に師事す。家世世富貴なるにかかはらず、獨り自ら奉ずること簡素、世、以て賢となせり。『日。わうじ 往日〔名〕過去の日。先日。過わうじ 往日 皇子造〔名〕かすがつくり〔春日造〕に同じ。

わうじ 横日性〔名〕「植」『英』E. nshiohokronm. 植物の葉の、日光照射の方向にほぼ直角の位置を取る性質。葉の同化作用は、日光の力に依る所多きが故に、葉にこの性質あるは、極めて好都合なり。〔向日性・背日性に對して〕

わうじ 王士禎〔名〕「人」支那清の大官且つ詩人。字は貽上、阮亭又は漁洋と號す。官、刑部尙書に至り、詩を以て海内に推重せらるること五十餘年、その詩神韻を主とす。康熙五十年卒す。年七十八。乾隆三十年、謚を文簡と賜ふ。『帶經堂集』漁洋詩話、池北偶談、居易錄、香祖筆記等の著あり、選ぶ所、唐賢三昧集、唐人萬首絕句等あり。

わうじ 王子道〔名〕武藏國王子權現への參詣の通路。一茎、人足も霜枯時や王子道。

わうじ 王臣〔名〕帝王の臣。朝臣。

わうじ 横震〔名〕「地」英』E. nshiohokronm. 山脈の軸線を横斷し、それと直角の方向に震動する地震。斷層が山脈の軸線を横斷せる場合に起る。〔縱震に對して〕

わうじ 往信〔名〕信書を發送すること。〔返信に對して〕

わうじ 往診〔名〕醫師が病人の家に赴きて診察すること。『を見よ。』

わうじ 王神〔名〕わうさうじん〔往相神〕

わうじ 王辰爾〔名〕「人」船連〔舟連〕の祖。百濟國主貴須王の孫にして、應神天皇の御代、我國に來投せし、辰孫王の曾孫なる午定王の次子。博覽多識、通ぜざるなく、欽明天皇の朝、船賦を錄せしによりて、姓、船氏を賜はる。敏達天皇の時、高麗よりの上表の文、三日を經て、なほ解する者なかりしを、一讀して解し、後、又、鳥羽に書して上表せし時、湯にて蒸し、帛に印して讀む。天皇、その才に感じ、厚く賞し給へり。

わうじ 王者〔名〕王たる人。帝王。國王。王統。王道。王を以て天下を治むる君。帝王。〔霸者に對して〕

わうじ 王者は四海を以て家となす〔句〕

『後漢書』に「王者以四海爲家、以三兆民爲子」とあるに本づく。王者は、天下を觀ること、一家の如くす。〔諺語〕

わうじ 王舍〔名〕「地」『わうじやう』

わうじ 王舍の略。『山城國平安京の稱。聖武天皇有便於弘三、一乘、王舍不遠、無煩於率三群僚。』

わうじ 横斜〔名〕横に傾きてあること。ななめ。はす。

わうじ 往者〔名〕わうじ〔往時〕に同じ。

わうじ 枉車〔名〕わうが〔枉駕〕に同じ。

わうじ 王將〔名〕將某の駒の一。敵味方雙方に一箇づつありて、その主腦となり、他の駒は、すべてこれを保護する目的にて動く。四方四隅に一格づつ自由に移動するを得、その敵に攻められて、動くこと能はざるに至れる時、負とす。二箇の内、一箇は「玉將」と書くを法とし、一説には、玉將が元來の名なりといふ。王。王將も歩の物〔句〕勇將も、窮すれば、敵の一卒に制せらる。〔諺語〕

わうじ 横障〔名〕横たはりて、妨となること、又その物。さまたげ。さはり。邪障。『曲曲』曲曲「あら、なつかしやと言はん」とすれば、横障の雲の隔か、悲しやな。

わうじ 王祥〔名〕「人」支那の孝子。二十四孝の一。字は休徵。琅玕臨沂の人。繼母のために、愛を父に失ひたれども、怨みず、母嘗て、冬天に生魚を欲せし時、衣を解き、將に氷を割きて水に入らんとせしに、氷自ら解けて、雙鯉躍り出

づ。母、又黃雀の炙を思ひ、祥これを得んとせに、黃雀數十飛びて、その幕に入る。又、家人に丹雀あり、實を結びしを、母命じて守らしめしに、風雨毎に樹を抱きて泣きたりといふ。官、太常侍に至り、萬歲亭侯に封ぜらる。晉の武帝の時、太保に拜し、爵、公に進む。泰始五年死す。諡して、元といふ。『支那梁の大官。學者王筠の子。陳に仕へて、黃門侍郎となる。その子王僧、文學を以て著はる。』

わうじ 王嬌〔名〕「人」わうせうくん〔王昭君〕に同じ。

わうじ 王城〔名〕帝王の住み給ふ城。宮城。帝城。『佛』佛陀の居處。

わうじ 皇驪王驪〔名〕雅樂の一。唐樂にて、平調〔々々〕に屬す。舞、今は傳はらず。わうさう。和名、皇驪、皇如王。『遷馬わうじやうといふ樂。』

わうじ 往生〔名〕「佛」現世を去りて、淨土に往き、その蓮華の中に化生のすること。往生安樂國。『死ぬること。この世を去ること。』『文字は假借にて、實はあうじやう〔厭狀〕の訛なりともいふ。』不本意ながら承知すること。餘儀なく斷念すること。あふじやう。『あふじやう〔自狀〕に同じ。』

往生安樂國〔句〕「佛」前條〔句〕に同じ。

往生一定〔句〕「佛」信念を得て、彌陀の淨土に往生するは必定なること。

往生觀念佛〔句〕「觀念も、往生と同義に用ふる語を念佛と續けていへる語。わうじやう〔往生〕に同じ。〔俚語〕

往生極樂〔句〕「佛」わうじやう〔往生〕に同じ。

往生淨土〔句〕「佛」前條に同じ。『著美を落して、いよいよ往生淨土の勤念の意なり。』

往生の業〔句〕「佛」『往生要集』に「往生之業、念佛爲先、選擇集に「南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本」とあり。淨土に往生する業因〔々々〕。念佛をその最も重要なものと説く。



液。その作用、極めて猛烈にして、通常の酸類の作用を受けざる黄金・白金の類をさへ溶解す。

わうせい 王政「名」帝王のまつりごと、王政復古「句」天下の政事の、再び古にかへりて、天子御自身に、政事を統べ給ふやうになること。明治初年の改革。御一新。

王政維新「句」前條に同じ。「度」。

わうせい 王制「名」王者の定めたる制

わうせい 王姓「名」わし(王氏)に同じ。續編除三王姓、從三百姓、月五烟、口一百一。

わうせい 横政「名」ばうせい(暴政)に同じ。

わうせい 往世「名」わうじ(往時)に同じ。

わうせい 旺盛「名」さかんなること。隆盛。繁盛。

わうせい 黄精「名」植「名」なごり(鳴子百合)の漢名。鳴子百合の根莖を薬用とする時の稱。

わうせい 王政史「名」天下の政事の、王室より出てある間の歴史。(王朝時代の歴史。(武家史に對して)「を見よ。

わうせい 王世子「名」わうぞく(王族)を

わうせい 王世子妃「名」わうぞく(王族)を見よ。

わうせい 王世貞「名」支那明の文人。字は元美、鳳洲、又、弇州山人と號す。性、穎悟、書、目を過ぐれば忘れず、その文、李攀龍と共に、秦漢以上を慕ひ、務めて模擬剽襲を事とし、世に李王の古文辭と稱す。累官して、南京兵部侍郎に至り、萬曆十八年卒す。年六十五。

わうせい 王昭君「名」支那前漢の元帝の宮女。名は嬋。昭君はその字。南郡の秭歸(今の湖北省の)の人。王穰の女。元帝、後宮多くして、常に見ることを得ず。乃ち畫工をして像を畫かしめ、像を案じて、これを幸す。諸の宮人皆畫工に賂ひしに、昭君のみ肯ぜずして、見ゆるを得ず。竟寧元年、匈奴の呼韓邪單于(せうじ)來朝し、美人を得て閼氏とせんことを求むるや、元帝、又、像を案じて、昭

君をして行かしむ、去るに及びて召見し、悔ゆれども及ばず。昭君、胡地にありて、帝を怨み、怨思の歌を作り、後、毒を服して死す。胡地の草色、皆黄なるに、昭君の墓の草のみ青かりきといふ。後世の詩人、畫家、昭君を題目とする者多し。西晉の時、武帝の父司馬昭の諱を避けて、明妃と呼べり。雅樂の一。唐樂にして、平調曲せるもの。歌調は我國に傳はらず、又我國への傳來も詳かならず。

わうせい 往昔「名」わうじ(往古)に同じ。

わうせい 王績「名」支那唐の學者。字は無功、東臯子と號す。性、酒を好み、飲むこと五斗に至るも亂れず。武徳の初、門下省に待詔せしめ、官酒を給すること、日に三升。人の、待詔、何事か樂しきと問へるに、良醪樂むべしと答ふ。侍中陳叔達、これを聞きて、日に酒一斗を給す。時人、因りて、斗酒博士と稱す。貞觀中、陪書を著し、又、五斗先生傳、醉鄉記等の著あり。

わうせい 横截「名」よこさまに斷ち切る。横絶「名」横ぎりわたること。

わうせい 横絶「名」横ぎりわたること。

わうせい 横説堅説「句」縦横自在に説くこと。

わうせい 横線「名」横に引きたる線。よ

わうせい 汪然「貌」水の廣く深きさま。

わうせい 横線小切手「名」商「英」Crossed cheque小切手の安全を計るため、その面に、斜に二筋の朱線を引きたるもの。而して、その間に單に「銀行」と書くものは、普通横線小切手と稱し、「何何銀行」と書く者は、特別横線小切手と稱す。前者は如何なる場合にても、銀行外の、個人には支拂はれず、後者の場合には、だ、その指名せられたる銀行のみに支拂ふ。故に、安全なる送金法として用ひらるものならず、銀行は、華客のため、これに對して立替拂をなし、又、これを所持する個人は、自己の取引銀行に、これを預け入ることも得るが故に、實際上、流通力もさまで制限せらるることなし。筋引(小切手)。

わうぞく 王族「名」帝王の親族。

わうぞく 王族の禮遇を受ける族稱の一。即ち朝鮮の李王家の王及びその世嗣たる王世子並びに王妃王世子妃以下の一族。りわうけ(李王家)参照。

わうぞく 黄粟「名」秋の半ばの頃の、黄なる粟。黄粟琥珀の葉は、仲秋の黄粟のごとし。

わうぞん 王孫「名」帝王の子孫。皇族の御孫の、親王の宣下なきもの。貴族の子弟。貴公子。

わうだ 横截「名」魚形水雷の尾部、又、潜水艇に取附くる、水平の舵。前者のは、水雷を所要の深度に進行せしめんがため、後者の、艇の上下動をなさしめんがためにす。

わうたい 横隊「名」横の方向に並列する隊形。(縦隊に對して)。

わうたい 横體「名」水泳術にて、水面に横臥する體形。水府流神傳流の基本とするもの。進行力迅速なるが故に、速流又は急進等の場合に適すると同時に、平體よりも浮揚力弱く、且つ練習困難なり。(平體立體に對して)。

わうたい 皇帝「名」わうてい(皇帝)に同じ。わうたいは(皇帝)破陳樂の略。十聖皇帝以下の祕曲。「の略。

わうたい 王代「名」わうたいもの(王代物)の略。往代「名」わうじ(往時)に同じ。太平記「治承の往代に、平相國清盛公天下の權を執て」。

わうたい 王代物「名」時代物の内、王朝時代即ち源平以前の時代の事蹟を脚色せる演劇。王代。

わうたい 王道「名」天下に王たる者の行ふべき道。仁義、道德を以てする政道(霸道に對して)。

わうたい 横道「名」正道に外れてあること。よこみち。邪道。不道。

わうたい 横道「名」同。八卦卦辭「今日の内一貫目、きと調へ進ませう。私が少しの間横道致せば、事が濟む」に同じ。

わうたい 黄道「名」天「くわうだう」黄道。

わうたい 王導「名」支那東晉の名臣。字は茂弘。王覽の孫、王羲の子。元帝の琅邪王たりし時、親交あり。帝、下邳に鎮するに及び、安東司馬となり、軍謀策策與り知らざる無し。三代に歷仕し、累官して太傅に至り、始興公に封ぜらる。晉の中興、導の功多し、從父兄王敦の叛するや、大義を以てこれを滅せり。咸和五年死す。年六十四。

わうだう 黄道吉日「名」くわうだうきにち黄道吉日に同じ。

わうだう 黄道吉日「名」くわうだうきにち黄道吉日に同じ。

わうだう 横道者「名」わうちやくもの(横著者)に同じ。狂言體「常に横道者でござる程に」。

わうだう 王澤「名」帝王のめぐみ。天子

わうだう 横奪「名」無理に奪ふこと。よこどり。横領。

わうだん 黄丹「名」山梔色(の)の、紅色を帯びたるもの。古、皇太子の御袍は、綾をこの色に染めて用ひられたり。大寶令「皇太子禮服、……黄丹衣、牙笏白袴」。

わうだん 黄疽「名」膿汁が、その排泄路に障礙を生ずるに因りて、肝臓内に鬱積し、遂に淋巴管に於塞生じ、その上方の毛細管内の膿汁鬱積し、終に破裂して、直接淋巴道若しくは血管内に入り、或は又、肝細胞の機能異常のために、その細胞内に生じたる膿汁が、膽道に向ひて分泌せずして、淋巴道若しくは血管内に入り、

わうだん 黄疽「名」膿汁が、その排泄路に障礙を生ずるに因りて、肝臓内に鬱積し、遂に淋巴管に於塞生じ、その上方の毛細管内の膿汁鬱積し、終に破裂して、直接淋巴道若しくは血管内に入り、或は又、肝細胞の機能異常のために、その細胞内に生じたる膿汁が、膽道に向ひて分泌せずして、淋巴道若しくは血管内に入り、

わうだん 黄疽「名」膿汁が、その排泄路に障礙を生ずるに因りて、肝臓内に鬱積し、遂に淋巴管に於塞生じ、その上方の毛細管内の膿汁鬱積し、終に破裂して、直接淋巴道若しくは血管内に入り、或は又、肝細胞の機能異常のために、その細胞内に生じたる膿汁が、膽道に向ひて分泌せずして、淋巴道若しくは血管内に入り、

わうだん 黄疽「名」膿汁が、その排泄路に障礙を生ずるに因りて、肝臓内に鬱積し、遂に淋巴管に於塞生じ、その上方の毛細管内の膿汁鬱積し、終に破裂して、直接淋巴道若しくは血管内に入り、或は又、肝細胞の機能異常のために、その細胞内に生じたる膿汁が、膽道に向ひて分泌せずして、淋巴道若しくは血管内に入り、

わうだん

遂に、その色素のために、身體の組織の黄色を呈する病。きばやまひ。太平軍將軍宮は、……、黃疸といふ御いたはり出て来て、御通身黄になられたまひて」

わうだん 横斷【名】横に切斷すること。(縦斷に對して) ②よこぎること

わうだん 枉斷【名】法律を枉(く)げて處斷すること

わうだん かはせ 横斷爲替【名】「商」英 Cross exchange 間接爲替の一。二國間に直接爲替の取組を爲すを得ざる場合にその二國以外の國を経由して、支拂を決済するもの。經由する國が一箇國なる時は、單一横斷爲替、數箇國なる時は重複横斷爲替といふ。經由爲替。(裁定爲替に對して)

わうだん じん 黃疸神【名】黃疸の病を司るといふ神。日本振袖始「疑も無き黃疸神」

わうだん じゆぎ 横斷主義【名】資本階級と勞働階級とを、各上下兩段に分ちて、その組合を組織し、以て相對立せしめんとする主義

わうだん じゆけつ びやう 黃疸出血病【名】「醫」わいるじびやう(ワイル氏病)に同じ

わうだん ひかう 横斷飛行【名】飛行機にて山河・海灣を横ぎりて飛行すること

わうだん めん 横斷面【名】英 Cross section 物體を、その長さの方面に直角なる垂直面に沿ひて切りたる切口。(縦斷面に對して) ②を示せる圖

わうだん めん 横斷面圖【名】横斷面を「ち」王地【名】わうど(王土)に同じ。王室、王地に妊まれて、詔命を對捍せんも、恐あり」諸曲(土類)「神國、王地の恵みを頼み」

わうちやうせい 横地性【名】「植」英 Trans-ecotism 植物の諸器官中、側根地下莖葡萄莖などの如く、重力の方向と直角をなして向ふ性質。(向地性、背地性に對して)

わうちやう 横長【名】横に長きこと、又

わうちや

その物。わうちやく 横著【名】「ちやく(著)は接尾語」不正と知りつつ行ふこと。横道。②なまけること。怠惰

わうちやく 横笛【名】よこぶえ横笛に同じ。運歩色葉集「枉著、証著、ワウヂヤク」

わうちやく もの 横著者【名】横著なる人。横道者。狂言「種」酔うてふせりを。た。おのれ、何とせう。横著もの、やい」横著者の節句(句)「懶者(びん)の節句」に同じ。(諺語)

わうちやく えん 王仲俺【名】「人」わうちやく 王女【名】わうによ 王女に同

わうちやく 王手【名】將棋にて、直接に王將を攻め立つる手だて。見教訓「何事も王手といひて、立ち去りぬ」

わうちやく 横堤【名】河身と殆ど直角に設けて、河底の一部を狹窄ならしむる堤防。

わうちやく 王朝【名】「王」の朝廷。②次

わうちやく じだい 王朝時代【名】源賴朝の親政を鎌倉に開きし以前、天皇の親政の時、時代、殊に、その奈良朝平安朝の時代、武家時代に對して

わうちやく 横笛【名】よこぶえ横笛に同じ。わうちやく 黄鐵鑛【名】「鐵」くわてつわう(黄鐵鑛)に同じ

わうちやく 王鐵槍【名】「人」わうげんしやう(王彦章)に同じ

わうちやく 横轉【名】左右に回轉すること。わうちやく 王都【名】國王の都せる地。帝都。皇都

わうちやく 王土【名】國王の統べ治むる地。わうちやく 黄土【名】赤土(赤)を水飛して製し、顔料、又、材木の色附などに用ふるもの。運歩色葉集「黄土、ワウド」

わうちやく 王統【名】帝王の血統。皇統。わうちやく 王通【名】「人」支那隋末の大儒。字は仲俺。河東龍門の人。長安に至

り、太平十二策(今傳はらず)を奏して、用ひられず。河汾に居りて門生に教授し、中説(一名、文中子)を作りて、論語に擬し、又、六經に擬して禮論、樂論、續書、續詩、元經、贊易を作りたれども、今日存するは元經(十卷)のみ。大業十三年卒。年三十四。門人諡して文中子といふ。唐の王勃の祖父なり

わうちやう

わうちやう 黄銅鑛【名】「鐵」くわてつわう(黄銅鑛)に同じ

わうちやう 王難【名】「法華經の普門品に「或遭王難苦、臨刑欲誅終、念彼觀音力、刀尋段段壞」とあり國王より受くる災難。諸曲(龍王)「王難に遭ふとも、劍」

わうちやう 横難【名】不慮の災難。横災。②「段段に折れなんの經文は、疑はず」

わうちやう 横難、ワウナン」

わうちやう 黃丹【名】わうだん(黃丹)に同じ

わうちやう 王日【名】はちわうにち(八王日)に同じ

わうちやう 皇仁主仁【名】次條の略

わうちやう 皇仁庭・王仁庭【名】雅樂の一。高麗樂にて、壹越(いつく)調に屬す

わうちやう 皇女【名】くわうちやう(皇女)に同じ

わうちやう 王女【名】ぢやわう(女王)に同じ

わうちやう 王女御【名】女王にして、女御にならせ給へるもの。王氏の女御。源氏「兵部卿の宮と聞えし、……、王女御にて侍ひたまふを」

わうちやう 往年【名】過去の年。いにしへ。むかし。先年。往歲

わうちやう 鼻【名】鼻を、極めて高く造りて、赤く塗らるる、神樂の假面。猿田彦の神の面相に象れるものといふ。狂歌「神社の祭に、神輿の前に掛くる面の名を、王の鼻といふ。極めて鼻高く、色赤きものなり」

わうちやう 王霸【名】王者と霸者と。霸王。王道と霸道と。王業と霸業と。わうちやう 横波【名】「理」英 Transverse

わうはい

わうはい 物體の各部の振動が、その傳はり行く方向と直角なる波動。水面に起る波など、これなり。高低波(縦波に對して)

わうはい 黃梅迎春花【名】「植」木犀科に屬する小灌木。高さ二三尺乃至六七尺。莖の上部は、やや蔓狀をなし、その若き部分は綠色を呈す。葉は三小葉より成る複葉にして、對生し、早春、葉に先だちて、六瓣黃色の花を開く。原産地は支那。觀賞用とす。きんばい。

わうはい 黃梅【名】「人」支那湖北省黃州府黃梅縣に生れ、その黃梅山の東禪院に居りしよりいふ。山中、黃梅多しといふ。こうにん(弘忍)に同じ

わうはい 往訪【名】往きて訪問すること。(來訪に對して)

わうはい 王哀【名】「人」支那魏の儒者。二十四孝の一人。字は偉元。至孝にして、廬を父の墓側に結び、且夕拜跪し、柏樹、涕淚のために枯る。母の歿するや、その雷を畏れたるを思ひ、雷鳴毎に墓に到りて、その意を安んずること、生時の如し。晉の代に及び、終身、西向して坐せず、以て、晉に臣たらざるを示せり

わうはい 横暴【名】ほしいままにして、手あらきこと。亂暴

わうはい 黃蘗【名】「佛」わうはいくしやう(黃蘗)に同じ。②「佛」わうはいくしやう(黃蘗)の略。③「人」次條に記せる斷際禪師希運(の)の異稱。江西の百丈海禪師に參して得道し、後、洪州の大安寺に居て、禪風を弘む。相國裴休、宛陵を鎮し、大禪院を建てて、師を請ず。居常、舊山を愛するによりて、大禪院を「に黃蘗寺と呼び、又、自ら黃蘗と呼ぶ

わうはい 黄蘗山【名】「地」支那福建省福州府福清縣にある山。寺あり、建福寺といふ。唐の斷際禪師希運、幼時ここに出家して、黃蘗を名とし我國黃蘗宗の開祖隱元も、この寺に住したり。②まんぶ(萬福寺)を見よ

をふむわ ゐれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

わうばくし 黄檗寺(名) わうばく(黄檗)を見よ。

わうばくしんぎ 黄檗清規(名)「書」祝齋報本尊祖住持梵行調師節序禮法普請運化の十章に分ちて、黄檗宗の規則儀式を述べたるもの。黄檗山萬福寺の第五世高泉禪師の著。

わうばくしゅう 黄檗宗(名)「佛」我國の禪宗の一派の。後光明天皇の承應三年、支那明の黄檗山の僧隠元、清の亂を避けて我國に歸化し、山城國宇治に黄檗山萬福寺を開きたるに創まる。元來臨濟宗に屬せしものなれども、風規、一に明風を模す。黄檗。

わうばくせん 黄檗禪(名)「佛」黄檗宗一派の禪法。

わうばくは 黄檗派(名)「佛」わうばくしゅう(黄檗宗)に同じ。

わうばくはん 黄檗版(名) 黄檗宗の僧鐵眼(号)、宇治萬福寺の隠元より與へられし明本に依り、資を諸方に募りて翻刻せし大藏經の版、又それによりて印刷したる大藏經。寛文三年志を起し、延寶二年、功を竣ふ。鐵眼版。

わうばくほう 王法(名) 王者の法律、命令。天下に王たる道。わうほう(王法)参照。

わうばくほう 枉法(名) おきてを枉げ用ふること。

わうばくほう 枉法(名) 「次條の略」。

わうばくほう 枉法(名) 「正藏」の一。監臨の官の部下より賄賂などを受け、法律を枉げて、裁判すること、又その贓物。枉法。又賄賂を受けながら、裁判は法の如くするを枉法といひ、罪、枉法より重なりき。

わうばくはん 黄飯(名) きめし(黄飯)に同じ。

わうばくはん 碗飯(碗飯)碗飯(名)「わうは碗」の音便。碗は碗の別字。「碗飯」に盛れて勸むる飯。「古語」源氏「わうばんなど常のやうにて」盛衰記「酒肴碗飯かきすゑて、これを侑む」王朝時代に朝臣の殿上に集會せし時、一人又は數人に課して、衆人を饗應せしめしこと。目録

わうばん 倉時代及び室時時代に、宿將老臣が、毎年正月の元三・七日・十五日等に、恒例として、將軍を自己の營中に請じて、盛宴を張りしこと。東鑑治承五年「正月一日、...」事終遷御之後、千葉常胤風獻碗飯相三具、三尺鯉魚。上林下客不知其具」應仁記「今日十五日は、山名の家の碗飯なれば、嘉例の如く被(勒)勅」次條に同じ。

碗飯の振舞(句) わうばんぶまひ(碗飯振舞)に同じ。昔物語「碗飯振舞...」年中遠達しく打過ぎたる親類も、この碗飯の振舞には、年中第一の祝儀なれば、洩れず集まる。又、不通不和にして過ぎし親類、親しき方へ詫して、この碗飯より、寄合の人数に交るなり」

わうばん 黄幡(名) 八將神の一。弓始を、その年の、この神の方角に向ひて行へば、吉なりといひ、又門を建て、土を採るを思むといふ。

わうはんきん 王半山(名)「人」わうあんせき(王安石)に同じ。

わうはんびやう 黄胖病(名)「醫」面色土の如く、眼中より黄色となり、喘息烈しく、手足倦怠を覺ゆといふ病氣。黃疸の類。あをばれ。ぶく病。黄腫。

わうはんぶきやう 碗飯奉行(名) 鎌倉室町兩幕府の諸奉行の一。碗飯に、その儀式及び刀劍、弓箭馬具等の進物の事を掌りしもの。右筆、これに充てられたり。

わうばんぶるまひ 碗飯振舞(名) 徳川時代に、正月などに、親縁者を招き集めて、饗應せしこと。わうばん。昔物語「正月は碗飯振舞として、親類縁者子供残らず呼び寄せ、それぞれ分限に應じ、結構にして、目出度き壽を請ひ、酒盛して遊ぶ」盛大なる饗應。

わうばんやく 碗飯役(名) 碗飯の費用として、人民に課せし税。東鑑修理替物用途並碗飯役事、充二課百姓二事、永停止之、以三地頭得分、可致沙汰二之由被(定)之。

わうひ 王妃(名) 國王の妃。きさき。

わうひ 横被(名)「佛」我國の官僧の、袈裟を偏衫の上に掛くる時、右肩を覆ふに用ふ。長方形なる物。袈裟と同材、同色を用ふ。支那の僧の覆肩衣(フ)より來るといふ。和名横被。

わうひつ 王甥(名)「人」支那魏の學者。字は輔嗣。山陽の人。幼より老子の説を好み、これを説くこと精透なり。果進して尙書郎に至り、正始十年死す。年二十四。周易及び老子に註せり。

わうひびやう 黄白(名)「わうばく(黄白)に同じ。三代男黄白の光物、あたりを照らし、恐ろしき、言はん方なく」

わうふ 王父(名)「爾雅に父之考爲三王父」とあり。死にし祖父の尊稱(王母に對して)。「王者の父(王母に對して)に對して」

わうふ 王符(名)「人」支那後漢の學者。字は節信。臨涇今の甘肅省の一部の人。性耿介俗に同ぜず、馬融張衡崔瑗と親交あり、仕官を肯んぜずして、著述に従ひ、以て當時の得失を論じ、しかも名を顯すことを好まず。故に、その書名を潜夫論(十卷)といひ、恒帝の時に成る。

わうふく 往復(名)「往くことと、復(く)ること。ゆきかへり。ゆきき。往返。往來。目よりり。往返。往來。贈答。應酬。目わうふく(往復切符)の略。四

わうふくきき 往復切手(名) 次條に同じ。

わうふくきき 往復切符(名) 汽車電車などの切符の一枚にて、同一地區間の往復兩用を便するもの。往復。

わうふくはがき 往復葉書(名) いうびんわうふくはがき郵便往復葉書の略。

わうふん 横文(名)「横」横に書きつらぬる文字。歐米各國の文字。よここじ。歐文。

わうふんせいこう 王文成公(名)「人」わうふんせいこう(王陽明)を見よ。

わうふんせいこう 王文成公全

書(名)「書」支那明の王陽明の著述を集録したるもの。三十八卷。陽明の學説は、本書に盡せり。

わうふるきやう 王不留行(名)「植」だうくわんさう(道灌草)に同じ。

わうへい 横柄横平(名) 驕りたる態度を以て、人に對すること。驕傲。新永代藏「傲を知らず、身分を持ち下げ、他人に横平をせず」

わうへん 往返 往反(名)「わうふく(往復)に同じ」

わうふ 王母(名)「爾雅に父之妣爲一王母」とあり。死にし祖母の尊稱(王父に對して)。「王者の母(王父に對して)に對して」

わうほうしゅう 王鳳洲(名)「人」わうせい(王世貞)に同じ。

わうほうつ 王勃(名)「人」支那唐の詩人。字は子安。絳州龍王の人。隋末の大儒王通(号の孫。九歲顔師古の註せし漢書を讀みて、その疵瑕を指摘す。魏州の參軍となりしが、罪を得て、名を除かる。父の福時、往き坐して、交趾令に左遷せらる。勃往きて、父を省せんとし、洪州(今の江西南昌府)を過ぎて、閩都督府のために、滕王閣序を作り、海を渡るに及び、水に墜ちて死せり。時に上元二年。年二十九。最も詩賦に秀て、楊炯盧照隣駱賓王と並びて、初唐の四傑と稱せる。

わうほうほう 王法(名)「佛」わうほう(王法)に同じ。(佛法に對して) 平壽山王の御威光盛んにして、佛法・王法半角(号)なり。太平聖佛法と王法と相此する故」

王法爲本(本)「句」佛淨土真宗にて、眞俗二諦(号)を立て、出世間の法を眞諦門として、信心を本とするに對し、世間道なる俗諦門には、王法を本とすること。政治と宗教との調和を計れるなり。

わうまう 往亡(名) わうまうにち(往亡日)に同じ。

わうまう 王猛(名)「人」支那五胡十六國時代の前秦の名臣。字は景略。北海の劇(今は山東省の内)の人。初、華山に隠れて、ひそかに佐世の志を抱く。桓溫、關

ををわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

わらわ

に入る時、襦袢を着て、これに見え、虱をひねりつつ、當世の事を談ぜりといふ。苻堅に仕へて、信任を得、尙書令太子太傅、輔國將軍に至り、遂に建元八年、丞相となり、同十一年死す。年五十一。

わらまう 王莽【名】「人」支那前漢末の篡立者。字は巨君。漢の元帝の王皇后の弟の子。平帝の時、太傅となり、安漢公と號し、その女を皇后となし、終に平帝を弑し、孺子嬰を立て、自ら攝皇帝の位に居ること二年にして、新皇帝と稱し、漢祚を篡ひ、國を新と號せり。在位十五年にして、更始元年、漢の劉秀、長安に入るに及びて敗死す。年五十六。

わらまうにち 往亡日【名】陰曆の中段凶日の一。一年に、正月七日、二月十四日、三月二十一日、四月八日、五月十六日、六月二十七日、八月十八日、九月二十一日、十月十一日、十一月二十日、十二月晦日の十一回あり。陰陽家にて、この日は外出旅行、出陣等を忌むべしと説く。往亡。

わらまきつ 王摩詰【名】「人」わらゐ(王維)に同じ。

わらみん 王民【名】王者の治下に居る民。王者の民。虞夏周率土の濱皆王民。わらみやうぶ 王命婦【名】王氏にして、命婦たるもの。源氏、暮るれば、王命婦を實めありきたるま。

わらめい 王命【名】王者の命令。帝王のおほせ。平家、王命と申し、武命と云ひ、君に仕へ、世に隨ふ法、通れがたうして。

わらめいせい 王鳴盛【名】「人」支那清の學者。江蘇嘉定の人。字は鳳喈、禮堂。西莊西莊は、皆その號。官、内閣學士、禮部侍郎、光祿寺卿等に至り、嘉慶二年卒す。年七十八。詩文、共に盛名あり。尙書後案(三十卷)、十七史劄記(百卷)、蛾術編(百卷)、耕養齋集、西莊居士集等の著あり。

わらもく 横目【名】「莊子の天地篇に「天子無意二於横目之民一手」とあり」人の目。横目、ひと。人間。横目縦鼻【句】人類の面相。

わらもん 王門【名】王宮の門。

わらもん

王門の伶人【名】「支那晉の戴逵」博學にして、能く琴を彈じ、武陵王、これを召すや、琴を破碎し、その使者に答へて、王門の伶人たる能はずと云ひし故事に基く。富貴の人に陥ふ人の譬。

わらもんきん 横紋筋【名】「醫」英名は横紋筋。索状の束をなして、種種の方向に附著する筋肉。その纖維は、長圓柱形の纖維状を呈し、暗黒、廣闊な、鮮明狭小な、刺戟によりて、興奮し、生理的酸化作用充進し、その化學的酸化作用のエネルギーは力のエネルギーに變化して、收縮運動を起し、よく意思に隨ふ故に、隨意筋ともいふ。(平滑筋に對して)

わらやう 汪洋【貌】廣大に對して。わらやうめい 王陽明【名】「人」支那明の大儒。名は守仁、字は伯安、陽明と號す。浙江省餘姚の人。初、朱子格物の學を講ず。正徳年間、言議を以て、貴州の龍場驛丞に謫せられ、窮荒の境にありて、日に自省し、忽ち、格致はこれを心に反求すべく、事物に求むべからざる理を悟る。その學、陸象山より出て、知行合一の説を唱ふ。友人門生と問答せし語を輯めたる書に、傳習錄あり。寧王宸濠の反を平げ、同七年兵部尙書を以て、安南に卒す。年五十七。隆慶の初年、新建侯を贈られ、諡を文成と賜ふ。著す所、王文成公全集あり。やうめいがく(陽明學)參照。

わらよきよ 王餘魚【名】「動」かれひ(鰈)の異名。

わらうらひ 往來【名】往くことと、來ること。ゆきき。ゆきかへり。往返。往復。往還。來往。ゆききする人。一代男「新聞をすまられ手紙をききしきく改め、往來の笠鉢巻を取らせけるに」目ゆききの道。往還。街道。四音信又は訪問。まじはり。交際。往復。平賀入道相國、近江米二萬石、北國の織延(つ)び三千石、往來に寄せらる。これを、谷谷、嶺嶺に引かれけるに」目手紙のやりと

り。往復。目手紙の贈答の文案を集め

わらう

記せる書、「明衡往來」「商賈往來」佛「釋迦如來の衆生」濟度のため「實」この土に、屢ば來生すこと。諸曲、轉轉に、この土に、屢ば來生すこと。既に入千度に及びたりといふこと。

往來の軸【句】せん(經)に同じ。

往來八千返【句】佛「梵網經の卷下に見ゆ」釋迦如來が衆生を濟度のために、この土に來生すること、既に八千度に及びたりといふこと。

往來を妨害する罪【句】「法」わらうい(旅券)に同じ。

わらういぎ 往來切手【名】りよけん(通行税)に同じ。

わらういぎ 往來止【名】道普請、その他、道路に故障ある時、人の往來を止むること、又その標、通行止め。みちどめ。

わらういばう 往來妨害罪【名】「法」陸路水路橋梁を損壞し、又は、運搬して、往來の妨害を生ぜしめ、又は、故意若しくは過失によりて、鐵道、鐵道の標識、燈臺、浮標を損壞し、或はその他の方法、若しくは、汽車、電車、船舶の往來の危険を以て、汽車、電車、船舶を損壞し、又は、人の現在する汽車、電車、船舶を損壞し、或は破壞するによりて成立する罪。

わらういもの 往來物【名】往來の書籍。わらうらん 黃蘭【名】「植」きんらん(金蘭)に同じ。

わらうりやう 王領【名】帝王の領地。王

わらう

わらうりやう 横領【名】ほしいままに領有すること。よこどり。むりどり。横奪。わらうりやう 王良【名】「人」荀子の王霸篇に「王良造父者、善服馭者也」とあり。古、支那の趙王に仕へて、善く馬を御せし人。周の造父(?)と並び稱せらる。

わらうりやう 横領罪【名】「法」自己の占有する他人の物、公務所より保管を命ぜられたる自己の物、又は占有を離れたる他人の物を横領するによりて成立する罪。

わらうりやう 黃龍【名】「人」支那宋の普覺禪師慧南を(今の江西省南昌府)の隆興府黃龍山に住せしによりて呼ぶ。禪師、初、法を慈明の圓禪師に受け、神宗の熙寧二年寂す。年六十八。大觀四年、普覺と諡せらる。佛「わらうりやうは(黃龍派)の略。

わらうりやう 王龍溪【名】「人」わらうりやう 黃龍湯【名】大黃(?)の根莖の皮部を殆ど去り、縱割して乾燥せるを、湯に煎じたるもの。健胃藥、緩下劑とす。だいりやう。

わらうりやう 黃龍派【名】「佛」支那の禪宗七派の一。黃龍を祖とし、後、二百年にして統絶ゆ。我國へは、榮西によりて渡來す。

わらうれん 黃蓮【名】「植」毛茛(?)科に屬する多年生の草。高さ一尺内外、葉は複葉にて、小葉の數多きものは、芹のに似て厚く、光澤あり。冬に至りても、萎まらず。春、花莖の上部に、小形白色の花を開き、後、黄色の實ある莢を結ぶ。山地に自生し、地下部は、健胃劑又は染料に用ふ。おにきはわらうれん。かくまぐさ。かくもぐさ。きくばわらうれん。ながばわらうれん。ほそばわらうれん。やまぐさ。

わらうれんえきす 黃蓮越幾斯【名】「羅」Estreum coquilles 黃蓮の根にて製したる乾燥越幾斯。褐色にして、水に滴濁して溶解す。健胃藥として、消化不良の下痢に用ふ。

わらうれん 黃蓮羊齒【名】「植」水龍

五わ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねねにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ





めづらしきわが大君かも」同「藤なみの思ひまはし若草の思ひつきにし君が目に戀ひやあかきむ」伊勢春日野は今日もはな焼き若草の妻もこれり我もこれり」妻といふ縁よりにひたまくら(新)手枕)にかけて夜を隔てむ憎くあらなくをまきそめて夜を隔てむ憎くあらなくに」同「昔なむわ(若)しに」にかけていふ。萬葉射ゆししをつなぐ河邊の草草の若くありきと我(若)が思(若)はなくに因理由明かならねど、あゆみ(足絆)にかけていふ。萬葉若草のあゆひたづくり群鳥(若)の朝立ちいふなば」

わかくさやま 若草山嫩草山「名」(地)大和國奈良市東大寺の東方、春日(若)山の北にある山。笠置山脈の一峯にして、高さ一、二八尺。山容温藉、満山小芝生にして、樹木殆ど無く、毎年二月、芝を焼きて、近國より來り觀る者多し。一名、手向(若)山。名至今もなほ妻やこもれる春日野の若草山に驚ぞ鳴く」

わかくしや 和學者「名」和學に長じたる人。國學者。皇學者。  
わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。  
わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。

わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。  
わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。  
わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。

わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。  
わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。  
わかくしよ 和學所「名」わかくさうだんしよ和學講談所を見よ。

栗の生ひてある處。一説に、栗栖原は地名にて、若は輕く添へたるなりと。記引田(若)の若くする原若くへにゐてましの老いけるかも」

わかくれたけしよ 和歌吳竹集「書」和歌の用語をいふは順に掲げて、解釋を施し、作歌の法をも説けるもの。十卷。著者、詳かならず。  
わかくわい 和歌會「名」うたわい(歌會)に同じ。新米代、住吉の和歌會」

わかけ 若氣「名」わかけ(若氣)に同じ。盛衰記、若は、なほ若氣にて」  
わかけがね 輪掛金、輪懸金、輪繫金「名」掛金(若)の輪の形せるもの。大矢、輪懸金かけたか外(若)すほととぎす(若)いふ句に熊坂一族さそひがほなり」

わかく 若子、若兄、稚子「名」ちのみこ。みどり。あかこ。わくこ。記、小兒、ワカゴ。古語拾遺、天照大神育二吾勝尊、特基鍾愛、當懷二腋下、稱曰、腋子。今俗號三稚子、謂之可古、是其轉語也」

わかく 若御「名」わかきみ(若君)に同じ。本尊、御幼稚の若御に、天下を保たせ進らせん」  
わかく 若御「名」わかきみ(若君)に同じ。本尊、御幼稚の若御に、天下を保たせ進らせん」

わかく 若御「名」わかきみ(若君)に同じ。本尊、御幼稚の若御に、天下を保たせ進らせん」  
わかく 若御「名」わかきみ(若君)に同じ。本尊、御幼稚の若御に、天下を保たせ進らせん」

ぞ知る」  
わかくも 若蘆を「枕」をは感嘆の助辭。若蘆は、刈りて用ふるものなるより、かりにかけていふ。萬葉、若蘆をかりちの小野にしこそはひをるがめ」

わかさ 若狹「名」(地)北陸道七國の一。三方(若)大坂(若)遠敷(若)の三郡あり。全國、福井縣の管轄に屬す。  
わかさ 若櫻「名」(地)因幡國八頭(若)郡にある村。山間の一隅。八東(若)川の西岸。鳥取縣の管下。鳥取市より七里十町。もと池田氏の支封一萬五千石の邸の所在地。に同じ。

わかさう 我曹、吾曹「代」わかはい(我輩)わかさう 若藏「名」藏は、人名に擬していふ。わかも(若者)に同じ。  
わかさう 若草蒲「名」生ひ出でてより、未だ多くの日を経ぬ草蒲。襖(若)の色目の一。女房の五衣(若)にて、上は、表濃き青、裏白、次は表青、裏白、又、その次は、表薄青、裏薄紅、下の二つは、共に、表白、裏紅梅にて、これに白の生絹(若)の單(若)を着用す。

わかさう 若盛「名」若くて、血氣又は容貌の盛りなる頃。源氏かの御若さかり思ひやらる。かうさまにぞおはしけんかし」  
わかさう 若狭鰯「名」(動)このほか(若)木葉鰯(若)に同じ。

わかさう 若鰯「名」(動)硬骨類に屬する魚。形鰯(若)に似て、大さ、一二寸を出てす。全身青を呈し、側面に銀色の線條あり。東海より東北地方にかけて多く、初春、河口に來り、淡水と鹹水との混淆する處に産卵す。常陸國霞浦のもの、殊に名あり。しらすき。ちか。さくらだ。すずめ。のう。を。公魚鰯(若)年若き驚。鰯鰯(若)鰯鰯(若)も、飛び駆けて」

わかさう 若櫻「名」若木の櫻。神樂月立「大君の觀」取る山の若櫻おけおけ」  
わかさう 若木「名」若木の櫻。神樂月立「大君の觀」取る山の若櫻おけおけ」

わかさう 若狹塗「名」若狹國小濱(若)及びその附近より産する漆器。黒赤、黄、青等の色漆に金銀箔を塗り込みて、亂雲の如き文彩を研ぎ出したるもの。俗稱、鬼ヶ城。

わかさう 若狹箸「名」若狹塗の箸。  
わかさう 若狹神「名」若狹國遠敷(若)郡遠敷村に鎮座せる國幣中社。今二社に分れ、越前區にある上宮は祭神若狹彥命、遠敷區にある下宮は祭神若狹姫命。古來、上宮は當國の一の宮、下宮は二の宮とせられ、二社を總稱して、遠敷明神ともいへり。若狹彥命は彥火火出見(若)命、若狹姫命は豐玉皇女なりとの説あり。創祀年代詳かならず。

わかさう 若狹人「名」若狹國の人。舞臺、夏山や通ひ馴れたる若狹人」  
わかさう 若狹盆「名」茶人の間に賞玩せらるる盆。支那北齊の時の渤海の製とも、明朝の初に、若狹國に漂著せる支那人の賣せるものともいひ、縁は青磁内は朱、底に「德」の字「業」の字、梅に似たる形の畫とあり。若狹盆の盆。

わかさう 若様「名」貴族の弱年なる子弟の敬稱。  
わかさう 若侍「名」あきむらひ(青侍)に同じ。年若き武士。若風、弓稽古の若侍。太鼓能く答ふ若侍や青すだれ」

わかさう 若三神「名」和歌のわかさうじんから和歌三神考「名」(書)和歌三神即ち住吉玉津島、柿本人麿の由來及びその説の傳來等を、諸書に據りて考證せるもの。一卷。伊勢貞丈の著。  
わかさう 若狹瑪瑙「名」めなう(瑪瑙)の西にある城。天正三年、尼子勝久、これに據り、羽柴氏平定の後、木下重賢、これを賜はり、八東(若)智頭(若)兩郡二萬石の領主となりしが、慶長五年、重賢西軍に與せしため、封を除かれ、山崎家盛(攝津國三田(若)より移りて、三萬五千石を領す。元和三年、家盛の子家治、備中國成羽(若)に徙りてより、廢城となる。俗稱、鬼ヶ城。

わかさう 若狹塗「名」若狹國小濱(若)及びその附近より産する漆器。黒赤、黄、青等の色漆に金銀箔を塗り込みて、亂雲の如き文彩を研ぎ出したるもの。俗稱、鬼ヶ城。  
わかさう 若狹箸「名」若狹塗の箸。  
わかさう 若狹神「名」若狹國遠敷(若)郡遠敷村に鎮座せる國幣中社。今二社に分れ、越前區にある上宮は祭神若狹彥命、遠敷區にある下宮は祭神若狹姫命。古來、上宮は當國の一の宮、下宮は二の宮とせられ、二社を總稱して、遠敷明神ともいへり。若狹彥命は彥火火出見(若)命、若狹姫命は豐玉皇女なりとの説あり。創祀年代詳かならず。



りて、和歌の撰集を掌りし所。村上天皇

ら。平家「若殿原に争うて先を懸けんも、おとなげなし」

わかなへいりろ若苗魚【名】木賊(サトク)色

年岡見大良・杉屋阿彌(サヤ)等の發起によりて、大阪毎日新聞社内に取りたる文士割の一團。

わわ





わかやか

わかやかた 若屋形〔名〕屋形圖の跡つぎの息子。甲陽軍鑑、長坂長閑・跡部大炊助、少しも失念あるまじき所に、若屋形の、然も心の剛強にましますを」わかやきだつ 若やきだつ〔動四自〕わかやき若やき〔古語〕其安親の宰相なども、わかやきだちて、すべて、たふとき事のかぎりもあらす」わかやきは 若柳派〔名〕劇場の振附の一派。花柳の門弟若柳壽童（大正六年歿す）を祖とす。わかやく 若役〔名〕若き人のすべき役。持統天皇歌集、若役に、直ちに君のお供して」わかやく 若やく〔動四自〕若やかになる。若がへる。わかやきだつ。運馬好ましう若やきて、もてなしたるうはべ」わかやま 和歌山〔名〕〔地〕紀伊國の内、三重縣所管の南牟婁〔郡〕。北牟婁の兩郡以外のすべてを管轄する縣。縣廳を和歌山市に置く。初、幕末まで和歌山の藩あるのみなりしが、明治元年正月、同藩の附家老安藤・永野の二氏をも罷せて、藩屏に列せしめ、田邊・新宮の二藩を起し、二年六月、三氏共に知藩事に任ぜられ、四年七月、三藩を、各縣とし、その十一月、合同して、新たに和歌山縣を立て、今日に及べり。み〔三重〕〔參照〕和歌山縣にある市。和歌山縣の舊城下の地。徳川氏三家の一なる紀州家の舊城下の地。わかやまのひのかみ 若山昨神〔名〕伯父に當る大山昨神の神に對して、若といへるなるべしといふ。羽山戸の神の御子。若年（の）の神等の御兄。御母は大宜都姫。

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わかやま 若山五郎兵衛〔名〕紀伊國の和歌山市にありし城。もと畠山氏の據りし地なるを、天正十三年、豊臣秀吉の根來寺を滅し、國中を統一して、羽柴秀長

わか

わか 分別〔名〕わかること。合點。會得。了解。わが 吾許〔名〕わがもと。わがとこ。古語。萬葉、久方のあまのかはらに船浮けて今宵か君がわがり來まさむ」わか 別〔動下二自〕はなればなれになる。別になる。區別が附く。分離する。はなる。〔分る〕離れて、再び逢はずなる。離別す。訣別す。目にわかる〔死別〕に同じ。四元は一つにて、末數多になる。分岐す。〔分る・岐る〕

わか 分る 別る〔動四自〕區別、明かになる。はきと見ゆ。判然とす。會さる。得〔了〕す。合點す。了解す。世情に通じて、頑固なる事を言はず。わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わか 別 別〔名〕わかるること。別に。目にわか〔死別〕に同じ。四元の同じ筋より分れたるもの。えだわか 別家。別家。支族。〔分〕

わかをんな 若女〔名〕 ①年若き女。 ②能樂の女面の一。「熊野」・「松風」などの曲に用ふるもの。

わかをんながた 若女形〔名〕 ①をんながた(女形)と同じ。若風等の少人、氣分は寛闊にぞれつきて、物靜かに、自らの若女がたに根柢を基、瀬川菊之丞となんいへる若女形あり。

わき脇〔名〕 ①胸の兩側にて、肩と腕との下なる所。わきつば。わきつば。腋高。腋披。②衣の腋にあたる部分。腋披。③襦袢の方。かたはら。かたへ。側面。④他の家。娼妓・藝妓・山本屋等、十二銭のは切れたと申しいらから、わきて取つて参りした。⑤わきて(脇手)と同じ。⑥部領(部)の側(脇)に並ぶ者の義。奉公坊(奉公)の帶刀(帶)の内に、部領の次位、連(連)の上位に立つ者(腋)能樂にて、仕手(仕)の相手となる役、又その人。わきし。あど。あして。つれに對して。⑦甲冑軍艦・猿樂の太夫をのけて、脇つれ、……、狂言に至るまで。⑧代女(代)の和布疋(和)の脇は、高安はだしと譽め、⑨「文」わき(脇)に同じ。狂言・盗人連歌「發句」(發)……、さらば脇を致さう、……、時雨の音を盗む松風。⑩浄瑠璃及び長唄にて、首席者即ち立(立)に次ぐ、第二席の者、浄瑠璃のは、脇詰(脇)ともいふ。

わきやくちやう 脇百姓(脇)の略。脇になす。①第二に置く。うとんとず。除者(除)とす。②代女(代)のおれ、手掛(手)の分として、殿の氣に入り、手妻を脇になして思ふままなる長枕。

脇になる ①深く注意せず。第二となる。②代男位取る事は脇になりて、機嫌を取る事になりぬ。③「に同じ。脇の御膳(脇)」「①」脇の御膳(脇)」「腋の臭(腋)」「わきが(腋臭)に同じ。脇集(脇)胡臭、ワキノカ」

脇の御膳 ①古禁中の節會(節)の時、西南未申(未)の隅の階より供せし、次の御膳。わきのおももの。殘の御膳(晴)の御膳に對して。

脇の間 ①船の帆棚の左右にあり

わき ①船の帆棚の左右にあり

わき ①船の帆棚の左右にあり

て、帆の脇取綱の下る所。脇を明く ①脇明(脇)をなす。②脇を塞ぐに對して。

脇を搔取る ①衣の袖を、脇にまくりこむ。腕まくりをなす。②十訓の侍の顔を見れば、脇がいどりで得意げなり。

脇を搔く ①脇を、自分の手にてさする(勇氣を誇る時の態度の形容)宇道相授(宇)脇を搔きて、おのれが蹴てんには、いかにも生(生)かじものを「脇を搔き、指(指)をさして、と向き、かう向き、物言ひ男立てり」

腋を闕く ①古の衣服の仕立方に、左右の脇を、縫はずに明けておく。けつえき(腋)参照。②我白き帷子(我)の脇深く開きたるに」

脇を詰む ①次條に同じ。重帷子(重)も直し、脇詰めたら」

脇を塞ぐ ①脇塞(脇)をなす。②脇を明くに對して。③代男(男)男持たぬ中に、脇を塞ぎ。若風(若)脇塞きたる若衆に、狀を附けて笑はるると。本朝二十不孝「十五歳にして、脇を塞ぎ、六の年、角(角)を入れて、しかも美男なれば」

わき分別 ①わかし。差別。わけ。②古語。萬葉「よる盡といふわかし知らずわが戀ふる心はけだし夢に見えきや」③「間」

わき湧沸 ①沸くこと、又、沸くまでの時

わき和氣 ①春ののどけき氣候。②相愛の情。睦まじけはひ。

わきあけ 腋明・腋腋・腋腋〔名〕 けつえき(腋)に同じ。①「うへ」の衣、わきあけにて。②「名」腋腋、和岐阿介乃古路毛

腋明の衣 ①前條に同じ。②「腋腋」の仕立方に、脇を縫ひ合はせずに明けておくこと。入口(口)を設けること。(脇塞(脇)に對して)③代男(男)脇あけの風色、黒き帯に、様を變ふる。④代女(女)寄女(寄)は、諸國の道者を招き寄せぬ」

わきあけこそ 腋明小袖〔名〕 脇明の仕方なる小袖。武家義理物語著ふるしたる脇明小袖」

わきあて 脇當腋當〔名〕 わいだて(脇當)に同じ。運ぶ色葉集・脇當、ワキアテ。於二陣中、又脇引云事無之」

わきあど ぞなへ 脇後備脇跡備〔名〕 脇備(脇)と後備(後)と。

わきあらは 脇風〔名〕 船の側面より吹く風。(徳川時代の人船の語)

わきあるき 脇歩〔名〕 規定以外に土地をあるくこと。そとあるき。

わきいた 脇板〔名〕 輕胴丸・腹巻等の側面にある板。鐙のは、源平時代より以後に用ひ、左方の脇にのみあり、胸板と同じく糊造なるを正式とし、胴丸・腹巻などには糊造なし。

わきいつ 涌出づ・湧出づ ①動二目 ②涌きて出づ。水、地中より出づ。③涙、目より流れ出づ。④雲、湧き出づる涙の川はたぎりつつ戀ひ死ぬべくもおぼえけるかな。⑤急に起り出づ。⑥見えざりし調度・装束(装)のわき出づる」

わきうら 脇糞〔名〕 店を持たずして、商を營むこと、又その人。「足利時代の語」

わきが 腋臭・狐臭〔名〕 腋香(腋)の義。脇の下より、惡臭の發する病。惡臭は、汗腺分泌物に含める脂肪より發散するものにて、多くは、兩側より發散すれども、偏側のみなるもあり。又、その部分の皮膚は、

濕潤し、細菌寄生して、黃色を呈す。わきかき 脇懸〔名〕 局外の者に、關係を及ぼすこと。善の門徒(善)わが子の痴氣(痴)は思はず、脇がかりの恨が出る。②女殺油地獄お山の祟なれば、與兵衛に罰があたる管、役(役)の行者ともいはるる佛が、若輩らしう、何の脇がかりなされう」

わきがき 脇書〔名〕 傍に書き添ふこと、又その書き添へたるもの。續世百韻、一句一句、書き添へたるを脇書にして、

わきがけ 脇掛〔名〕 眞宗にて、佛壇の本尊の左右に掛くる、如來の名號。わきがたな 脇刀〔名〕 しがたな。わきざし。わきもの。古語、右手を以て、脇刀のつかに懸けて抜かんとする體(體)にて、首座の太夫に次ぐ役、又その人。わきたひ。わきかち 脇楫・脇棍・脇舵〔名〕 船の兩方の側面に取り附けたる楫。わいかち。壁裏記「脇棍・面棍を以て、舷を、ちやうと挟み立て」

わきかへ 脇革〔名〕 鞆(鞆)など、の側面わきかへ 脇壁〔名〕 こかへ(小壁)に同じ。太平記・天龍寺の脇壁」

わきかへる 沸返る ①動四目 ②わきあがる(沸上る)に同じ。

わきがほ 脇顔脇貌〔名〕 よかほ(横顔)に同じ。①代女(代)脇顔の小鏡見出だされ」

わきかみ 掖上 掖上 ①「地」大和國南葛城(南)郡御所町の南に當る地の古稱。わきかみの いけのうろのひみ 掖上池心宮〔名〕 大和國南葛城(南)郡御所町と秋津村大字池之内との間にありて、孝昭天皇のおはせし宮。わきさき 掖上 掖上 ①「名」孝昭天皇の御陵。大和國南葛城(南)郡御所町の西南三室(室)村の北方にあり。前條の宮の址の西北に當る。わきかんな 脇鉤〔名〕 敷居などの溝、又

わきかん

は、小穴の脇を削るに用ふる鉋。そばと  
り鉋。又、その一種にして、細き小穴又  
はしやくりを削るに用ふるものを、鉋袋  
(わき鉋)といふ。「したる看板」

わきかんはん 脇看板(名) 脇狂言を記  
わききやうげん 脇狂言(名) まきやう  
げん(前狂言)に同じ。

わきくさ 脇草(名) わきげ(脇毛)を草に  
譬へていふ語。萬葉(巻)にも草はな  
刈りそ八穂(巻)を穂積の朝臣(巻)に脇  
草を刈れ」

わきくさ 脇臭(名) 次條に同じ。  
わきくさ 脇臭(名) わきが(脇臭)に同じ。  
和名(胡)脇、和岐久曾、腋下如(葱)鼓之氣、又  
謂之狐臭、如(狐)狸之氣也」

わきげ 腋毛(名) 腋の下に生ずる毛。  
わきご 脇子(腋子)(名) 手元より離さぬ  
程に愛する子。古語拾遺(天照大神育三  
勝尊)「特甚錦愛、常懷三腋下、稱曰腋子」  
正義記(この舌勝)の尊をば、大御めぐ  
しとおぼして、常に御脇もとにすまたま  
ひしかば、腋子といふ」

わきごころ 脇心(名) 他方面に心を移  
すこと。あだしこころ。五人女(二人別別  
(巻))に住みて、……身に替へての脇心」

わきごじ 脇興(名) こじわき(奥側)に同  
じ。諸曲(仲)「僧都は、美女を伴ひ歸り  
ければ、仲光も遙かに脇興に参り」

わきざ 腋座(名) 能舞臺の一部、脇柱よ  
り少し後方の左の方。

わきざい 脇在郷(名) 都會に接近  
せる在郷。東路地名所(一里も、二里も、  
脇在郷へ、馬を借りて行く」

わきざか あはちのかみ 脇坂淡路守(名)  
「人」わきざかやも(脇坂安元)に同じ。

わきざか やすはる 脇坂安治(名) 「人」  
武將。近江國脇坂村の人。豊臣秀吉に仕  
へ、驍勇の名高し。賤ヶ岳七本槍の一人。  
小牧(巻)の戦に、伊賀の上野を陥れ、後、  
攝津國能勢郡に封ぜられ、大和國高取に

わきざ

わきざ 又、淡路國洲本(巻)に移る。九州征  
伐、小田原征伐及び征韓の役、殊功を立  
つ。關ヶ原の役、東軍に屬し、洲本を安堵  
し、後、伊豫國大洲(巻)に移り、元和元年、  
家を子安元(巻)に譲りて、京都西洞院(巻)  
に退隱し、寶永三年卒す。年七十三。

わきざか やすも 脇坂安元(名) 「人」  
武將。安治の第三子。幼名は其太郎。慶  
長五年從五位下に叙し、淡路守と稱す。  
關ヶ原の役、款を徳川家康に送り、戦後、  
行陣に諷し、攻め佐和山を陥る。大阪の  
二役にも從軍し、元和三年、信濃國飯田城  
に移り、上總國一宮(巻)を加賜せらる。  
承應二年卒す。年七十。

わきざくら 沸櫻(名) 腹を立つること。  
「徳川時代の京阪地方の遊里の語」

わきざし 脇差脇指(名) 用心のため  
に、懷中して、脇の方に差す、長さ六七寸  
の刀。柄(巻)に鞘に唐木(巻)などを用ひ、  
柄は巻かず、放日貫(巻)にて、鏢(巻)は、  
衣の裏に引き掛らぬやうに、丸形にし、金  
具を打たず、下緒(巻)は短く、その端を結  
びて玉にし、懷中より滑り落ちぬやうに  
せり。鞘巻(馬手差)(巻)合口(巻)の類。  
まもりがた。こしがた。よろひどほ  
し。後世は、大小兩刀の小の方。長さ  
一尺二寸乃至一尺五六寸を普通とし、  
一尺八九寸に達するは、大脇差と呼びた  
り。(大小の刀の方は二尺以上、源平時代  
の武士は、打刀は打刀一本のみにて、そ  
の他には、鑢なき短刀(即ち鞘巻)を帯び  
しに、足利時代の末頃には、脇差を佩き  
て、打刀は、供の者に持たせたり。打刀脇  
差を共に差して、大小と呼ぶに至れるは、  
戰國以來の事なるといふ。徳川時代には、  
農工商の輩の内、脇差のみを佩用せし  
者ありて、短刀とも呼ばれたり。はきざへ。  
狂言(巻)野「刀、脇差衣裳も、皆剥ぎ取り」  
一代女(町人の末末まで、脇指といふ物さ  
しけるによりて)「和漢三才圖會(今時、大目  
刀、小目脇指)」目傍に侍りて、介添(巻)  
づする人。徒然(脇差)たち、いづ方をも見  
つきたまふな」

脇差の太刀(句) 前條に同じ。 太平記

わきみ

「南都の衆徒は、面面に脇差の太刀なん  
ど意……抜き連れて切つてかかる」  
わきざみせん 脇三味線(名) 一座の三  
味線彈の中に、立、三味線に次ぐ役、  
又その人。

わきざ 脇師(名) 能樂にて、脇を勤む  
る能役者。わきたいふ。從經出世(巻)能  
の脇師を手いけにして、九野て主(巻)の座  
敷能。芝居にて、狂言中の副位の人物  
に扮する役者。

わきじほ 涌潮湧潮(名) あげしは(上潮)  
に同じ。最明寺(巻)上人、技潮、涌潮なん  
どと申す潮合」

わきじま 脇島(名) 大なる島の傍にあ  
りて、それに附屬する、小き島。脇島。保  
元(華島)とぞ名づけける。……これを、八  
丈島の脇島と定めて」

わきじやう 脇障子(名) 神社の本殿  
の縁側の前後を仕切るための障子。上部  
には、竹の節と呼ぶ、欄干様のものを、設  
くるを、普通とす。

わきじやうめん 脇正面(名) 脇師の定  
座の正面に當るよりいふ、能舞臺の一  
部、仕手(柱と目附)(柱との中間。  
右方より、脇卓(名)佛(佛)禮盤(巻)の  
右方にありて、師の法具を載する臺。  
わきざき 脇關(名) 或關に附屬して、そ  
の脇路を固むる關。例へば、根府川(巻)  
の關が箱根の關の脇關なりし類。

わきざな 脇備(名) 陣立にて、本陣の  
側面にある隊。

わきざい 脇大將(名) 首將に並  
わきたいふ 脇太夫(名) 脇師たる能  
の太夫。脇語(巻)たる淨瑠璃の  
太夫。

わきだち 脇立(名) 佛(佛)けふじ(脇士)に  
沸く。にえあがる、沸騰す。わきあがる。  
脇醉す(酒などにいふ)

わきだて 脇楯腋楯(名) わいだて(脇楯)  
に同じ。保元(義朝)……赤地錦の直  
垂(巻)に、折烏帽子引き立て、脇楯ばかり  
に太刀はきたり」類聚(代)脇楯、小手」

わきたて

わきたて 脇立(名) 兜の立物の一。針  
の側面に立つるもの。(前立、後立(巻))に  
對して)

わきたな けふじやう 脇店米屋(名) 次條に  
わきたなは(かじやう)みこめや 脇店八  
箇所組米屋(名) 徳川時代、江戸の米  
商の内、湯島(巻)組、花川戸(巻)組など、  
地名を冠らせ、八組に分れて、地廻米(巻)  
の外、河岸八町米俵買より引き受けた  
る米を、一般の素人米屋に賣り渡すこと  
を業とせしもの。大抵、地廻米穀問屋の  
兼業に屬したり。脇店米屋。

わきだん 脇壇(名) 佛(佛)御修法(巻)の  
時、本壇の脇に設くる、別處の壇。

わきだめ 脇(名) わかち。けぢめ。差別。區  
別。辨別。わいだめ。(古語) 紀無別、  
ワキダメナシ」

わきたれ 脇垂(名) 了(了)はたれ(手垂)  
の義。武士に非ずして、武術に達せる人  
「古語」今昔武術(巻)を立てずして、脇  
垂の者となりてぞ慕らしける」

わきづき 脇突(名) 後世の脇息(巻)に  
當る具。「古語」雪(雪)り立たすわき  
づきが下の板にもが吾兄(巻)を」

わきづく 脇机脇案(名) 佛(佛)經机(巻)  
の傍に置き、次に讀誦すべき經、又  
は法筵に必要な具を安置する案、又、佛  
前の几案、即ち御前案(巻)以外の案。

わきづけ 脇附(名) 書狀の宛名の左方  
下部に記し添ふる語。文面の宛名に添ふ  
るものと、封筒の宛名に添ふるものとあ  
りて、前者は、「侍史」に「閣下」に「執事」に、御  
中」の類にて、宛名の敬稱以外に更に敬意  
を表するに用ひ、後者は、前者と同一なる  
ものの外、常用「平信」に「親展」に至急に  
「返信」貴酬」などの如き語を用ふ。うち  
つけがき(打附書)参照。

わきづじ 脇つじ(名) 信濃國邊にて  
は、天井を、つじといふ。脇の門の横かとい  
ふ。諸曲(巻)生門「ひるむと見えしが、脇つ  
じにのぼり、虚空をさして上りける」

わきづつみ 脇鼓(名) 能樂の翁の舞の

時の三人の小鼓の中、左右に居るもの。  
わきづね 吾狐・我狐和狐(代)『わ(我)』を見よ。狐にむかひて呼びかくる語。宇首「わきづね、今宵の内に利仁(仁)が家の致致にゆきて」

わきづね 協壺(名)「わきづね」  
同じ。盛義記「協壺・内兜射すな」我會橋出「八幡(八)が肩骨、脇つぼまで切り下げられ」『あはらほね(肋骨)に同じ。堀補下集「助、タスケボネ・ワキツボ」

わきづね 脇詰(名)「わきづね」(脇塞)に同じ。傾城反魂香十八九なる脇詰の……、しとやかに手を突いて」五十余忌歌念佛、この袖下は何事ぞ。若菜の前髪、女の脇詰、男が知らいて立つものか」

わきづね 脇連(名)「つね(連)」を見よ。  
わきづね 脇手(名)「脇」の方。側面。  
わきづね 別きて「副」わけて(別けて)に同じ。大和もひしきの袖の数数見しかどもわきておもひの色ぞ戀しき」

わきづね 脇手(名)「脇」の相撲人の、最手(最)の次位に立ちし階級、即ち後世の脇詰(脇)に當る者。わき。  
わきづね 脇寺(名)「或寺に附屬せる寺。甲陽軍鑑」新立寺と申す日蓮宗の寺あり。これに、脇寺十四あり」

わきづね 脇戸(名)「脇」の門の脇に設けたる、小き入口。今昔築垣(今)を築きめぐらし、脇戸をして」

わきづね 脇取(名)「わきづね」(脇取綱)の略。  
脇取の車(句)「水繩(水)の下にある飛」

わきづね 脇取綱(名)「帆の耳繩の下に附けて、帆を張るに用ふる綱。わき」とり。「脇の間」を参照。

わきづね 脇取盆(名)「脇取とは膳附以外の器物の義」茶席にて、通盆(通)以外に使用する、長手の盆。

わきづね 脇能(名)「脇能の所作多くして、仕手の如き位置に立つよりいふ」かみのう(神能)に同じ。『神能は、番組の内、最初、即ち翁の舞の次に演ずるが普通なるよりいふ』能(能)のその日の番組

わきづね

中の、初番に演ずるもの。神能(能)を主とし、略脇(脇)の曲、又は、時として、普通二番目に演ずる修羅(修)の物を、これに充つ。修羅物なる場合には、修羅立(修)の名あり。わきやうげん(脇狂言)参照。

わきづね 脇下(名)「わき」(脇)に同じ。下集「脇、脇、ワキノシタ」

わきづね 脇挟む(動四他)「脇の下に挟む。宇首」太刀をはき、杖を脇挟みつ」

わきづね 脇柱(名)「能舞臺の四隅の柱の内、前部、右方のもの。大臣ばしら(前柱仕手)柱目附(柱)に對して」

わきづね 脇働(名)「能樂にて、脇に立つこと。わきの(脇能)参照。  
わきづね 脇四他(動四他)「いつくしみ思ふ。いたはる。大切にす。古語「落書」いと悪しきも知らぬ主(主)持たりとて、わきばみ思ふ君にもまさらせんと思ひつる」

わきづね 脇羽目(名)「建」入口と柱との間の羽目。神社などに多く、その部分を壁土にて塗れるは、小壁(壁)といふ。

わきづね 脇腹(名)「よこはら(横腹)に同じ。一代男御腹腹などを……撫てきす」『めめけはら(妾腹)に同じ。傾城反魂香「御愛子なれども、脇腹ゆゑ、御臺所(御)を憚りたまひ」」

わきづね 脇引(名)「後世の甲(甲)の脇」に當て、脇板のはづれを覆ふに用ふる、革製又は鐵製のもの。兩肩より、各、反對の腋下に釣り下げて著けたり。中世の鎧の脇楯(脇)に相當す。

わきづね 脇ひた(名)「ひたはへた(逸)の義か」わき(脇)に同じ。名義抄「掖(ワキヒタ)」

わきづね 脇人(名)「當人の脇に添ひたる人。甲陽軍鑑」手負ふ事も、兄は四箇所、弟は六箇所、我等、わき人なれど、八箇所手負ひて」

わきづね 脇百姓(名)「外名の百姓。以外名の百姓」

わきづね

(側平不見)に同じ。近頃河原の達引「子ゆゑの間に、わきひら見す」

わきづね 脇塞(名)「腋の下を縫ひ合はせて、塞きたる著物。年たけたる女の着るもの。わきづね。つめぞて(詰袖)参照。(脇明に對して)一代女脇ふきぎを、又、明けて、昔の姿にかへるは……、小作(小)なる生れつきの徳なり」

わきづね 我家(名)「我が家の約」自分の家。わいへ。わがへ。古語「萬葉」萬葉の聲聞くなべに梅の花わきへの園に咲きて散る見ゆ」

わきづね 脇骨(名)「ろくこつ(肋骨)に同じ。名義抄「脇、ワキボネ・タ・スケノ・ホネ・ソシ」

わきづね 脇本陣(名)「ほんちん」本陣。わきづね 辨(動下二他)「分(分)きまふの義」『知り別く。辨別す。判別す。源氏このしななを、わきま(定め争ふ)運馬に合ふやうにす。仕度す。辨備す。目づのふ。返辨す。辨償す。醒睡薬の包紙を馬に附け下りしが、馬、田へころび、紙を濡せり。……、馬追に辨へさせよとあれば」冥土の飛騨十八軒の飛閣宿からわきまへ、芥子(程)御掛掛けさせませぬ」

わきづね 辨(名)「わきまふること。辨別。判別。目づのふこと。辨償。返辨。宇首「千兩(金)負ひたる、そのわきま(せよ)」

わきづね 辨心(名)「わきまふる心。辨別する心。源氏「なかなかなる御心。辨別する心」

わきづね 脇見(名)「傍の方を見ること。よそみ。わきめ。よこみ」

わきづね 吾君(代)「わ(我)を見よ」男を親みていふ第二人称。あきみ。あがきみ。萬葉「汝(を)と我(を)を人ぞ避くならいて吾君人の中ごと聞きこすなゆめ」

わきづね 脇道脇路(名)「よこみち(横道)に同じ。

わきづね 涌水・湧水(名)「涌き出づる水。五文(外)・井戸……次第に涌水近く」

わきづね

わきん 和金(名)「動」金魚の一品種。身長く、尾短くして、丸子(丸)より壯健なるもの。同じ。

わきめ 脇目・傍目(名)「わきみ(脇見)に同じ。脇目も觸らず(句)心を散らす熱心に従事す。

脇目八目(句)「八目(八)八日に同じ。(諺語)」

わきめ 吾妹子(名)「わきもこ(吾妹子)の轉(古語) 萬葉「わきめ子と二人わが見しうち寄(を)する駿河の嶺」らはくふしくめあるか」

わきめ 脇目遺傍目遺(名)「視線を側面(外)に外(外)らすこと。賀古教信七巻「脇目遺に持つ涙、物は言はれず、心せく」

わきも 吾妹(代)「我が妹(妹)の約」妻又はその他の女を親みて呼びかくる語。わきもこ。(東國の古の方言) 萬葉「秋の雨に濡れつつをればいやしけどわきもが宿し思はゆるかも」

わきも 吾妹子(名)「前條に同じ。(古語) 萬葉「わきも子があめるまよび面影にかかりてもと思はゆるかも」

わきも 吾妹子(名)「枕」『吾妹子に逢ふといふ意より、あふにかけていふ。萬葉「わきもに逢坂山のはた薄ほには咲きてぞ戀ひわたるかも」』昔は、夫婦衣を借りあひて著る風俗ありしより、ころも(衣貸す)にかけていふ。萬葉「わきもこにころもすがのよしき川よしもあらぬか妹が目を見む」

わきも 脇元(名)「脇の下。手も。身邊。正統記「この吾勝(勝)の尊をば大神めぐしとおぼして、常に御脇もとにすゑたまひしかば、脇子といふ」

わきもの 涌物・湧物(名)「自然に涌き出づる物。一代金銀は涌物と、心好む内に、五十餘歳になりぬ」

わきもん 脇門(名)「大門の脇にある、小き門。こもん。掖門。

わきん

ををわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

わきやう

わきやう(准門跡)に同じ。  
わきやう 和鏡【名】我國の製作、殊に平安朝後半期以後の、金屬製の鏡。

わきやう 和行【名】五十音圖の第十の行、即ち「わ・ゐ・う・ゑ」を「

わきやうきやうぶきやう 脇屋刑部卿【名】

「人」よきやうぶきやう 脇屋新兵衛【名】

「人」おほたかた(大高忠雄)を見よ。

わきやうよしすけ 脇屋義助【名】「人」武將。次郎と稱す。新田義貞の弟。上野國新田郡脇屋に住む。義貞と共に北條高時を討ちて功あり。後、尊氏の叛するに及び、箱根に、京師に、山陽に、北陸に、常に義貞と行動を共にし、義貞戦死の後、美濃國に入り、後、吉野に至りて、後村上天皇に謁し、刑部卿に拜す。興國三年、伊豫國

人兵を起して、吉野朝に應じ、統帥を下されんことを乞ひしより、朝命を奉じて、その任に當り、同年病を得て、伊豫國の國府に卒す。年三十六。明治四十二年、從三位を贈らる。

わきやうよしはる 脇屋義治【名】「人」武將。義助の子。從五位上左衛門佐に任じ、式部大輔となる。建武二年、十三歳にして、箱根竹下(ツツノ)の戦に参加し、その後、常に父に従ひて諸方に轉戦す。興國六年、兒島高德に備前に迎へられ、又、共に逃れて、信濃に匿る。正平七年、從弟新田義興、同義宗と兵を上野國に擧げ、鎌倉を攻め、二たびこれを略取したれど、遂に棄てて相模國府津に奔り、更に越後に起し、正平二十三年、義宗と兵を越後に起し、かど又、敗れて、出羽國に奔る。終る所詳かならず。

わきやう 脇槍【名】よこやり(横槍)に同じ。

脇槍を入れる【句】「横槍(ヨコサ)を入れる」に「せめて沸湯(フタツ)と入る」。

わきやう 沸湯【名】沸きたる湯。新可美記「やうにす。」「古語」紀和、ワギラへ」

わきやう 和らふ【動下二他】和(や)ぐやうにす。」「古語」紀和、ワギラへ」

わきやう 輪切【名】「切口、輪狀を呈する

わきりた

よりいふ「圓く長き物を、横に切ること。つつきり。

わきりた 輪切體【名】「哲」あんしうてきけるあん(圓周的教案)に同じ。

わきりた 輪切大根【名】「輪切に

した大根。

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わきりた 脇槍脇櫓【名】「櫓」の力を助くるために、別に舷に取り附けたる櫓

わ

わく 沸く【動四自】「前條の語と、語源相同じ」水、強く熱せられて、湯となる。にゆ。沸騰す。金屬、強く熱せられて、液状となる。とろく。熔解す。酸酔す。腐敗す。盛んに起る。勢よく現る。斯く沸く時は浪川目の前にこそ落ちまきりけれ。自然に發生す。化成す。鷲男(ニシキ)に蛆(ウジ)がわく。

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく 沸く【動四他】下二段活用

わく

と苦(く)。惑は業を生み、業は苦を生み、やがて、すべての煩惱を生み、三界の生死(し)を招くに至る。三(さん)道(だう)四(し)參(さん)照(しょう)す。梓指【名】「建」次條の略。

梓指の鳥居【句】「建」次條に同じ。

浦島年代記「横立(ヨコタ)の鳥居は、浪に影見えて」

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく 梓指【名】「建」次條の略。

わく

わく

わく

わく

わくだし 梓出〔名〕堤防具の一。丸太にて梓を組み立て、貫木(かんぎ)を縦に立脇を取り附けて、底邊にも丸太を並べ、中に石を填充したるものを連続又は重疊し、蛇籠(へびかご)を巻きつけたるもの。激流を緩和するために、河身に突き出して据え置く。

わくだむ 〔動下二他〕わぐ(縮ぐ)に同じ。釋迦如来誕生會、金銀の針金をわくだめ亂せし如くなり。

わくちん 〔獨 Vaken〕〔名〕醫 わくせん わくちん れうはふ ワクチン療法〔名〕〔醫〕わくせん れうはふ(ワクシン療法)に同じ。

わくづり 梓釣〔名〕梓を組み、梁(の)などに掛けて、釣束(つりづく)を釣ること。わくづる わく蔓〔名〕植 ほなんづる(牡丹蔓)に同じ。

わくて 鑿手 梓手〔名〕鑿の一部。夫木「われ斯くてわくての絲の幾めぐり命長くて年をへぬらん」

わくてき 惑溺〔名〕まどひおぼるること。迷ひて、本心を失ふこと。

わくどう 〔名〕動(ひき)がへる(蟻蛙)を云ふ。〔四國の方言〕

わくぬけ 脇抄〔名〕相撲(ひき)の手の繋

わくびかへ 梓控〔名〕建 建築物の傾覆を防ぐために、柱と貫(かん)とにて支ふる。こと、又その支(さ)。権現鳥居の控柱など、その一なり。

わぐむ 縮む 〔動四他〕わぐ(縮ぐ)に同じ。宇道二つながら取りて、かいわぐみて、脇にはさみて立ち去りぬ。

わくむすびのかみ 稚産靈神、和久産巢日神〔名〕穀物は、豊受姫神に至りて、成り出て、この神は、單にその生成の徳を具へたまひしのみならず、御親神なれども、稚と申すならんといふ伊弉諾(いそだ)神、迦具土(かぐつち)神を生みて後、病み臥したまひし時、その尿に生りたまへりとも、又、迦具土神と埴山姫(はりやまひめ)との間に生れたまへりともいふ神。豊受姫(とようけ)神はその御子なりといひ、又、この神の頭上に

は葦と桑と、跡には五穀生ぜりと傳ふるによりても、穀物・養蠶の事を司りたまふ神なるを知るべし。

わくへん 和訓倭訓〔名〕漢字を、和語に宛てて讀むこと、又その讀み方。國訓。

わくへん かん 倭訓栞〔名〕書 次條に同じ。

わくへん のしをり 和訓栞〔名〕書 言語を、古語より俗語・方言に至るまで、五十音順に次第し、「一古書に照して、語源を説き、解釋せるもの。前篇四十五卷、中篇三十卷、後篇十八卷。谷川士清の著。

わくへん のりり 和訓栞林〔名〕書 日本紀、古事記等、諸種の古書を引きて、和訓の正字を集め、訓を眞字(まじ)にて記し、五十音順に次第し、卷末に和訓指掌略を附したるもの。七卷。海北岩沖の著。

わくもん 或問〔名〕或人問ふといふ質疑を設け、それに答ふる形式にて、己の意見を述べる仕組にせる文章。〔に同じ〕

わくら 和鞍 倭鞍〔名〕やまざら(倭鞍)わくら 和倉〔名〕地 能登國鹿島(のの)郡端(は)の村の大字。有名な温泉地に七尾(しちお)の停車場の西約二里、前に七尾灣を控へ、後に岡山を貫ひ、風光頗る佳なり。泉質は鹽類泉にして、無色・透明、臭気なく、味苦鹹、主要成分はクロオルナトリウム及びクロオルカルシウムにして、特に硬度を含めると、我國に類例なし。

わくら ば 病葉〔名〕病づきたる葉。一説には、夏紅葉の如く赤くなり、又は、朽ちて黄白色などを呈したる葉。又、一説に、木の若葉。運歩色葉集「柗、ワクラバ」

わくら ば 邂逅〔名〕稀なること。たまさか。〔古語〕古今わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻湖垂れつつわぶと答へよ」更科「身の病いと重くなりて、心りまかせて物語などせし事も、えせずなりたれば、わくらばの立出も絶えて」

わくらん 惑亂〔名〕まどひ亂るること、又、まどはし亂すこと。

わくわく 和畫 倭畫〔名〕日本の畫。日本畫。〔漢畫に對して〕倭城反魂香「異國の

王羲之、趙子昂が石に入り木に入るも、和畫に於て例(れい)なし」曰(いは)やまざら(大和繪)に同じ。

わくわく 和光〔名〕後漢書の王允傳に「獨崇三節、尊和光之道耶」とあり。「和光・同塵」參照「德の光を和げ隠して、現せしめしこと。正統記「八咫の御鏡を執らまじしとして、我を見るが如くにせよと勅したまひける事、和光の御誓も顯れて」本記垂跡(すだ)と和光の目明かに、分段同居(どうきゅう)の闇を照らし」

和光守護神〔句〕德の光を和げて、國を守護する神。諸國(しよこく)治まるや、國常立(こくじょうたて)の始より、七つ・五つの神の代の御末は、今に、君の代より、和光守護神の扶桑の御國に」

和光・垂跡(すだ)〔句〕佛「和光・同塵の垂跡」に同じ。平家・神明は和光・同塵の方便區區(へんぽうきく)にまじませば、或時は俗體とも現じ、或時は女神とも成りたまふ」

和光・同塵〔句〕老子に「挫其銳、解其紛、和其光、同其塵」とあるに本づき、佛者も借りて用ふ。摩訶止觀の卷六に「和光同塵結緣之始、入相成道以論其終、亦名爲化、亦名爲應」とあり「我が德の光を和げ隠して、塵俗の中に混じ居ること。佛「佛・菩薩が、その本地(ほんぢ)に於ける無漏智(むろうち)の光を隠蔽し、人天(にんてん)の欲界の塵事に混じて、神と現る。太平記「和光・同塵は既に結緣の始たる」

和光同塵の跡を垂る〔句〕佛「佛」前條に同じ。太平記「本覺眞如の都を出て、和光同塵の跡を垂れしより以來、本高跡下(たかあとくだ)の秋の月、照らさずといふ處も無く、化國(け)の結緣(けつぐん)の春の花、靈(たま)せずといふ袖も無し」

和光同塵の垂跡(すだ)〔句〕佛「佛」前條に同じ。盛衰記「和光同塵の垂跡は、音無川に住みたまふ」

和光の御願〔句〕佛「佛・菩薩の、和光の御誓願。太平記「日吉の大宮權現に參社したまひて、閑かに啓白したまひけるは、臣、苟くも、和光の御願を憑みて、和光の塵に交はる(まじ)る(句)佛「和光・同塵」に同じ。太平記「和光の塵に交はる事久しくして、三世了達(りやうたつ)の智も淺くなりぬ」

和光方便〔句〕佛「佛・菩薩が、衆生(しゆじやう)を救済せんとする、和光同塵の方便。爲善合戰「今度の亂逆は、和光方便の仔細ありて、一人の山徒、無上菩提の心を起す」

和光利物のき〔句〕佛「和光同塵の跡を垂れて、衆生(しゆじやう)に利益(りやく)を施すこと。盛衰記「緋(ひ)の玉垣、色を添へ、和光利物の樹葉に」

わくわく 〔貌〕悶えて、心の落ち附かぬさま。わくせき。釋迦如来誕生會、心わくわくせき立つる」

わくわん 和館〔名〕徳川時代に、對馬の國主宗(むね)氏が、朝鮮の釜山・鹽津等、又、後には草梁に、設置して、兩國間の交渉、貿易、居留民保護等の事を掌らしめし所

わくわく 梓井〔名〕石又は木にて、底よりに對して、四角に組み上げて造りたる井。(筒井に對して)

わけ分〔名〕分(く)ること。區別。差別。わかち。わき。狂言文庫「ぶんざう、うんざうのわけ差別も知りをらいて」

わけ分 字(あ)の類。食ひて残り又は神佛に供へて下(くだ)したる食物。運歩色葉集「殘飯・餘飯(ごはん) 文武五人男、悉くも神の分(ぶん)」

わけ分 徳義(とくぎ) 酌婦(しやくふ)などの、客よりの収入を、地主と等分に分けること。一代当居物宿(たてあて)に行きて、分の勤も恥しめる。分とはその花代、宿と二つに分くるなるべし

わけ分 〔名〕ひきわけ(引分)に同じ。〔次條に同じ〕

わけ分 譯(わけ)〔名〕わけ(分)の轉義。條理。事理。意味。意義。事(こと)のもと。ゆゑ。わけあり。わけがら。わけまち。仔細。理由。倭城反魂香「わけも聞える、道も立つ」

わけ分 男女又は男色關係の事。情事。いふ。〔分〕若魚(わかう)頭(かしら)つき後下(ごご)

るは、臣、苟くも、和光の御願を憑みて、和光の塵に交はる(まじ)る(句)佛「和光・同塵」に同じ。太平記「和光の塵に交はる事久しくして、三世了達(りやうたつ)の智も淺くなりぬ」

和光方便〔句〕佛「佛・菩薩が、衆生(しゆじやう)を救済せんとする、和光同塵の方便。爲善合戰「今度の亂逆は、和光方便の仔細ありて、一人の山徒、無上菩提の心を起す」

和光利物のき〔句〕佛「和光同塵の跡を垂れて、衆生(しゆじやう)に利益(りやく)を施すこと。盛衰記「緋(ひ)の玉垣、色を添へ、和光利物の樹葉に」

わくわく 〔貌〕悶えて、心の落ち附かぬさま。わくせき。釋迦如来誕生會、心わくわくせき立つる」

わくわん 和館〔名〕徳川時代に、對馬の國主宗(むね)氏が、朝鮮の釜山・鹽津等、又、後には草梁に、設置して、兩國間の交渉、貿易、居留民保護等の事を掌らしめし所

わくわく 梓井〔名〕石又は木にて、底よりに對して、四角に組み上げて造りたる井。(筒井に對して)

わけ分〔名〕分(く)ること。區別。差別。わかち。わき。狂言文庫「ぶんざう、うんざうのわけ差別も知りをらいて」

わけ分 字(あ)の類。食ひて残り又は神佛に供へて下(くだ)したる食物。運歩色葉集「殘飯・餘飯(ごはん) 文武五人男、悉くも神の分(ぶん)」

わけ分 徳義(とくぎ) 酌婦(しやくふ)などの、客よりの収入を、地主と等分に分けること。一代当居物宿(たてあて)に行きて、分の勤も恥しめる。分とはその花代、宿と二つに分くるなるべし

わけ分 〔名〕ひきわけ(引分)に同じ。〔次條に同じ〕

わけ分 譯(わけ)〔名〕わけ(分)の轉義。條理。事理。意味。意義。事(こと)のもと。ゆゑ。わけあり。わけがら。わけまち。仔細。理由。倭城反魂香「わけも聞える、道も立つ」

わけ分 男女又は男色關係の事。情事。いふ。〔分〕若魚(わかう)頭(かしら)つき後下(ごご)

わけ

に、髪先短く、……よしや粧(ツクリ)の大小、いかさま衆道(しゅうどう)のわけらしき風俗(ふうぶく)を根柢(こんてい)中心(しんしん)の譯(わけ)の道(みち)を知るを迷へば、知らぬも通ひ、新地(しんち)・色里(しきり)・賑(にぎ)はししに、譯(わけ)惡(わる)し「句」譯(わけ)惡(わる)しに同じ。五人女(ごにんめ)の年月、數千人の肝煎(かんせん)に、つひに譯(わけ)の惡(わる)しきといふ事なし」

譯(わけ)ある里「句」わけざと(譯里)に同じ。傾城(けいじやう)佛風(ぶつふう)浪(なみ)の三國(さんこく)の分(ぶん)ある里(り)へ、惡性通(あくせうつう)の面憎(めんぞう)や」

譯(わけ)ある女「句」譯里(わけり)の女(め)・遊女(ゆうにょ)・織留(おりどめ)「この男初めて、分(ぶん)ある女(め)の手に、面白きものといふ事おぼえ」

譯(わけ)有る「句」男女(なんにょ)・惚れあふ・春花(はるはな)五兵衛(ごべゐ)さん、譯(わけ)のある事なら」

譯(わけ)が立つ「句」遊所(ゆうじよ)にて、支拂(しはらひ)その他に關して、埒(らち)が明く・置土産(おきみやげ)我等(われら)は、年明けて二三度、分(ぶん)の立つ客(きやく)に逢うたと語る」永代藏(えいだいざう)・道頓堀(みちとんぼり)にての遊興(ゆうこう)の分の立つた事、一書(いっしょ)に於て」

譯(わけ)が無し「句」理由(りゆうゆ)無し。日言行(にっぎんぎやう)條理(じょうり)立たず。正氣(せいぎ)を失ひてあり。正體(せいだい)無(な)し。狂言(きやうげん)・義理(ぎぎ)・酒に酔(よ)うて、わけがない」目(め)さまでの思慮(しりょ)を要せず、たやすし」

譯(わけ)無し「句」前條(ぜんじょう)に同じ。譯(わけ)も無し「句」譯(わけ)が無しを強めていふ語。狂言(きやうげん)・義理(ぎぎ)・わけも無い事仰(おほ)せらるる」五人女(ごにんめ)泣き出して、わけもなうなりける」撒紙(さし)はてさて、譯(わけ)もない。なんの、わけが見ること」

譯(わけ)善し「句」譯(わけ)を立つることを得。譯(わけ)善し「句」對して「一代男(いちだいなん)・善吉(ぜんきち)と語るに、わけよし」一代女(いちだいめ)・分(ぶん)のよき女郎(じやうらう)に身を捨つるは、ことわりぞかし」譯(わけ)惡し「句」譯(わけ)を立つることを得ず。譯(わけ)善し「句」對して「曾我虎磨(そがとま)わけが悪い稚稚(ちち)殿(みま)・紋目(もんめ)は頼まぬ、逃げまい」譯(わけ)を立つ「句」遊所(ゆうじよ)にて、情事(じやうじ)・支拂(しはらひ)など、に關して、埒(らち)の明くやうにす。一代女(いちだいめ)「帯(おび)をしなければ、譯(わけ)立てたるやうに見せ

わけ

けるこそをかしけれ」色道大(しきだうだい)わけを立てる、當道(たうだう)に於て、他の批判(ひはん)にあづからぬやうにする事なり」

譯(わけ)を附く「句」争事(そうじ)に關して、筋道(すくみち)の立つやうにす。善後(ぜんご)の處置(ちぢ)をなす。續藤栗毛(つづふしぐ)・なに、譯(わけ)を附けるたあ、この野郎(やらう)の事か」

わけ和氣(わき)「名」上古(じやうこ)に於ける一地方(いっちほう)の領主(りやうしゅ)・國造(くにぞう)・縣主(けんしゅ)等の類。わけ(別)參照(さんしやう)・紀(き)七十七王(しちじちしちおう)者(もの)・悉別(しつべつ)・陽國(やうこく)・之國造(のくにぞう)亦(また)和氣(わき)・稻置(いなり)・縣主(けんしゅ)也」

わけ備前(びぜん)國(くに)の六郡(りくぐん)の一。郡役所(ぐんやくじよ)を和氣町(わきまち)に置きたり。日(にち)地(ち)伊豫國(いよこく)の舊郡(きうぐん)の一。明治(めいし)二十九年(にじゅうしきゅうねん)・廢して、温泉郡(おんせんぐん)に合す。四左岸(しざがん)・郡役所(ぐんやくじよ)の所在地(しよだい)たりき。吉井川(よしかいがわ)より舟(ふね)にて吉井川(よしかいがわ)を下り来る旅客(りやくきやく)貨物(かぶつ)は、概ね此所(ここのしよ)にて汽車(きしや)に轉乘(てんじやう)するため、交通上(かうつうじやう)の重要地(じやうようち)たり。地(ち)平盛(へいせい)・衰記(すいき)に別(べつ)の渡(わた)とあるも、この地(ち)なり。日(にち)地(ち)伊豫國(いよこく)・温泉郡(おんせんぐん)にある村(むら)・三津ヶ濱町(みつがはままち)の北(きた)・港灣(かうわん)を擁(よう)し、四國巡禮(しこくじゆれい)第五十二番(ごじにばん)の札所(さしよ)なる太山寺(たうさんじ)・第五十三番(ごじさんばん)の圓明寺(えんめいじ)あり。

わけ別(べつ)「名」前條(ぜんじょう)の義(ぎ)・吾兄(ごけい)兄(けい)の約別(やくべつ)も賜(たま)ふ義(ぎ)又(また)アイヌ語(あいうご)で(頭首(とうしゅ)の義(ぎ)の轉(てん)ならんとも、を(を)か(か)岡(おか)の轉(てん)に、高く上位(じやうゐ)に立つ者の義(ぎ)ならんともいふ。上古(じやうこ)・王子(おうじ)の御名(ごな)にも、何何別(なになにべつ)と呼べるもの多し」上代(じやうだい)の姓(せい)の(一)・主に一地方(いっちほう)を治むる者にへり。

わけ「代」第二(だいに)人稱(じんじやう)の卓稱(たくじやう)・なんぢ。「古語(こご)」萬葉(まんや)・晝(ひる)は咲(さ)き夜(よ)は戀(こ)ひぬる合歡木(がくあんぎ)の(語)の花(はな)われのみ見(み)やわけさへに見(み)よ」

わけ髻(むす)「名」わく・結(むす)の居名詞(いみなことば)・髻(むす)の餘髪(よるい)を結(むす)ね結(むす)ひたるもの。まげ。わけ和解(わけかい)「名」わかい(和解)に同じ。わけあひ譯(わけ)合(あひ)「名」わけ譯(わけ)に同じ。わけい「和敬(わけい)・名」やはらぎ敬(けい)ふこと。わけい「名」脇射(わきしや)のの詠(よ)なるべし」槍(やり)又は刀(は)にて戰(いくさ)ふ時(とき)・身方(みかた)の者が、側面(そくめん)より、弓(ゆみ)又は鐵砲(てつぱう)を、敵(てき)に發射(はつしや)すること。

わけがは和氣川(わきがわ)「名」地(ち)・備前國(びぜんこく)東大川(とうだいがわ)の別稱(べつじやう)。

わけがひ

わけがひ分匙(ぶんし)・別(べつ)「名」食物(じきじふ)を取り分けるに用ふる匙(し)なるべし。「古語(こご)」紫花(むらさき)「一品(いっぴん)の宮御(みやご)ほうもち、わけ皿(わけりら)・わけがひども、皆(みな)むすび袋(ふくろ)にて」

わけがみ分髪(ぶんかみ)「名」頭髮(かみ)を兩側(りやうがわ)に分けて撫て附くこと。又(また)その頭髮(かみ)。

わけから譯柄(わけがら)「名」わけ(譯)に同じ。わけぎ分葱(ぶんそう)・葱(そう)「名」種(たね)・實(み)を結ばぬため、苗(さへ)を分けて繁殖(はふし)せしむるよりいふ」葱(そう)の種(たね)・葉(は)細(こ)く、根(ね)白(しろ)く、臭氣(きうき)少(すく)く、食用(じやうよう)に供(こう)するに風味(ふうみ)良(よ)し。ちもと。

わけきなます分葱(ぶんそう)・葱(そう)「名」分葱(ぶんそう)のなまりて、わけき・錦(にしき)のかをり」

わけきぬ和氣絹(わきぎぬ)「名」昔(むかし)・備前國(びぜんこく)和氣郡(わきぐん)和氣町(わきまち)より織りて出だしし絹布(きぬふ)。

わけきよまろ和氣清曆(わききよれき)「名」(人)朝臣(あそ)・鐸石(たつし)別(べつ)命(みこと)の裔(いり)・備前國(びぜんこく)藤野郡(ふぢのぐん)の人・神護景雲(じんごけいぐん)年中(なとし)・右兵衛少尉(みぎべゐしやうゐ)となり。近衛將監(きんゑしやうかん)に當り、遂に因幡員外(いんぱんゐんげ)介(すけ)となる。孝謙天皇(こうけんてんかう)・遷て、僧道鏡(そうだうきやう)を寵(めい)し給ひしかば、道鏡(だうきやう)權(けん)を恃(たも)みて、遂に因幡員外(いんぱんゐんげ)介(すけ)を企(こころ)ふ。清鏡(せいきやう)・宇佐(うさ)に赴(おもむ)き、宇佐八幡(うさはちまん)の神託(しんたく)を承(うけ)り來て、天津目副(あまなみそ)は必ず皇胤(みまろ)たるべし、無道(むだう)の人は、速(すみ)かに誅(しゆ)を加ふべしと奏(そう)す。道鏡(だうきやう)・大に怒(いか)り、姓名(せいせい)を別(べつ)加藤(かとう)・改(かへ)め、大隅國(だいよこく)に流(なが)す。光仁天皇(こうにんてんかう)・位(ゐ)に即(つ)き給ふに及び、召し還(よこ)されて、姓名(せいせい)を復(かへ)せしめられ、累進(るいしん)して、中宮大夫・從三位(じゆんさんゐ)に至り、延暦十八年(えんりきじゅうはちねん)卒(す)す。年六十七。正三位(せいさんゐ)を贈(たま)られ、明治三十一年(めいしじゅうしちねん)・更に正一位(せいいちゐ)を贈(たま)られ、

わけきり「名」詳(しょう)かならず。盗人(たうじん)仲間(なかつま)の用(もち)語(ご)ならんといふ。諸曲(しよきよく)・無義(むぎ)・三條(さんじょう)の衛門(ゑもん)・壬生(にんせい)のこ小猿(こざる)・火(ひ)としの上手(うへ)手、わけきりには、これらに、上(うへ)は、よも越(こ)さじ」

わけ「譯」分子(ぶんし)「名」いろこ(色子)に同じ。若風(わかしやう)・衆道(しゅうどう)……分子(ぶんし)までも、刃物業(や)無用(むよう)の事」

わけがめ

宗東本願寺派(そうとうほんねんじは)にて用ふ。醍醐(たご)の聖寶(せいほう)・御縁(ごゑん)・語(ご)の時、險難(けんなん)を攀(のぼ)るに、袈裟(けさ)・草木(そうぼく)に纏(かか)りて、通行困難(たうじやうこんなん)なりしより、袈裟(けさ)の縁(えん)を取りて、通(と)うの中に三衣(さんゐ)・この種子(しゆし)を收(と)めて、三衣(さんゐ)に代用(だいよう)せしより始まり、種子袈裟(しゆしけさ)と呼びしものの一轉(いつてん)せしなりといふ。又(また)天台宗(たいたいしゅう)にては、慈惠(じゑ)大師(だいし)に始(はじ)まりといひ、東密(とうみつ)の或説(ごくせつ)には、小野(おの)の仁海(にかい)が、皆(みな)大師(だいし)の遺體(ゐたい)に觸(ふ)れし右手(みぎて)に香燭(かうしやく)を、胸(むね)より下に下げぬために制(せい)せしなりと傳(た)ふ。義經(ぎけい)・千本櫻(せんぽんおう)・首には輪袈裟(りんけさ)・手に衣(え)を」

わけざと譯里(わけざと)・分里(ぶんり)「名」わけ(譯)・圓(まる)を見よ」いろざと(色里)に同じ。永代藏(えいだいざう)・分里(ぶんり)の美形(みけい)・世間子(よかんこ)・息氣(いき)女郎(じやうらう)にもまれぬれば、譯里(わけざと)の事(こと)なりとて」

わけざら分皿(ぶんりら)・別皿(べつりら)「名」物(もの)を取り分けるに用ふる皿(ひら)なるべし。茶室(ちしつ)一品(いっぴん)の宮の御ほうもち、わけ皿(わけりら)・わけがひども、皆、むすび袋(ふくろ)にて」

わけじら「譯」譯(わけ)不知(しらず)・分不知(ぶんしらず)「名」わけ(譯)・圓(まる)を見よ」情事(じやうじ)を解(と)く事(こと)・又(また)その人(ひと)・不祥(ふしやう)のやば。五人女(ごにんめ)・さて、さても、衆道(しゅうどう)のわけ知らずめ」

わけじり「譯」譯(わけ)知(し)・分知(ぶんち)「名」わけ(譯)・圓(まる)を見よ」情事(じやうじ)を解(と)く事(こと)・又(また)その人(ひと)・粹(すい)・粹人(すいじん)・通人(とうじん)・いろしり。ことしり。わけよし。一代男(いちだいなん)・わけ知(し)の世(よ)之(の)介(すけ)・色道大(しきだうだい)・わけ知(し)の味(あじ)をよく辨(わ)へたるといふ心(こころ)なり。當道(たうだう)の味(あじ)をよく辨(わ)へたるといふ心(こころ)なり。わけじりだて「譯」譯(わけ)知(し)・分知(ぶんち)・分知(ぶんち)・譯(わけ)知らしき見(み)せかくること。一代男(いちだいなん)・わけ知(し)たる茶漬(ちぢ)子の幅(はた)廣(ひろ)」

わけじり「譯」譯(わけ)知(し)・分知(ぶんち)・分知(ぶんち)・譯(わけ)知(し)の男(おとこ)・一代男(いちだいなん)・世(よ)にある程(ほど)の分知(ぶんち)男(おとこ)・わけぢまらう和氣女郎(わきじやうらう)「名」下等(したう)なる女郎(じやうらう)。「大阪新町遊廊(おさかしんまちゆうらう)の語」

わけけて別けて「副」多くの中(な)にて、ことと。とりわけて。別して。特別(とくべつ)に。わきて。わいて。

わけどめ脇止(わけどめ)「名」京阪地方(きやうはんちほう)にて、中年以上の婦人(ふじん)の、鬘(まみ)を解(と)け崩(くず)れぬやうにするに用ふるもの。

をえむわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

わけどり 分取【名】二人以上にて分け  
て取ること。ぶんどり。 醍醐寺盗人、物  
を取りすまして、……、それぞれに、資財  
を分取にしけるが」

わけなし 譯無【名】譯無きこと。たやす  
きこと。

わけね 分根【名】根分【名】して得た  
もの。 根分【名】瀬川菊之丞と承いへ  
る若女形あり。この人、先【名】菊之丞が實  
生【名】には、あらがねの土の中より掘り  
出したる分根なるが」

わけのせき 和氣關【名】【地】昔、備前  
國にありし關所。その址は、舟坂【名】峠  
の麓にて、和氣郡三石【名】村の西なる關  
川といふ細流の邊なるべしといふ。神功  
皇后凱旋の時、虜坂【名】忍熊【名】の二皇  
子謀叛し、明石の堺に兵を置くと聞き、弟  
彦【名】王を遣して、この地に防がしめら  
れし時の設置に係り、王は、その功により  
て、磐梨縣【名】を賜はり、姓を和氣と改  
めらる。磐梨縣は和氣郡の地の古稱なり。

わけのわた 別渡【名】【地】わけ【和  
氣】を見よ。

わけひろむ 和氣廣蟲【名】【人】清瀨  
の姉。初、葛城戸主【名】に嫁す。孝謙  
天皇に奉侍し、天皇の落飾に隨ひて、出家  
し、名を法均と改む。神護景雲二年、弟  
清瀨の、道鏡の意に背きて、竄せらるるに  
及び、備後に流さる。光仁天皇、位に即き  
給ふに及び、召還せられ、桓武天皇の朝、  
正四位上・典侍に進み、延暦十八年卒す。  
年七十。天長二年、正三位を贈られ、大正  
四年、護王神社に合祀せらる。

わけふ 和協【名】わけ【和】に同じ。

わけへだて 別隔【名】人によりて、不同  
の取扱をすること。かれを親しくし、こ  
れを疎んずること。

わけばふ 譯法師・分法師【名】【わ  
け【譯】】を見よ。情事を解せる法師。  
【人】けんかうほふ【兼好法師】の異稱。  
俗名淺黄童子【すなでしげり】松山の、か  
の譯法師が、そこはかと書き集めにし徒  
然【し】に」

わけまへ 分前【名】その人の分けて取  
るべき分【名】。わりまへ。とりまへ。

わけめ 分目【名】【物】を分けたる所。わ  
かちめ。 然、御領髪上げさせたまへる。釵  
子【名】に、御分目の御髪【名】の、聊か寄り  
て、著【名】く見えさせたまふ。【物】事を  
分ち定むべきを。天下分目の戦

わけの絲【名】下の文を見よ。貞丈雜記  
「分目の絲とは、女の、髪を下ぐる時【常  
のさげ髪にはあらず、今時すべらかし  
と云ふ物の如し。今のすべらかしとは、  
少し違ひたり。】、額髪に、三所、分目を立  
つなり【分目の髪は、童子髪置の記  
に見えたり】。その時、分目の、一つにな  
らぬやうに、分けたる髪を、黒き片絲に  
てゆひて置く。その絲を、分目の絲と  
云ふなり。分目の絲の上には、髪、の毛  
を、薄く掛けて、絲を隠すなり」

わけめ 鬚目【名】鬚の毛の折り曲げた  
る處。 冥途の飛脚【名】の鬚目のほつれをわ  
けて進じよと、櫛を取る」

わけもち 分持【名】互に分けて受け持  
つこと。分擔。 甲陽軍鑑【名】みかたは、遠州  
家康と分持なれば、この人衆動かさず」

わけもの 縮物【名】櫛・杉などの薄き  
材を圓形に縮げ、合はせ目を棒の皮など  
にて綴り、底を取り附けたる容器。まげ  
もの。

わけよし 譯善分善【名】【譯善し】を  
見よ。譯の善きこと、又その人。わけし  
り。 心中は初め朝【名】女子【名】亭主の譯よ  
しが……人に情【名】を掛調の」

わけらる 譯らし・分らし【形】【わけ  
【譯】】を見よ。情事に關係あるらし。い  
ららし。 一代男【名】ふすま聲子も、假名ぶみ  
の反古張【名】、上書【名】、悉く破りしは、  
譯らしく見えて」

わけこ 和子・我子・吾子【名】【和は假借の  
文字】。幼兒を親み呼びかくる語。あご。  
萬葉【名】わが思ふ吾子まさきありこそ」

わけと 和雇【名】相談つくにて雇ふこと。  
わこ【和語倭語】【名】日本の言葉。わが  
國の語、やまとことば。 運歩色葉集【倭語

ワコ

わご 我ご【名】わ我の條下を見  
わごう 倭寇和寇【名】足利時代に、我  
が國の邊民が、朝鮮・支那等の沿海を掠略  
せしもの。明國の暴民も、加はりたりと  
いふ。 ばはんせん【八幡船】参照。

わこく 和國倭國【名】【地】日本。や  
まと。 和朝。 徒然草【名】……、和國は單  
律の國にて、呂の音無し。【織物の一。  
二代男孔雀織・網代【名】・升形、やうきも、  
和國などの大袖】

わこくも 和國餅【名】昔、江戸新材木  
町【今は日本橋區の内】に、力士和國が賣  
り出しし餅、その家は、院本・戀娘昔八丈【  
の材料となりし白子屋お熊の家の跡と  
いふ。】

わこくわう 輪後光【名】輪狀なる後光  
をこさき 和子様・我子様・吾子様【名】  
わこ【和子】の敬稱。 狂言【名】人【名】わこ様  
を、お座敷に寝させておきました」

わごし 輪越【名】次條の略。

輪越の神事【名】次條に同じ。

輪越の祭【名】【茅輪【名】を滑り越す  
義なるべし】「夏越【名】の祓」に同じ。  
爲仲集【名】わごしの祭するに、伊井諸【名】  
の社にて神樂するほど」

わごせ 我御前・吾御前・和御前【代】  
【わ【我】】を見よ。女に對する親愛の意  
の第二人稱。 平家祇王、入道殿に申しけ  
るは、……と申しければ、入道、いいて、い  
て、さらば、我御前があまり言ふ事なれ  
ば、見參して返さんとて」

わこし 我事・我郎【代】【我御事の義な  
るべし。わ【我】】を見よ。親愛の意の第  
二人稱。 おこ。 國姓爺和郎【名】は、……  
、船路を變へて追ひ附けよ」

わごど 和事【名】芝居にて、温和なる事  
態を演ずる役。

わごどろく 和語燈錄【名】【書】法然  
上人の和文の法語。七卷。文永十二年。  
淨土宗鎮西派の了慧の編。 〔者〕

わごどし 和事師【名】和事を演ずる役  
わごむ 輪護謨【名】細き輪狀をなし、伸

はして、商品などを包紙の上より束ねる  
に用ふる護謨。

わこん 和魂【名】やまだましひ【大和魂】  
和魂漢才【名】我國固有の精神と、支  
那の學問と。 尊家遺訓【凡國學所、要、雖、  
欲、論涉古今一究、天人、其自、非、和魂、  
漢才、不能、闡、其、間、奧、矣】

わこん 和琴【名】やまごこ【大和琴】に  
同じ。 琴瑟【名】。和琴。

わこんし 和琴師【名】古、大歌所に屬し  
て、和琴の事を掌りしもの。

わごりよ 我御料・吾御料・和御料【代】  
【わ【我】】を見よ。親愛の意の第二人稱。  
狂言【名】六曲【名】やあ、やあ、こちの事ぢや  
か……なる程、わごりよの事ぢや」

わごれ【代】次條の註。 狂言【名】わごれ  
は、何しに來た」

わごれう 我御料・吾御料・和御料【代】  
わごりよ【我御料】に同じ。 狂言【名】わご  
れうが宿借さぬとて」

わさ輪さ【名】紐を、輪狀に結びたるも  
の。わな。

わさ早【接頭】早き意。 「田」【わさ苗】  
わさ業【名】【事】する事。 しわざ。 しごと。  
はたらき。 所行。 古今、戀ひ死ねとするわ  
さならしめば玉のよるはすがらに夢に見  
えつつ。 【務】としてする事。 天徳歌合記  
「左大臣して、歌のかちまけのわささせ  
たまふ。 【習】ひ學びてなしうの方法。技  
術。 【法】事。佛事。伊勢【名】それ失せたまひ  
て、安祥寺にて、みわざしけり。 【子】ぎは  
ひ。 なりはひ。 生計。 産業。 職業。 伊勢貧  
しければ、するわざもなかりけり。 【子】  
を生むこと。 産。 【古語】。 源氏【名】若や  
に、わさをしつるとも、おぼされず。 【こ  
と。さま。 事。 次第。 源氏【名】よろしき事  
にだに、斯かる別の悲しからぬは無きわ  
さなるを。 【狐・狸】などが、報復として、  
人に與ふといふわざはひ。 あた。 たたり。  
わさい 早飯【名】早稻【名】の飯。 【古  
語】。 萬葉佐保川の水をせき上げて植ゑ  
し田を刈る早飯は一人なるべし」

わさう 和装【名】我國固有のよそほひ。

わさ

わさ

わさ

わさ



わし（私）和市（名）賣手と買手とを調和せ  
わし（私）わたくし（私）の略。傾城酒吞童  
子「わしが位かえ。極（ま）ったとほり五  
分（ぶん）でござんす」



古の神社ならんといふ。俗稱、大鳥(オホトリ)の大神。**■**東京市淺草區淺草田甫(アサカヲ)の長國寺(チヤウコクジ)(本立山と號す)内にある神社。前項のを勸請(カンケウ)せるものにて、毎年、

わじや

例祭の日、謂はゆる西町(わにし)の賑を呈す。俗稱、大島神社又、新島(わにし)。

わじやうらんえうりやく 和字正濫要略(名)「書」次條を見よ。

わじやうらんせう 和字正濫抄(名)「書」定家(わ)假名遣の誤を正し、記、紀、萬葉等の古書に本づきて、歴史的假名遣を記せるもの。五卷。僧契沖の著。橘成員といふ人、和字古今通例全書(八卷)を著して、これを評駁せしより、契沖、更に和字正濫通抄(五卷)を著して、評駁の淺見なるを排撃したるが、公にするに至らず、別に筆鋒を和けて、和字正濫要略(二卷)を出せり。我國の假名遣は、この書によりて略確定せられたり。「見よ」

わじす 走す「句」わしる(走る)の條下を

わじたいくわんせう 和字大觀抄(名)「書」音韻を上卷に、假名遣を下卷に記し、二卷とせるもの。僧文雄の著。但し、假名遣は、和字解を踏襲せるに過ぎず。

わじつ 鷺津(名)「地」遠江國濱名郡吉津(わ)村の大字。濱名湖の西畔。今、鐵道東海道線の停車場あり。舞坂と二川(わ)との中間にて海岸に臨み、眺望すぐれ、櫻樹多く、法華宗の名刹本興寺あり。

わじつかみ 鷺掴(名)「書」鷺の、物を掴む如く、はげしく物を掴み握ること。目牡蠣(わ)など、海底に在る貝類を採捕する要具。長さ二三間の二本の柄の先に、鐵製の、構造鉄の如きものを取附け、柄を動かして、採捕の目的物を挟みて引き上ぐ。

わじづくり 鷺造(名)「書」太刀に、鷺の形を、金具又は蒔繪にして附けたるもの。盛衰詞下、蒔繪に、思慮賢しとて、鷺造の太刀を賜はれり。「音便」

わじつばな 鷺鼻(名)「書」わしはな(鷺鼻)の太刀に、鷺高嶺(名)「地」次條に同じ。萬代にけふぞ知る鷺の高嶺に照る月を谷川汲みし人の影とは「

わじのみね 鷺峯(名)「書」わしのみね(鷺峯)に同じ。後拾遺、鷺の山隔つる雲や深からん常にすむる月を見ぬかな「

わじのやま 鷺山(名)「地」わしのみね(鷺峯)に同じ。後拾遺、鷺の山隔つる雲や深からん常にすむる月を見ぬかな「

わじのをさくら 鷺尾櫻(名)「書」櫻の一品種。花の色白くして、八重・一重の咲分(わ)をなすもの。「次條に同じ」

わじのをさくら 鷺尾三郎(名)「人」源義經の臣。三郎と稱す。長身・強健にして、膽氣あり。壽永三年二月、義經、一の谷を攻めんとて、鶴越に向ひし時、夜暗くして、路險しきに、三郎(十七歳)を得、姓名を鷺尾經春と命じて、嚮導となし、大に平軍を破れり。爾來、常に義經に従ひ、軍功多し。義經の、陸奥國に走るに當り、從ひ行きて、衣川に戦死す。年二十二。一説には、義經と共に蝦夷に逃ると、(以上)源平盛衰の傳ふる所なれども、平家物語には、鷺尾義久とあり、且つ、鶴越の時、十八歳と傳ふ。「前條を見よ」

わじのをよひさ 鷺尾義久(名)「人」わじはじめ 和事始(名)「書」我國の事物の起源・故事を記せるもの。六卷。貝原好古の著。

わじはな 鷺鼻(名)「書」鼻の先の、鷺の嘴のやうに、尖り曲れるもの。わしづばな。

わじふ 和習(名)「書」我國の國風。漢詩・漢文の語句の用法、又は、漢字の書風等の上に現るる、我國人の習癖。和臭。玉勝鬘(わ)すべ、漢學(わ)する人の、手を書けるにも、詩文を作れるにも、和習・和習と、常にいふ事なるを「

わじま 輪島(名)「地」能登國風氣至(わ)郡にある町。繁華・七尾(わ)に亞ぎて、國中第二に在り。もと郡役所ありたり。

わじまざうめん 輪島素麺(名)「書」能登國輪島町より産する素麺。

わじまぬり 輪島塗(名)「書」能登國輪島町より製出する漆器。通常、黒・赤・緑の三色を主とし、膳・椀・平皿・壺・盆等多く、堅牢にして久しきに耐ふ。慶長中、紀州根

わじのよき 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

わしん 和親(名)「書」わし(わ)の住民の半数は、これに依りて衣食す。

應ず。同ず。一致す。他人の詩歌に答へて、詩歌を作る。因利韻をなす。

和して同ぜず【句】「論語の子路篇に「子曰、君子和而不同、小人同而不和」とあるに本づく。和は、道理に従ひて睦くする義、同は、利益に従ひて睦くする義、道理を以て睦く交はれども、道理に反りたる事は、あくまで是非を争ひ、決して、利益のために心を枉ぐることをせず。

わす 和す【動】佐達他【二】やはらぐやうにす。陸親親せむ。和合せしむ。【三】まぜ合せしむ。混和せしむ。混交せしむ。【四】わすみ 輪炭【名】「形、車の輪に似たるよりいふ」大なる木炭を、薄く輪切にせるもの。

わすらす 忘らす【動】四他【一】次條の敬語。【古語】「萬葉人皆のうらぶれをるに龍田山御馬」近づかば忘らしむを」

わする 忘る【動】四他【一】次條に同じ。【古語】「萬葉」わすれはわすれぬか」同「堀江越え遠き里まで送りける君が心は忘らゆまじも」

わする 忘る【動】下二他【一】心に留まらぬ様にす。失念す。遺忘す。【二】漏らしおとす。置き忘る。遺失す。

忘るる草【句】「植」わすれぐさ【名】(忘草)【三】に同じ。伊勢今はとて忘るる草の種をだに人の心にまかせずもがな」唐物語「忘るる草の種をだに取てしがなと思へども」

忘れても【句】いかなる場合にも、必ず注意して。一代男、この人、勘の外は、忘れても、人に手も握らせず」

わすれ 忘【名】忘るること。萬葉「わすれむと野」行き山行きわれ來れどわが父母はわすれせぬかも」

わすれ 忘【名】忘るること。萬葉「わすれむと野」行き山行きわれ來れどわが父母はわすれせぬかも」

ぶ草見るに心は慰まてわすれがたみに漏る涙かな」【二】父の死にたる時、未だ母の胎内に残りゐて、生れざりし子。遺腹の子。源氏など、わすれがたみをだに留めたまはずなりけん」

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るること。【三】たかくにつけて忘るること。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るること。【三】たかくにつけて忘るること。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るること。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るること。【三】たかくにつけて忘るること。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るること。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るること。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

國にある濱。不忘山の附近なるべし。伊勢集「年ふれどいつもわれこそわすれずの濱千鳥とはなきわたりけれ」

わすれ 忘【名】忘るること。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わすれ 忘【名】忘るのこと。【二】やもすれば忘るのこと。【三】たかくにつけて忘るのこと。

わせい 和清【名】くわせい(和清)に同じ。わせいち【名】早蕨【名】(植)くわせいち【名】(草)に同じ。

わせいね 早稲【名】(植)わせいね【名】(早稲)に同じ。わせた 早稲田【名】早稲を作りてある田。わだ 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わせた 早稲田【名】(地)東京市牛込區の西部にある地。北の方、江戸川を隔てて、小石川區關町に接する低地。昔は、大半、田畑なりしが、故侯爵大隈重信の邸宅、早稲田專門學校(今の早稲田大學)等の建つと共に、人家、漸く加はりて、繁華なる町をなすに至り、今は、早稲田町、鶴巻の町山吹町等に分た。

わさ

を見よ」僧を親みて呼ぶ第二人稱。我(わ)法師。(我俗(わ))に對して。字通和僧の頭や腕(わ)に取り附きたりつるちども」(萬葉記)「和僧のさのみ廳の御使を欺くべき事やある」

わさく 和俗(わ) 我國の風俗。日本の習慣。賀古教信七葉廻和俗に聞くならく」

わさく 我俗 吾俗 和俗(わ) 代(わ) 我(わ)を見よ」俗人を親みて呼ぶ第二人稱。(我俗(わ))に對して。萬葉記「和俗は、平家何候の家人(わ)か、國國の驅武者(わ)か」

わた海(わ)「船にて渡る處なるよりいふ」うみ海(わ)に同じ。「古語」萬葉わたの底かづきて知らむ人知れず思ふ心の深きくらへに」

海の神(わ)「わたつみ(海神)に同じ。「古語」紀海神、ワタノカミ」記海の神、名(わ)は大綿津見(わ)の神を生みまし」

海(わ)「うなはら(海原)に同じ。「古語」古くわたのはら八十島(わ)掛けで漕ぎ出てぬと人には告げよあまの釣舟」

海の屯家(わ)「(わ)海外に於ける屯家。「古語」記百濟(わ)の國をば、渡(わ)の屯家と定めたまひき」

わた綿綿(わ)「次項の草綿(わ)の種子の毛。絲織物に製し、又、衣服、蒲團(わ)などに入れて、保温の料に供す。我國のは、産額少きのみならず、纖維短く太くして、彈力強きため、紡績の材料としては、米國印度等よりの輸入品を用ふ。きわた。棉花(わ)。「絮」後には、真綿(わ)を、もいひ、草綿(わ)の種子より製したるを、これと區別する時は、木綿綿(わ)又は生綿(わ)といふ。萬葉しらぬひ筑紫(わ)の綿は身に著けて未だは著ねど暖く見ゆ」和名綿。和多。絮也」

わた綿綿(わ)「(わ)錦葵(わ)科に屬する一年生の草。高さ三、四尺に達す。葉は互生し、掌狀に分裂し、葉柄長く、五瓣の黄花を開き、卵形又は球形にして、三箇乃至五箇の胞に分れたる形を結び、熟すれば裂開して、各胞中に五箇乃至七箇の種子を含み、種子は白色の長毛を具ふ。その毛を綿と稱し(前項参照)、又、種子より油を搾りて、燈用その他の用に供す。原産地は東印度及び亞刺比亞にして、諸暖地に栽培す。我國にては、延暦十八年七月、崑崙人三河國に漂着せし時、齋しし種子を、翌年栽多しもの、その初なれど、中世、又絶え、文祿年間、再び渡來せりといふ。きわた。「棉草綿、草棉」新六「敷島やまよとはあらぬから人の植ゑてし綿の種は絶えにき」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「首を締む(わ)「真綿(わ)で首を締む」に同じ。吾吟我集「食はせつづ魚を吐かする鵜使は綿にて首を締むる心よ」

わた

至七箇の種子を含み、種子は白色の長毛を具ふ。その毛を綿と稱し(前項参照)、又、種子より油を搾りて、燈用その他の用に供す。原産地は東印度及び亞刺比亞にして、諸暖地に栽培す。我國にては、延暦十八年七月、崑崙人三河國に漂着せし時、齋しし種子を、翌年栽多しもの、その初なれど、中世、又絶え、文祿年間、再び渡來せりといふ。きわた。「棉草綿、草棉」新六「敷島やまよとはあらぬから人の植ゑてし綿の種は絶えにき」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「首を締む(わ)「真綿(わ)で首を締む」に同じ。吾吟我集「食はせつづ魚を吐かする鵜使は綿にて首を締むる心よ」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた綿(わ)「綿のやうにならむ。疲勞の極に至らしむ。蒲島年代記口の強(わ)い荒馬でも、一貫では乗り伏せて、綿にする」

わた

わた曲(わ)「入り曲りであること、又その所。「古語」萬葉さざ波の志賀のおほわただむと昔の人に又も逢はめや」枕七むだにわたかまたりたる玉」

わた和田(わ)「(地)今の攝津國神戸市兵庫和田町の地。もと八部(わ)郡に屬したり。即ち和田岬の在る所。平家、日本和田の平大相國の許へとて」(地)淀川沿岸の古の地名。後世の攝津國三島江又は河内國枚方(地)の邊ならんとて、土佐和田の泊のあがれる所」(姓)三浦氏の一族。義盛、今三浦義宗の子。三浦氏の支族。三浦義宗の子。義明の孫なる義盛、今の相模國三浦郡初聲(わ)村大字和田の地に居り、地名を取りて姓とす。回わたやま和田山)を見よ、和田の一門(わ)前條國の一族。義盛、北條氏を恨みて、これを亡きことを謀り、一族九十餘人、却つて悲壯なる最期を遂げしより、特にいふ。一代武運の葉笠を著たるやうなる子供……九十五六ほども立ち並び、……和田の一門より多くて」(我我會格出)和田の一門九十三膳、代物(わ)合はせて三百八十四文なり」

和田の笠松(わ)「(名)津の國の和田の笠松(わ)」。讀田善知鳥」津の國の和田の笠松(わ)」。讀田善知鳥」

わたあき綿秋(わ)「秋、綿の實の熟する頃。置土産(今)もよき綿秋なれば、その庄屋が取り込む銀(わ)ほしや」

わたあぶら綿油(わ)「綿の種子より搾り取る油」

わたあへれうり腸醬料理・腸醬料理(わ)「(名)わたに(腸煮を見よ)魚介の腸をその肉に加へてあへたる食品なるべし。きのふはけの物語」折ふし、坊主は、鮑(わ)のわたあへ料理をなさるが」

わたあめ綿筒(わ)「あめ(綿筒)に同じ。

わたあめ綿筒(わ)「あめ(綿筒)に同じ。

わたあめ綿筒(わ)「あめ(綿筒)に同じ。

わたあめ綿筒(わ)「あめ(綿筒)に同じ。

わたい

わたい私(わ)「わたし(私)の音便、(女子などの俚語)」

わたい話題(わ)「談話の題材」

わたい綿板(わ)「建」綿入の綿の如くなるよりいふ」いれこいた(入子板)に同じ。

わたいり腸照(わ)「鯉の腸を、垂(わ)味増にてからりと煮たる食品」

わたいり(わ)「ひきわたし(引渡)を見よ」

わたいり綿入(わ)「衣の、表裏ありて、中に綿を詰めたるもの。表裏の綿布なるものを小袖(わ)といひ、木綿なるを布子(わ)といふ。わたぎぬ。わたごも(單物(わ)・袴(わ)に對して)

わたいりきもの綿入著物(わ)「前條に同じ」

わたいりれおひり綿入羽織(わ)「綿入に仕立てたる羽織(單(わ)羽織・袴羽織に對して)

わたいりわ和大黄(わ)「植(わ)を(羊)を見よ」我我會格出)和黨(代)「わ(我)を見よ」第二人稱の卑稱の複數。なんぢら。字通や、わたう、連歌だに附かぬと附けたるぞかし」

わたうし和唐紙(わ)「我國にて、唐紙に擬へて製したる紙」

わたい

わだかまる 蟠る【動四自】『曲(の)屈(の)まるの略』うづくまるやうにして横にめぐりかがまる。ひろがる。とろろまぐ。蟠屈す。わだまる。『七つだにわだかまりたる玉のなかりて』宇治(の)蛇(の)……『わだかまり臥したれど』

わだかまる 蟠る【動四他】ひそかに、我物とす。横領す。著服す。五十年忌歌念佛「主人の金子をわだかまり」

わたしがみ 綿上綿嚙【名】『肩(の)上(の)轉』といふ。わたしろ(肩白)わたはほ(綿包)参照『鎧の一部。左右の肩に當りて、胸部と背部とを連ね、胴を釣る用を爲す所。後方は、背の上部即ち押附(の)板に連なり、左右共に、外方に向けて袖附(の)緒あり、これに鎧の袖を取附け、又式正(の)の鎧には、上方に向けて障子の板あり。太平記組んで勝負をせんと、鎧の綿嚙を掴んで』『頭の後部の毛髪。うしろがみ。謡曲夜討我「わたしがみ掴んで、えいや、えいやと組み轉んで」』綿上の横板【句】『押附(の)板』に同じ。『胴立(の)の横木。』

わたがみかけ 綿上掛綿嚙掛【名】鎧のわたがみから綿殻藤幹綿幹【名】草綿(の)より、その種子の白毛即ち綿を收穫したる後の莖。佛蘭新選集身「綿殻の干かせる軒や村時雨」

わたき 綿木綿木【名】草綿(の)の、その種子の白毛即ち綿を收穫したる後の、枯れたるもの。

わたきぬ 綿衣綿衣【名】わたれ(綿入)に同じ。然「雨の足、横さまに騒しう吹きたるに、夏とほしたるわたきぬの、汗の香(かなど)かわき」

わたくし 私【名】己の一身に關してあること。表向ならぬこと。〔公(の)に對して〕盡忠こなたなたとかしづき聞えたまふ宮仕に添へて、むつかしき私の心の添ひたるも、苦しかりけり。平近(今)まで参らざる條、私ならぬとは申しながら、不義の至。『親みて、大切にすること。空「行く末までも、私の后に思はんかし」』

運兵なにがしが私の君と思ひ申して」『公の許可を得ぬこと。世間に披露せぬこと。平近「私の女(の)に申し置き進らせ候」』四「孟子の公孫丑下篇に「有私三壘斷焉」とあり」公共の權利又は利益を、己一身の用に供する。『己一人の好惡に任せて、片手落に取り計らふこと。偏頗。偏私。不公平。夫木(旅)を行きしあとの宿守おのおのに私あれや今朝はいまだ来(ぬ)』

私の後見【句】將軍の後見職なるよりいふ。しけん執權(の)異稱。『公の後見に對して』増廣故將軍の時より、私の後見なりしを。『法人。私の組合團體【句】「法」私法上の社團私を忘る【句】私情私事を忘れて、王事國事に従ひ、又は、正道に従ふ。』

わたくし 私【代】『名詞のわたくし(私)の轉義』男女通用の第一人稱。あたくし。わたし。

わたくし あきなひ 私商【名】本職を疎かにして、ひそかに商賣すること。綿商私商の仕掛の暇なく。五十年忌歌祭文「私商に赤穂鹽買うて、損をして」

わたくし あめ私雨【名】麓の地方は晴天なるに、山上のみ雨の降ること。五人女「軒端は、もろもろの葛(の)這ひかかりて、おのづからの滴(の)涙の私雨とや申すべき」

わたくし ありき 私歩【名】私用のため。他行。會我「今度は、思ひとどまりて、後後、私ありきの便宜を待ち給へや」他人に隠れてあること。しのびあるき。

わたくし いくさ 私軍【名】公(の)のためにあらぬ戦。私闘。義經記某と御邊とは、私いにくさめ」

わたくし がね 私金私銀【名】私(の)の金錢。私財。一代男(人の)知らぬわたくし銀」

わたくし こと私事【名】私(の)に關する事。公然ならぬ事。しじ(公事)に對して「運兵「御うぶやしなひ、三日は、例の、ただ宮の御わたくし事にて」』己の利益を計ること。私曲。

わたくし さま 私様私方【名】私事(の)の方面。うちうち。内内(の)様。運兵「これは、御私さまに、内内の事なれば」

わたくし じこ私仕事【名】本職を疎かにし、ひそかに他の仕事をして、賃錢を得ること。丹波興作前(の)やうに、客は勤めず、私事に、賃(の)組み」をを見よ。

わたくし しい私大【名】津輕の私大(の)の。大切に思ふもの。祕藏物。〔古語〕落着いたくしものにて、我所に住ませ奉らん。大鷲みかどの御領にてのみさぶら所を、今更にわたくし物にのみさぶらんは。『飛燕外傳に「早有私病、不近婦人」とあり』かくしどころ。陰部。(主に、男子の)にいふ。きのふはけふの物語「戸の節穴より、わたくしものを、いかにも見事にしたてて、によつと出す」

わたくし 綿屑綿屑【名】綿の屑。くづわた。

わたくし 綿綿綿綿【名】綿にて造りたる猿轡。謡曲離魂「綿轡を、むすとは」〔阿部植に同じ。〕

わたくし ぬき綿襪綿襪【名】〔植〕あへまきわたくり腸襪腸剣綿襪【名】射込まれたるを引抜け、腸のひきかりて繰り出さるといふ。襪の一部。運歩色葉集腸襪、ワタクリ。矢根。〔矢〕の異名。

わたくり 綿繰綿繰【名】棉花(の)を繰りて、種子を除き去ること、又それをなす人。佛蘭古選集「綿繰や嵯峨にも浮世あればこそ」大條の略。生玉心中「つゝ時花眼(の)顔すれど、眼は綿繰で繰るやうで、響いて、物も言はれぬ」前條に同じ。

わたくり ぐるま綿繰車綿繰車【名】綿繰(の)の用に供する車。木製にて、軸によりて回轉す。わたくり。

わたるま 綿車綿車【名】わたるま(絲車)に同じ。心中實地「下女(の)」、並んで紡ぐ綿車」

毛。にこげ。絨毛。毳毛。〔ばらけ〕散毛。に同じ。

わだけ 輪竹【名】わ(輪)を見よ。推(の)の竹。たが。〔京都大阪邊の語〕五人女「蓋」なしの外(の)井月、……かの榎屋を呼び寄せて、輪竹を新しうなしぬ」

わたけみ 綿検見綿検見【名】徳川時代に、畿内中國にて、綿作(の)の地に行ひし検見。綿作検見。

わたて 綿子綿子【名】胴著(の)用又は兒供用の、袖無き綿いれ。ちゃんちゃん。ちゃんちゃん。

わたて 腸子黄鋼魚【名】〔動〕わたか(腸衣)に同じ。字鏡「腹、和太已呂毛」

わたさう 和田草【名】〔植〕信濃國和田村に産するより得たる名。石竹科に屬する多年生の草。高さ約三寸乃至六寸、葉は對生し、下部のは細長く、頂のは廣く、二節の葉相接近せるため、輪生の觀を呈す。四五月の交、莖頂に、一箇或は二三箇づつ、微細なる缺刻を有する五瓣の白花を著け、各細長き花梗を具へ、莖の下部にも、葉腋に、短き花梗生じて、花冠を缺ける花を著く。我國本州の諸山に自生す。よつばはこべ。

わたさか 和酒酒盛【名】和酒盛(の)盛が、一門百八十騎を率ゐて、相模國宿河原(の)長者の許にて、大酒盛を催し、遊君虎御前を招けども來らざるは、會我祐成に心を寄するたためなりとし、祐成を含めて、酒席に苦しめんとせしより、祐成の弟時致、駈け附けて、兄の危救を救ひし由、會我物語に見えたる話。後世、舞曲・古淨瑠璃・院本小説の材料となりて有名なり。〔幸若(の)舞の曲の一。〕

わたさく 綿作綿作【名】綿(の)の耕作。わたさくけみ 綿作検見綿作検見【名】わたさく(綿検見)に同じ。

わたさね 綿實綿實綿實【名】わたね(綿種)に同じ。一代男「水銀(の)綿實・唐がらしの粉」

わたし 渡【名】船を泛べて、人などを乗

わたし

せて、對岸に渡らしむること、又その所。  
わたり。津。渡津。渡頭。金鑓。大井川  
るせきの音の無かりし紅葉をしけるわ  
たしとや見ん。わたたりいた(渡板)に同  
じ。わたしがね(渡金)の略。  
渡を呼ぶ(句)對岸に渡らんとて、渡  
船に聲を掛く。蕪草。渡呼ぶ草のあな  
たの扇かな。〔む人。〕

わたし。綿師。綿師(名)眞綿の製造を營  
わたし。私(代)わたし(私)の略。  
わたし。あふ。渡合ふ(動四自)わたりあふ  
(渡合ふ)に同じ。百日會戰。新經に渡しあ  
ひ、切り結び、切りほどき。

わたし。かけ。渡掛。互繫(名)相撲(云)の  
手の一。掛の一種。四手(云)に組み、相手  
の、下手にて廻(云)を取り、引き寄せて投  
げんとする時、内側より足を掛け、體を相  
手の方へ押し進めながら倒すもの。大渡  
掛。小渡掛の二種あり。

わたし。かた。渡方(名)賣買の當事者の  
内、目的物を渡す方。賣り渡す方の人。  
わたし。がね。渡金(名)耳盞の上に互  
して、齒ぐらめの道具を載する、幅二三寸  
の板。眞鍮製又は銅製なり。わたしき。  
火の上に互して、魚肉などを炙るに用  
ふる、鐵製の具。目(る)鼓(に)に同じ。

わたし。ぎ。渡器(名)前條(に)に同じ。  
わたし。こみ。渡込(名)たぐりかけ(手繰掛)  
に同じ。

わたし。じやう。渡狀(名)うちわたりじやう  
(打渡狀)に同じ。應仁私記。郡代の渡狀。  
わたし。せん。渡錢(名)渡(の)貨錢。わ  
たしちん。渡賃(名)前條に同じ。義經  
記。羽黒山伏の渡賃、關手(云)なす事は  
なきぞ。

わたし。は。渡場(名)わたし。わたりば。  
渡口。渡船場。津頭。渡頭。  
わたし。ぶね。渡船(名)渡場にて、人馬、  
貨物を渡す船。わたたりぶね。とせん。夫木  
「わたしぶねたりなりけり」  
旅人渡すわたたりなりけり。

わたし。まい。渡米(名)「商」賣方より買

わたし

方に渡すべき米。〔取引所の語〕

わたし。しんじや。和田神社(名)攝津國神  
戸市兵庫和田町に鎮座せる縣社。祭神は、  
天御中主(みけぬし)神。  
わたし。もの。渡物(名)雅樂にて、樂曲の  
本調を、他の調子に移し換ふるもの。雙  
調(ふたしら)に限るといふ。

わたし。しり。渡守(名)渡船を漕ぐ船頭。  
わたたりしり。渡人(名)津人。渡夫。照集  
「あまの河わたししりにもなりてしが棚  
機つめにけふは任せじ」  
わたし。しろ。肩白(名)「わたがみ(綿上)参照」  
何色にても、緞の袖の上二段を白くせる  
もの。又、一説に、片方を、筋違に白く緘  
せるものともいふ。

わたし。ろ。あか。あか。肩白赤緘(名)あか  
さしたしろ(赤緘肩白)に同じ。  
わたし。ろ。を。ど。肩白緘(名)わたし。ろ(肩  
白)に同じ。

わたし。を。ん。渡女(名)主人に進むる  
食膳を、御末女(ごご)の者より取り次ぐ女中。  
一代女「御末女(ごご)渡女に至るまで、  
車座に見えたりし中へ」  
わたし。す。度。度(動四他)「一の土地  
より、他の土地に移す。空襲もろこしへ  
渡されぬ」太平記。玄井の、大般若を渡さ  
んとて、流沙の難きを凌ぎ。〔水面を、  
船にて、對岸に達せしむ。〕「濟す」黄葉。渡  
守(ご)船渡せをと呼ぶ聲の至らねばか  
も楳の音せぬ。目(る)通(り)過ぎしむ。通行  
せしむ。太平記。船田長門守の手の者、か  
れを生け捕り、白晝に東坂本を渡し、大將  
新田左中將の前に面縛す。〔一方より  
他方に連なると。跨らす。かく。〕「架す。  
互す」紀。かたの淵に網張りわたし。黄葉  
「天の川棚橋渡せ棚機(の)のい渡らさむ  
に棚橋渡せ」目(る)ひが(彼岸)参照。  
佛、衆生(しやうじやう)の迷を救ふ。濟度す。〔濟  
す〕千載。皆人をわたさんとと思ふ心こそ  
極樂へゆくしるべなりけれ。増盛。人を  
わたさんばしとして。〔あまねく及ば  
す。行きわたるやうにす。〕見渡す。〔言  
ひ渡す〕目(る)さづく。興ふ。交付す。ひ

わたす

きわたす。〔に同じ。〕

わたす。す。綿菅(名)「植」さきす(菅)。  
わた。せ。渡瀬(名)わた。り。せ(渡瀬)の略。  
〔古語〕夫木「かち人のわたせの波も道絶  
えて丹生(に)のかはらの五月雨の空」  
わた。ら。う。げ。和田嶺和田峠(名)〔地〕信  
濃國小縣(こ)郡和田より諏訪郡の下  
諏訪町に至る五里十六町の山路。中仙道  
に當り、海拔五二〇七尺、頗る險路なり。  
わた。だ。ね。綿種。綿種棉種(名)綿(の)  
種子。わた。ね。

わた。だ。び。葯醬。葯葵(名)「植」きんま(葯  
醬)に同じ。〔古語〕和名葯醬。一名、葯  
葵、和太非。

わた。た。び。木天蓼(名)「植」また。び(木天  
蓼)に同じ。〔古語〕和名木天蓼、和太  
非。

わた。た。る。腸樽(名)肥料に用ふるため、  
魚類の腸皮骨などを入れてある樽。  
わた。ち。轍(名)車の通過したる後に残  
る輪の痕。車轍(ご)新云。小車の道の  
小野松はやとせわだちも見えず日は暮  
れにけり。

轍に伏す。涸魚、三斗の水を求む(句)  
「轍(ご)の急に同じ。太平記。夢なる  
かな、昨日は、海をはかりし大鵬の、九霄  
の雲に搏(とら)むが如く、今日は轍に伏す  
涸魚の、三斗の水を求むるに異ならず」  
轍の魚(句)次條に同じ。

轍の鰯(句)て、條に同じ。  
わた。つ。渡津(名)〔地〕石見國那賀郡にあ  
る村。江川(ご)の河口に位す。延喜式  
にいふ江東縣にして、古來の渡津たり。  
萬葉。柿本朝臣人麿從三石見國別妻上來  
時歌、……いさなとり海邊をさし  
てわた津の荒磯(の)の上に」  
わた。つ。う。み。渡津海(名)わた。つ。み(渡津  
海)に同じ。〔古語〕後拾遺。わた。つ。う。み  
深き心のなかりせば何かは君を恨みしも  
せん」  
わた。つ。くり。綿作。綿作棉作(名)綿(を)  
を作ること、又その人。〔造綿者、ワタ

わたつ

つくり

わた。つ。しんじや。渡津神社(名)佐渡國  
佐渡郡羽茂(は)村に鎮座せる國幣小社。祭  
神は五十猛(いそたけ)神。一説に、海童(の)神  
なりと。創祀の年代、詳かならず。

わた。つ。み。綿津見。綿津見(名)「わたは  
渡(の)の義、つは領格の助詞、みは靈妙の  
義」海を支配すといふ神。伊弉諾(い  
ざな)伊弉冉(いざな)二神の御子に、大綿津見神  
あり、又、底津(の)綿津見命、中津(の)綿  
津見命、上津(の)綿津見命あり。おほわ  
たつみ。海若。海神。海童。紀。少童、此  
云和多都美(と)萬葉。わた。つ。み。の。手。に。纏  
(か)したる玉簪。

わた。つ。みの。神(句)前條に同じ。〔紀  
「海神、ワタツミノカミ」  
わた。つ。みの。神の宮(句)海神の居る  
といふ宮殿。龍(の)の宮。龍宮(の)宮。  
紀「海神宮ワタツミノカミノミヤ」  
わた。つ。みの。國(句)海神の領すとい  
ふ國。海中にありといふ國。〔海郷、  
ワタツミノクニ〕  
わた。つ。みの。郷(句)〔句〕前條に同じ。  
紀「海神郷、ワタツミノサト」  
わた。つ。みの。宮(句)「わた。つ。みの。神の  
宮」に同じ。

わた。つ。み。渡津海(名)「わた。つ。み。綿津  
見」の轉義。うみ(海)に同じ。萬葉。渡  
津海の豐津雲(とよ)に入日さし今宵の月  
夜(よ)明らけくこそ」  
わた。つ。み。綿摘。綿摘棉摘(名)綿(の)  
の實。即ち棉花(の)を摘むこと。わた。と  
り。無杜。綿摘や烟草の花を見て休む」  
わた。つ。み。しんじや。海神社(名)對馬國  
上縣(の)郡峰村木坂に鎮座せる國幣中  
社。祭神は豐玉姬(とよたま)命。一説に、彦火  
火出見(ひこ)尊。豐玉姬命。鸕鷀草不合  
(うさぎ)尊。宗像(の)神。道主貴(みちぬき)神。  
創祀年代は詳かならずと、名神(の)神。  
大社にて、古來當國の一の宮たり。又、  
正(の)八幡宮と稱し、日本八幡宮の舊本  
社なりと稱す。

わたなべのぼる(渡邊登)に同じ。  
わたなべ一たら 渡邊黨〔名〕 渡邊三の一  
黨。保元、兵庫頭頼政の手にも、渡邊黨に

わたりぬき 綿拔・緋拔〔名〕綿入の綿を抜  
きて、衿とすること、又その衿 字彙「袂  
未／絮衣也。合乃古呂毛、又、和多奴支」

の綿帽子は、旅宿へも招く。又、貸座敷へ一月雇にもするなり」目わたぼうしゆき(綿帽子雪)の略。

白汁を出す。葉腋より花莖を抽き、頭狀花を著け、苞は筒様にして五裂し、舌狀花冠は白色にして、上邊二裂す。本州の暖

互為相

わたん

地及び小笠原島に産す。

わたん 話談「名」だんわ談話に同じ。

わたん 和暖「名」時候のおだやかにて、あたかきこと。暖和。溫和。

わたん 和談「名」談判ととのひて、睦じくなること。太平記兩方談合して、或は和談し。

わたん わた持「名」わたは腸に、腸を有する者の義なるべし。生きてあることなるべし。用明天皇職人鑑「たへ、わたもちの釋迦阿彌陀が出たるとて、我が法にかなふべきか」

わたん 綿屋「名」綿を賣る家、又その人。綿打を職とする人。

わたん やま 和田山「名」地。近江國神崎郡にある山。愛知「名」川の右岸。北五個庄村に屬す。佐佐木政頼の第三子高成、城を築きて居り、和田氏と稱し、世襲せしが、永祿十一年織田氏來攻の時馬淵宗綱等堅守したれども、其作城陷るに及び、城を棄てて甲賀山中に遁る。

わたん ゆき 綿雪「名」綿をちぎりたる如く大片をなして降る雪。わたばうし。

わたん ゆみ 綿弓「名」わたらちゆみ「綿打弓」に同じ。芭蕉綿弓や琵琶に慰む竹の奥。

わたん 和田義盛「名」人。武將。本姓は三浦氏。義明の孫。小太郎と稱す。源頼朝舉兵の謀に參して以來、常に軍に従ひ、右衛門尉に任ぜらる。建保元年、泉親衡の北條氏を滅ぼさんことを謀るや、二子、これに讒し、事露はれて捕へられし時、自家の功勞を敘して、二子の罪を購ふ。後、姪胤長の事より、北條義時を怨みて、兵を擧げ、力屈して殺さる。年六十七。

わたん 渡良瀬川「名」地。下野國足尾山中の御子内。川。松本川の二流、赤倉にて相合してより以下の稱。足尾町を経て、上野國に入り、再び下野國に入り、又、上野下野の國境を劃し、下總國古河「名」の西を流れて、利根川に合す。

わたん 渡「名」世渡「名」の生業。なりはひ。渡世。活計。大和年頃、わたらひ

わたらひ

なども、いとわろくなりて」

わたらひ 度會「名」地。伊勢國十郡の「一。郡役所を宇治山田市に置きたり。祝詞「度會の山田の原の下」つ石根利「に」

わたらひ 度會川「名」地。伊勢國世わたりの種。古語。躬恒集たましく世わたりの浦に住むあまのわたらひぐきはみなりけり」

わたらひ 渡心「名」渡世の心がけ。世わたりの考。古語。空齋若き時にたくはへ、わたらひ心ある人」

わたらひ 伊勢國の人。醫者にして俳人たる斯波一有「名」川とも號すに嫁す。中頃難波に住み、蕉門に入り、夫の歿後、江戸に出て、深川に住みて、眼科醫を業とせり。享保十一年歿す。年七十四「一説に六十三」

わたらひ 伊勢國の第二子。伊勢の外宮の權國學者。延佳の第二子。伊勢の外宮の權國宜。出口氏。幼名は市之丞、通稱は權太夫、又、帶刀氏。講古堂と號す。家職を受けて、正四位下に至り、又、家學を祖述して、精養軒實父に超えたり。正徳四年歿す。年五十八。

わたらひ 渡會延佳「名」人。てふのふし「出口延佳」に同じ。

わたらひ 度會宮「名」會合郡にあるよりいふ。いせたいじんぐう「伊勢大神宮」の異稱。舊典第六天「やうやう行けば、鈴鹿路「名」や、多氣「名」の都の、程もな、度會の宮に著きにけり」

わたらひ 渡らふ「動四自」わたる「渡る」に同じ。古語。武藝雲間より渡らふ月の惜しげども隠るひ來れば」わたらひをなす。活計を營む。くらす。古語。記「活焉、ワタラハム」

わたらひ 船にて渡ること。夫木「越前國無木「名」の渡といふ所に、わたらせんとて、者ども集まりたるに」わたらせ「渡」に同じ。「濟」萬苦しくも降り

わたり

來る雨か三輪が崎佐野「名」のわたりに家もあらなくに」通り行くこと。廣義記「これは、法皇の御渡なり。誤「名」仕るな」

わたり 外國より渡り來ること。舶來。六六都集放尾南條「毛織を織らせ、外國の渡を持たず、用に給せん」とわたりにいた「渡板」の略。わたりがな「渡金物」の略。

わたり 渡世の略。源氏御わたりの事ども、心まうけさせたまふ」相談をしかくること。交渉。藤原氏大江山の親分が、鐵棒「名」引いてわたりに來ても、二つよん「夜番」に同じ。園恭にて、二つよんの連絡を取るために、その間に石を打つこと。

わたり 次條の略。風流軍配團扇、蘭は、渡に船、これこそ、敵の助言にも、よくは附けと」

わたり 渡に船を得「句」にあらんせん「如渡得船を見よ。諸曲「渡」に舟を得たりとや。あらたふとや、この御法」

わたり 渡の神「句」渡を司るといふ神。記「走水「名」の海を渡ります時に、その渡の神、浪を興「てて」

わたり 渡を附く「句」交渉す。道を附く。「町内「渡を附く」

わたり 徑「名」わたりの轉義「さしわたり「差渡」に同じ。字彙幅、絹耳。和太利」

わたり 邊「名」あたり邊に同じ。伊勢東の五條わたりに、いと忍びて行きけり」

わたり 毒ありといふ。一種の草。今草草の中に、和太利といふ草こそ、人それを食べひつれば、酔うて必ず死ぬる」

わたり 互理「名」地。磐城國十郡の一。郡役所を互理町に置きたり。磐城國互理郡にある町。陸前濱街道の一驛。鐵道常磐線の停車場あり。もと郡役所の所在地。信濃國の古の驛名。千曲「名」川の渡津。浦野と清水「名」の中間なれば、今の上田町附近なるべしといふ。

わたり 渡合ふ「動四自」相戦ふ。切り結ぶ。切り合ふ。太平記「我方らじと渡り合ふ」馬、抜き連れて渡り合ふ」出あひて、交渉す。

わたる

わたる あるく。渡歩く「動四自」一箇所に落ちつかず、轉轉して生業に勤む。

わたる 渡板「名」船に用ふる歩板「名」。長さ、二間より三四間に至るものあり。取廻「名」をよくするため、三四箇所に車を附けたるもあり。わたし。わたらだん。「流」に同じ。

わたる 和田流「名」かんきより「變極」わたるかへ渡掛「名」相撲「名」の手の一。雙方體を寄せて突き合ふ時、足を相手の内側より掛けて、體を滑め、兩手にて、相手の片足を抱き、肩をその脇に當てて、押し倒すもの。

わたる かせぎ 渡稼「名」土地を變へ、渡りあるきて、業を營むこと。

わたる 渡方五段「名」徳川時代に、淺草なる幕府の米廩より、切米「名」扶持米「名」役料「名」足高「名」等を旗本御家人等に支給するに、各札差が、旗本御家人の代理として、その取り扱ふ手形を、第一に百俵以下の役附の者、第二に百俵以上の役附の者、第三に百俵以下の無役の者、第四に百俵以上の無役の者、第五に役料の五段の順序に區分せしこと。

わたる 渡徒士「名」昔、小祿の旗本などに、渡奉公をせし侍。其角わたりがち見立つ頃の花見かな」

わたる 渡金物「名」兩開「名」の扉の合はせ目に設けたるしまり金物。うちかけがな。わたる。

わたる 渡川「名」さんづのかは「三途川」に同じ。古語。古今泣く涙雨と降らなん渡川水まさりなば歸り來るに」

わたる 土佐國四萬十「名」川の異稱。

わたる 渡皮渡革「名」舶來の獸皮。我々「名」やむ皮も渡皮なり」二つの居木「名」の間に敷き渡し、多く皮を用ふるよりいふ。いたはせん「板馬麈」に同じ。

わたる 渡貝「名」動「蛤」の一種。殻は、大きく、柴ばみて、斑文あり。

わたる 渡粥「名」わらばん碗飯に同じ。聖德太子の光武紀讀み終る日、わたる粥の饗「名」、大きにまうけて」

七世 表七 岸也」  
わたりーたん 渡段「名」わたりいた(渡板)に

わたりまき 渡卷〔名〕太刀の、鞘の鯉口

へ移り行く。重宝をたづねる日の星も隠るひ」**四** 水を越えて、岸より岸へと行く。

に屬する多年生の草。概形、和田草(サウダ)

わさき

に似て、葉は一層細長く、頂部の葉の特に廣からず、花瓣に缺刻なき等の點に於て異なり。山地に自生す。

わさき「代」『わたし(私)の訛』第一人稱。

「徳川時代の娼妓などの語」

わさやう 我丈・吾丈和丈「代」『わ我』

「目」を「目」上の男に對する第二人稱。讀本平記「實」にも、和丈の不審のとほり」

わさゆう 和衷「名」『書經の皋陶謨篇に「同寅協恭和衷哉」とあり』心の底より和「ふ」こと。

わさゆうさん 和中散「名」徳川時代の暑中の藥。白朮(びじく)・乾姜(かんきやう)・香附(かうぷ)等を等分に交ぜ、甘草を少し加へ、細末にせるものといふ。假名手本忠臣蔵「雷亂せんやうにと、娘がくれた和中散」

わさよ 我女・吾女和女「代」『わ我』を見よ」女を親みて呼ぶ第二人稱。狂言「わちよに名残は惜しけれども、背戸やうらやの泊船が急ぐ程の」

わさわ 戦戦「貌」わたわ(戦戦)に同じ。國難・足もわさわち候ひり」

わさ「感」『俄かに思ひつき、又は思ひかへす時の聲。狂言「鳥帽子折」こておきや。殿さま、ござりまするか。わ、こてもおきやらぬは』騒ぎ立ち、泣き出し、又は、小兒などの、戯に他人を驚かす時などに、急に發する聲。太平記「わつと呼」

わさ 和束「名」『地』山城國相樂(さる)郡にある地。古の莊名にして、布當(ふたう)川の上流に當り、今東西中の三村に分る。和束の墓「句」聖武天皇の皇子安積(あき)親王の御墓。山城國相樂(さる)郡西和束村活道(かち)の岡にあり。

わさ「數」すこし。いささか。少數。少量。僅少。些少。

わさ「か」僅「貌」程度輕く又は數量少きさま。かつがつ。いささか。はつか。就「さしださせたまへる御手の、わさかに見ゆるが、いみじうにほひたるうす紅梅なるは」

「當(や)川」の異稱。

わづか

わづか「が」は 和東川「名」『地』山城國布都(ふつ)郡にある町。邊沙布(さふ)の半島の東岸、沿岸海産物の集散地なるため、小樽との間に、汽船常々往來す。わかない。

わづか「やま」和豆香山・和東山「名」『地』山城國相樂(さる)郡和束の地にある群嶺。山嶺白たへの舍人(やしろ)装(き)ひてわづか山御興(やしろ)したして」

わづき「名」わかし。けちめ。區別。わき。

「古語」萬葉發立つ長き春日の暮れにけるわづきも知らず「(原本)和豆肝(わづき)とありて、豆は衍字、即ち、別(わづき)もなりとの説もあり」

わづくる 輪作る「動四自」輪の如くなる。圓く形作る。わどる。

わづ「名」梯子の子の、筋違に組みたるものかといふ。甲陽軍鑑「わづこの上梯(わづ)を、差物(さぶつ)ににして」

わづり「貌」心懸くして、物に滞らぬさま。さわやか。さっぱり。あつさり。狂言「三木住「頼うだ御方は、何事もわづりとして、御奉公が致しよ」」

わさ「わさ」『貌』次條に同じ。

わさ「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わす「よ」『感』重き物を、多勢にてかつぎあるく時の聲。やっしよ。

わつ

爲す仕事。キロワットの一千分の一。一馬力の七百四十六分の一強に相當す。専ら電氣的の仕事に用ひ、ボルトの起電力の下に、アンペヤの電流の通ずる時、その仕事は一ワットに相當するため、ボルトとアンペヤとの乗積を、ワットとす。

わつ「えん」ワット計「英」(Watt meter)「名」電力を測定する器。直流回路の電力は、電流と電壓との乗積なるが故に、電流計にてアンペヤを測り、電壓計にてボルトを測れば、その電力を知るを得べく、交流回路のは、その外、なほ力率計にて力率を知るを要すれど、この計器を用ふれば、直接に電力を知るを得。或瞬間の電力を指示するものと、各時刻の電力を自動的に積算して、一定時間内の全電力を示すものとの別あれども、何れも、電流自身の作用を利用して、指針を動かし、或は、小きモータアを仕掛けて廻轉せしむるやうにせり。電力計。

わつ「じ」ワット時「英」(Watt-hour)「助數」『理』電氣的の仕事の單位の一。ワットの三千六百倍。實用單位として用ふ。

わつ「じ」ワット秒「英」(Watt-second)「助數」『理』電氣的の仕事の單位の一。ボルトの起電力の下に、一秒間に「アンペヤ」の電流の通過する時の、電氣的の仕事。じゆう。

わつ「まん」『名』次條の略。

わつ「まん」ワットン紙「英」(Wattman paper)「名」英國ケン(Kent)州メドストン(Medstone)の特産なる、厚く純白色の、優等なる圖書用紙。もと、西曆一七七〇年、ワットマンといふ者當時の先進國和蘭に起きて、製紙の術を學び、歸來上記の地に於て製出せしに始まり、現今は、獨逸その他の模造に係るものも尠からず。

わつ「めえたあ」(英Watt meter)「名」わつ「えん」ワット計に同じ。

わつ「ば」童「名」『わらは(童)の轉訛』「童子を罵り呼ぶ稱。我(わ)のわつば奴(わ)を、弟と思し召され」「童子の、無理・我儘を言ふこと。わんぱく。わやく。目強

暴なる者を罵りていふ語。關八州警馬音に聞く不敵のわつばな」

わつ「ば」『足利幕府の末期の語』

わつ「ば」何や彼やと、氣儘に喧しく言ふさま。狂言「御前(ごぜん)近くて、何を、わつばと言ふ」同(六地蔵)この落中を、何を、わつばと仰るぞ」

わつ「ば」『名』前條に同じ。狂言「連歌里沙門「何やら、わつばさつばと仰せられた」

わつ「ば」『名』わつばに同じ。天神記「わつ「ば」割符「名」わつば(割符)の音便。

わつ「ば」割符「名」徳川時代に、百姓の公納せし年貢の目録。『關東の方言』

わつ「ば」割賦「名」割の音便。割り渡すこと。くばること。配賦。配當。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ

暴なる者を罵りていふ語。關八州警馬音に聞く不敵のわつばな」

わつ「ば」『足利幕府の末期の語』

わつ「ば」何や彼やと、氣儘に喧しく言ふさま。狂言「御前(ごぜん)近くて、何を、わつばと言ふ」同(六地蔵)この落中を、何を、わつばと仰るぞ」

わつ「ば」『名』前條に同じ。狂言「連歌里沙門「何やら、わつばさつばと仰せられた」

わつ「ば」『名』わつばに同じ。天神記「わつ「ば」割符「名」わつば(割符)の音便。

わつ「ば」割符「名」徳川時代に、百姓の公納せし年貢の目録。『關東の方言』

わつ「ば」割賦「名」割の音便。割り渡すこと。くばること。配賦。配當。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。わつ「ば」割賦金「名」割り渡す金。

わづらひ〜傾付く【動四自】やみつ

わづらふ 煩ふ【動四自】■嫌み思ふ。思

わづらひて【感】わああと同義にて、やや急

わてう 和調【名】てうわ(調和)に同じ。

わてう 和朝【名】■我國の朝廷。【わて

わてき 和笛【名】かぐらぶえ(神樂笛)に

わてき 和出来【名】わせい(和製)に同じ。

わど 倭奴【名】「地」わど(倭奴)を見

わてん 和點【名】「てん(點)」を見よ。

わど 話頭【名】■話の絲ぐち。はな

わど 和銅【名】■和銅(和銅)に同じ。

わど 和銅【名】■和銅(和銅)に同じ。

わど 和銅【名】■和銅(和銅)に同じ。

轡備中等にて發行せりといふ銅錢と銀

銀と。表面に「和同開珍」の文あり。何れ

わど 和獨【名】日本と獨逸と。

わど 和讀倭讀【名】漢文を、和語に

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

わど 倭奴國【名】「地」後漢書的光

禮拜。をな。

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

第一人稱。運歩色葉集「吾儕、ワナミ」

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

わな 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪



(に) (わ)

わがは

なり。二三海里を隔てて、朝鮮の釜山と、相對す。

わにがは 鰐革〔名〕鰐の皮にて製したる革。黒褐色を呈し、光澤あり。革靴(カウチ)・蝦蟆口(カウチ)などの製造に適す。

わにくち 鰐口〔名〕鰐の口。日人の横に廣き口を嘲りていふ語。一代女(カウチ)の口の小よし。日相手を欺き誑さんとする言葉の譬。天の鰐鳥(カウチ)に鰐口に乘るばかり。四極めで危険なる場合又は場所の譬。虎口(カウチ)。重井(カウチ)人聲の、我を尋ねてこう津の町を、急ぎ通るの鰐口や。佛殿の前庭に懸け吊す、金屬製の器。鈴を縦に届くせるが如し。その前面に接觸して、布を繞りたる長き條を垂れ、參詣人、拜をなす前に、その繩を、前後に振りつつ打ち附けて鳴らす。金鼓(カウチ)。聖い文字。清水へ參る。急げ、急げ。はや御前(カウチ)ぢや。まづ鰐口に取り附かうぢや。ぐんぐん(カウチ)鞍の前輪(カウチ)と後輪(カウチ)との磯の下、即ち山形(カウチ)と反對の側の、斜り込みたる部分。がまぐち(蝦蟆口)を云ふ。陸前國仙臺の方言。

わにくちもたま 鰐口羅望子〔名〕「植」てうさもたま(羅望子)に同じ。

わにさめ 鰐鰲〔名〕鰐を食ふことある鰲鰲の俗稱。わにぶか。わに。鰐(動)に(鰐)に同じ。

わにじ 假漆〔名〕次條の轉訛。

わにす 假漆(英 Yashish)〔名〕樹脂又は乾性油を、溶劑に溶かしたる塗劑。塗面に美觀を添へ、又、空氣及び濕氣等の作用を防ぐをなす。にす。かしつ。

わにひさくち 鰐一口〔名〕おにひさくち(鬼一口)に同じ。

わにぶか 鰐鰲〔名〕わにさめ(鰐鰲)に同じ。

わにふだう 我入道・吾入道・和入道〔代〕「わ(我)」を見よ。入道を親しみて呼ぶ第二人稱。盛衰(カウチ)かく宜ふ和入道は「わにぶち」で、鰐淵寺〔名〕がくえんじ(鰐淵寺)に同じ。

わににんじん 鰐人參・和人參〔名〕「植」てちばにんじん(樺葉人參)に同じ。

わにやう

わにようばう 我女房・吾女房・和女房〔代〕「わ(我)」を見よ。女房を親みて呼ぶ第二人稱。沙石集(カウチ)わ女房の嘆を、法師とぶらはずとて恨みたまふなる。

わにら 華尼拉(西 Yandila)〔名〕「植」蘭科に屬する、蔓生・常緑の草。凡そ二十種を含める一屬にして何れも、各節より葉と莖は肥大強堅、高く上昇し、各節より葉と氣根とを互生し、葉は、肉厚く、長楕圓狀披針形をなし、葉腋に、黄綠色にして黄斑ある巨大なる二十箇以上の花、總狀花序をなして開く。その未熟の果實を乾燥せしめ、香水に香氣を附するなどに用ふ。

わにる (動)上一自しぐむに同じ。關西の方言。油漬(カウチ)苦苦しくもをかしかりける(さいふ句)に。關魔王惚れたといへばわにられて。

わにるら 華尼爾拉〔名〕「醫」日本藥局方にて、ワニラの果實しを乾燥たるもの。芳香性健胃劑として用ふ。「魚類」に同じ。

わにるの 鰐類〔名〕「動」がくきよる(鰐)に同じ。わね 我吾〔代〕われ我に同じ。「東國の古の方言」萬葉うべ子なはわねに戀ふなもと月のぬがなへゆけば戀(カウチ)しかるな。

わめき 輪貫〔名〕「指物」の「一」。平蓋簪(カウチ)竹束の芯を越ゆる時、大鳥毛の輪貫の指物、竹(カウチ)かかして。紋所の「一」。氏標記「輪貫」の旗を指し。

わめけ 輪拔〔名〕輕業にて、數尺の高きに置きたる輪を、身を躍らせてぐり抜くる技。わくぐり。

わめじ 我主・吾主・和主〔代〕「わ(我)」を見よ。對等以下の人に對して用ふる第二人稱。おめし。そなた。宇治(カウチ)わめし、まづ參れ、參れといひて。

わのくわくかう 〔名〕「植」かはみどり(排香草)に同じ。

わのさんざらい 和山歸來〔名〕「植」さるざらいばら(菝葜)に同じ。

わのり 輪乘〔名〕馬術にて、輪形(カウチ)に乗り廻すこと。輪を掛けて乗ること。

わはい 和買〔名〕賣手と相談の上にて

わはう

わはう 和方〔名〕我國在來の醫方。(漢)わはうじ 輪帽子〔名〕享保の頃、婦女の用ひし一種の帽子。夏は絹、その他は縮緬を用ひ、輪に造りて、額より胸に垂れ、額に當る所に紐ありて、背へ廻して結び、胸の所は、針にて留めおきしもの。

わはは 〔感〕口を大きく開きて笑ふ時の聲。わははあ。あはは。狂言(カウチ)三千石「笑うて去(カウチ)のず……わはは」

わはん 和板・和版〔名〕我國にて出版すること、又その書籍。諸般(カウチ)平野唐本を和版にするより始まること。わびしきこと。萬葉(カウチ)今は我(カウチ)はわびぞしける息の緒に思ひし君をゆるさく思へば。閑寂なる風趣。質素を主とする趣。(茶道にて)寧び。さび。醒睡(カウチ)花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや。利休は、わびの本意として、この歌を常に吟じ。曾我(カウチ)八景(カウチ)の伏屋(カウチ)の物ずきに

わび 〔名〕「前條の語の轉訛」わぶること。過を謝すること、又その言葉。あやまり。謝罪。陳謝。

わび 〔名〕「句」詠の言葉を申し入る。詠に入る。句。詠の言葉を申し入る。わび。偏に陳謝す。

わびいんじや 佗隱者佗隱者〔名〕佗住(カウチ)の隱者。わびしく暮らす隱者。

わびうた 佗歌・佗歌〔名〕わびしきにあまりに詠む歌。竹取(カウチ)文(カウチ)を書きてやれども、かへりごもせず、わび歌など書きておこす。佗果す。〔動下二自〕詠言が協ふ。わびが利(カウチ)。世間(カウチ)手代(カウチ)何とぞわびおほせてやるべし。

わびごと 佗事・佗事〔名〕わびしき事柄。新勅撰(カウチ)わびごとや神無月にはなりけん涙の如く降る時雨かな。

わびごと 佗言・佗言〔名〕佗ぶる言葉。わびしく思ひて言ふことば。かこちこと。源氏(カウチ)いられがましきわび言どもを書き集めたまへる文(カウチ)。

わびさ

わびごと 詠言〔名〕詠の言葉。謝罪の辭。御覺紙(カウチ)廿四孝「驚きてわび言をする間、丁爾も、氣の毒に思ひ」

わびさ 佗聲・佗聲〔名〕佗しきの餘に發する聲。大鷲(カウチ)鳴は木綿(カウチ)附島(カウチ)の佗聲に劣らぬ音(カウチ)ぞぞ鳴きて歸りし。俳諧新選(カウチ)春(カウチ)佗聲に蛙の中の田螺かな。

わびさくら 佗櫻・佗櫻〔名〕わびしげに立ちてある櫻。

わびさぜ 佗戲・佗戲〔名〕わびしきあまりに、戯れてすること。

わびじ 佗し・佗し〔形二〕佗ぶべきまなり。望絶えて嘆かひし。慰む方なくして、心細し。さびし。たよりなし。つらし。後世(カウチ)世の中に忍ぶる戀のわびしきは途ひての後の途はぬなりけり。生計、思のままにならず。おちぶれてあり。見すばらし。貧し。宇治(カウチ)とかくして、身一つばかりわびしからて過(カウチ)しけり。閑寂なり。幽寂なり。さびてあり。

わびしやう 詠狀〔名〕詠の意を述ぶる書狀。わびてがみ。謝罪狀。

わびしら 佗しら・佗しら〔貌〕わびしく見ゆるさま。わびしげ。古語。昔方「秋の蟲なにわびしらに聲のするたのみし陰に露よりもりゆく」

わびすき 佗好・佗好〔名〕佗の趣味を愛すること、又その人。太閤(カウチ)佗好の面をこれ、めてたき御代にあひて、價貴き道具をも拜見し。新水(カウチ)代(カウチ)無用の茶の湯に、佗好を仕出し。

わびすけ 〔名〕「植」椿の一品種。花小さくして美しく、冬咲くもの。

わびすま 佗住・佗住〔名〕わびしく住まふこと、又その住居。閑居。幽居。

わびせん 佗禪師・佗禪師〔名〕佗住(カウチ)の禪師。佗しく暮らす僧。佗びたる僧侶。兼其(カウチ)佗禪師乾(カウチ)蛙(カウチ)に白頭の吟を彫る。

わびてかみ 佗手紙〔名〕わびじやう(詠狀)を見よ。親愛の意にて用ふる第二人稱。そなた。あなた。平治(カウチ)我人どもが心剛な

らば「平家」さいふ和人もこそ、……北  
陸道に「さまよひ」

わびなき 侘鳴 侘鳴(名) わびしげに鳴  
くこと。萬葉など鹿のわび鳴するけだ  
しくも秋野(名)の萩やしじに散るらむ」

わびなみだ 詫涙(名) 詫の涙。謝罪の  
涙。新撰歌集身身の涙と、……詫涙」

わびにん 詫人(名) 詫を言ふ人。他人に  
代りて、詫を言ふ人。謝罪の人。

わびね 侘寝 侘寝(名) 侘しきあまり  
に寝ぬること。芭蕉暮れ暮れて餅を御  
(名)の侘寝かな」

わびびと 侘人 侘人(名) わびしく暮ら  
す人。不如意なる生活の人。古今わび  
とのわきて立ち寄る木のもととは頼む陰な  
くもみぢ散りけり」

わびもの 侘者 侘者(名) 前條に同じ。  
沙石集わび者の盲目にて侍るが」

わびゆにん 侘湯人 侘湯人(名) 侘人な  
る。湯客。三代湯或わび湯人」

わふ 和布(名) 地(名)のやはらかきぬの  
にきたへ」

わぶ 侘ぶ 侘ぶ(動上二目) 侘の字は、實  
は誤用。事、思のままにならずして苦  
しむ。慰む方なくして、心細く思ふ。さ  
びしく思ふ。うらぶる。わぶる。萬葉思  
ひたえわびしものをなかなかに何か苦  
しく逢ひ見そめけむ」大和國の守(名)、民  
疲れ、國のまじむべしとなんわぶる。生  
計、思のまじむべし。おちぶる。貧乏  
す。拾遺古は奢れりしかどわびぬれ  
舎人(名)が衣(名)も今は著つべし。閑  
靜に住む。閑寂を樂む。幽居す。諸曲松  
馬「この須磨の浦に心あらん人は、わざと  
わびてこそ住むべかりけれ」

わぶ 詫ぶ(動上二目) 前條の語の轉義。  
詫の字の原義は誇る意なるを、侘びたる  
結果、言葉に出して免(名)を乞ふ意に取  
りなして用ふ。ゆゆるしを乞ふ。萬葉  
「利息をなりとも、少しはゆるされよとわ  
びけるに、質屋、更に聞かず」。過を謝  
す。謝罪す。陳謝す。あやまる。

わふう 和風(名) おだやかに吹く風。

わびなき

暖和なる風。はるかぜ。日(地)ふうりよ  
くかい(風力階)を見よ。目我國在來の風  
習。日本風。和様。(唐風、洋風に對して)

わふう ちやうじゆらく 和風長壽樂  
(名)しゆんあてん(春鶯囀)に同じ。

わふうらく 和風樂(名) 雅樂の一。唐  
樂にて、雙調に屬す。弄春樂。和名雙調  
曲和風樂。日しゆんてい(春庭樂)に  
同じ。又、別種の曲なともいふ。

わふく 和服(名) 我國在來の衣服。(支  
那服、洋服などに對して)

わふち 輪縁(名) 車の輪の周圍。

わふつ 和佛(名) 日本と佛蘭西と。

わぶん 和文(名) 和語にて記せる文。  
中古文。日文。日日本語にて記せる文。  
國文。日本文。

わぶんてんばう 和文電報(名) 我國の  
片假名數字又は、(長音)(句讀點)(  
新章)(括弧)(小括弧)(除線)等の記號を用ひて記載する電報。  
(歐文電報に對して)

わぶり 輪振(名) 次條の略。

わぶりどけい 輪振時計(名) 時計の一  
種。盤(名)を用ひ、その渦狀の内端を、輪  
(名)の軸部に、外端を運動に關係なき部  
分に固定し、輪を一方に回し、渦を巻き締  
めて、放つ時、盤は舊形に復せんとし、  
輪を逆轉し、輪の惰性により、左右に等時  
性の振動をなすもの。下振(名)を用ひた  
るものと異にして、狭き場所にも裝置す  
るを得るを以て、懐中時計は、全部これに  
屬し、アンクルシリンドル等の種類あり。

わぶる 侘る(動下二目) わぶ(侘ぶ)に  
同じ。(古語) 萬葉立ちかへり泣けども  
われはしるしな思ひわぶれて寝る  
夜しぞ多き」

わへい 話柄(名) だんい(談柄)に同じ。

わへい 和平(名) 和(名)ぎて、おだやか  
なること。靜平。平和。和睦。保馬關白  
殿と左大臣殿との御中和平の由」

わほく 和墨(名) 日本製の墨。和製の  
墨(唐墨に對して)

わぶち

わぼく 和睦(名) 和(名)ぎしたしむ  
こと。協和。和合。和熟。日なかなかほ  
り。たひらぎ。和解。和熟。

わほふし 我法師 吾法師 和法師(代)  
わ(我)に同じ。素問わ法師めが、人  
あなづりして」

わほん 和本(名) 日本紙を以て、日本風  
に仕立てたる書物。和綴(名)の本。(洋本  
に對して)

わまほし 輪廻(名) 竹又は鐵などの輪  
を、地上にころがし、又狀をなせる棒の部  
分を、輪の下方に當てて押し進め、輪の倒  
る、まてころがし續ける遊戲。

わみこぞ 我尊 吾尊 和尊(代) 我(我)  
目を見よ。尊長者を親みていふ第二人  
稱。今昔この立てる相(名)の木は、和尊の  
目には見ゆや」

わみち 輪道(名) 理(り)んだう(輪道)に  
同じ。「のはしむること。

わみん 和民(名) 人民を、睦まじくと  
わみやう 倭名 和名(名) 我國にて稱す  
る名。やまとな。運歩色葉集「倭名」

わみやうせう 倭名鈔 和名抄(名) 書  
わみやうはんさう 和名本抄(名) 書  
わみやうはんさう 和名本抄(名) 書  
庶物の名稱を列擧して、その形状・性質・  
効用等を詳述したるもの。十三卷。向井  
元升の著。

わみやうらうせう 倭名類聚鈔 和  
名類聚抄(名) 書 天地鬼神・人倫など  
の部門を分ち、漢字にて言語を類聚し、解  
釋を加へ、萬葉假名にて、その和名を記し  
たる辭書。二十卷。源順の撰。延長中、  
醍醐天皇の第四の内親王の命を奉じて撰  
進す。部門の數、二十四部、百二十八門と  
傳へたれど、現存のは四十部、二百四十九  
門なれば、後に増補せるものなるべしと  
いふ。倭名抄。

わむし 環蟲(名) 環蟲(名)類に屬  
わむすび 輪結(名) 紐の結び方の一。

わん 灣(名) 海水の、陸地に、弓形(名)に  
入り込める所。いりうみ。いりえ。海灣。

わん 碗(名) 飲食物を盛り分くる器。木

わむし

製の挽物にして、漆にて、内外を塗る。多  
くは蓋附屬す。まり。「碗・盤」碗に  
盛り出す料理。目わんもり(碗盛)の略。

わん 碗(名) うて(碗)に同じ。

わん 暗(名) 犬の吠ゆる聲。「荖わんと  
言へさあ言へ犬も年わすれ」

わん 碗碗(助數) 碗に盛りたる食物を數  
ふるに用ふる語。「汁三碗」

わんうり 碗賣(名) 碗を賣りあるくこ  
と、又その人。續撰養老「碗賣も出でよ  
芳野の初時雨」「駿河國・越中國の方言」

わんかけ 碗(名) ふろしき(風呂敷)を云ふ。  
わんかた ちやくじやく 碗方六尺(名) 徳  
川幕府の職制の一。膳所寮所頭に屬して、  
膳碗の洗淨などに從事せし六尺。

わんきう 碗久(名) 人(名) 大阪の豪商。  
碗屋久兵衛といひ、難波御堂前(名)に住  
み、新町(名)遊廓の松山と呼ぶ遊女と馴  
染を重ね、金銀貨を座敷に時々の豪奢  
をなししより、親類縁者より、一室に押込  
められて、發狂し、後、少しく癒えて、延寶  
五年、京都に歿す。日次條の略。

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わんきう 腕曲(名) 汗(名) 汗ぬぐひ。  
運歩色葉集「腕中、ワンキ。汗拭之事」

わん

わん

みはりづき。鼓月。昔の陣立にて、人を鼓月の形に列ねしもの。「じ」

わんこう 灣口 [名] ふきながし(吹流)に同

わんこう 灣口 [名] 灣の出入口。

わんこう 腕骨 [名] [醫] 英 Carpal bones 手首の根部にある、八箇の小骨。

腕節によりて、相連なると同時に、一方は前膊骨と、又、一方は掌骨と、關節によりて連接す。

わんざい [名] わんざん(和説)の訛。風流軍配圖「妾は、娘の仇、暇のしるしに、首打つて渡せと、わんざい言ひしは」

わんざいがある [名] 「ガアルは英(三)女優の、藝能未熟にて、特別の役割は無く、只、舞臺に居並ぶのみなる者。〔俚語〕

わんざくれ [名] わざくれの音便。凱旋八島「わんざくれ、命も其と思へども」

わんざん 和説 [名] 〔わんざん(和説)の音便。會費今に始めぬ梶原がわんざんといひながら〕

わんざん 難題。王生大徳佛「わんざんなる事を仰せられます」薩摩「常わんざんとは事難し、道理至極に、返答なく」

わんざふわん 万ざふワン [名] 「フワンは英(三)わんざふガルに熟中する觀劇者。〔俚語〕

わんざ 万ざ [名] 物見の場所に、大勢込み合ひて押し寄するさま。

わんじや 腕車 [名] じんりきしや(人力車)わんじや [名] 〔植〕はかまから(袴葛)に同

わんじや [名] 〔掌骨〕に同じ。

わんぜん 腕前骨 [名] 〔醫〕しやうこ

わんぜん 腕足類 [名] 〔動〕環蟲類の目。海中に産し、介殼にて被はれ、腹殼は背殻より大なるもの。現時生存せるは、酸蝕貝、三味線貝など、少數にて、多くは、地質時代のものに屬す。

わんたん 饅飩・雲吞 [名] 饅飩の字の支那音の訛。具さには、肉包饅飩といふ。一寸餘に切りたる中に、庖刀にて刻みて敲きたる豚肉に、胡椒粉と、細かに切りたる葱と、少量の食鹽とをまぜたるを包みて、

わん

つまみ、これを湯煮をして、椎茸又は昆布の煮汁を掛けて食ふ。ぶたうどん。

わんちん 腕枕 [名] 細字又は細綴なる油畫を書く時、手先のふるへぬために用ふる具。細字のは、竹を二つに割りて造り、形茶斗の如きもの。油畫のは、細長き棒の一端を枠線に掛け、他の一端を、左手にて支へ、右の腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わんちん 腕首 [名] 腕首を、その棒に掛く。

わん

わんひき 腕引腕挽 [名] 挽物細工にて、腕を作ること。諸國はなし、絶割坂にて、腕引せしと思ひだして」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わんぼ 縋袍 縋袍 [名] わんぼ(縋袍)の訛。馬子(三)にわんぼ」

わん

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わん 我文字 吾文字 [代] 「わん(文字)は接尾語」われ(我)に同じ。聖徳太子傳「萬物部の守屋とは、わんもじが事か」

わよ

わら

わらがふ

わらし

10



程のいとものきたなうも儼はさりける  
にや」

わらはまひ 童舞【名】わらはは田の演ず

笑の中に刀を砥ぐ【句】「笑中（セウチ）に刃を磨ぐ」に同じ。太平記、言の下に

わらびくち 笑口〔名〕笑ふ口つき 俗名  
草紙(鉢かづき)「物言ふこわいろ、笑口」  
わらびぐわとう 蕨瓦燈〔名〕『蕨の初生

褐色を帯びて、中央濃く、裏の襞は黒褐色を呈し、直徑約一寸、軸は直徑約一分、長さ三寸内外、中空にして、下部は微黃色を

わらび

の如し。これをして、狂態・亂舞を演ぜし實、例古来少なからず。  
わらびて 蕨手(名) 蕨にきりこぶし(提拳) 蕨に同じ。油糟春の野に懸鞠講の始まりて(いふ句)に禮を奉るかや上ぐる蕨手

わらびな 蕨餅(名) 蕨の根茎の、蕨粉を採取せる後の纖維を打ちて柔げ、後に日に曝し、十分乾かす中に、綿ひいて作らる。色黒くして、善く水濕に堪ふ。社殿・亭(の)屋根、袖垣などを結ふに用ふ。奈良・三重邊の産佳なり。油糟思ふままには結はれざりけり(いふ句)に 水打てどなまじりぬる蕨餅

わらびの廻書(句) 文字を、くるくると廻したる形に書くこと。醒睡笑書きやうは蕨餅のまはしがき

わらびの蕨野(名) 蕨の生えてある野。蕨科蕨野やいさ物炭かん枯燭燭

わらびのし 蕨炭(名) 蕨のし 二字を、蕨の初生葉のやうに續けて書きたるを、二つもしくは三つ並べて、贈物などの上包・芝居の俳優に贈る引幕などに附くるもの。のし(慰斗)参照

わらびののし 笑罵る・笑罵る(動四) 自 大聲にて笑ふ。笑ひ騒ぐ。 注「うへの臺盤所にも笑ひののしりて」

わらびのし 蕨粉(名) 蕨粉にて製したる糊。澁に落し、物を貼れば、粘着力甚だ強き故、傘・提灯などを貼るに用ふ。

わらびばやし 笑話・笑話(名) 笑ひながら話すること。又笑ふべき話。笑話(名)。  
わらびばやし 笑佛(名) ふだいに(傳大士の俗稱。一蓋蟲の尾を指(さ)して笑佛かな)

わらびはん 笑本・笑本(名) 笑畫を、本に仕立てたるもの。枕草紙。 萬葉千載 清少納言の繪に、清(と)といふ名代の娘ま

わらび

くら繪の笑本讀む春の曙  
わらびまく 笑設く・笑設く(動下二自) あみまく(笑設く)に同じ。 盛衰入道殿

わらびもく 蕨木瓜(名) 紋所の「一」 蕨にて、木瓜の形に描けるもの。  
わらびもち 蕨餅(名) 蕨粉を、葛煉の如くに煉りて製したる食品。黄粉(す)などをまぶして食ふ。 狂言 岡太夫「蕨餅を、岡太夫と申します」

わらびもち 蕨餅(名) 前條に同じ。 東國紀行 佐夜(の)山も近し。……この山の名物なりとて、蕨もちといふもの

わらびもの 笑物・笑物(名) わらびさ 笑種(名)に同じ。 狂言 蕨餅(の)よい年をして、子供(の)やうに…… 皆人の笑物であらう

わらびやう 笑樣(名) 人の笑ふ時の様子。わらびさ

わらびやう 笑繪・笑繪(名) 笑ふべき物事を書ける繪。滑稽畫。 田まくら 畫。おそくつゝのゑ。春畫。ひとりわらひ。

わらふ 笑ふ・笑ふ(動四自) 喜ぶ意を、顔つき又は聲にあらはす。あむ。 田花 咲く。咲く。 田縫目ほころぶ。 田果實 熟して裂開す。あむ。 田春 になりて、景色のどかになる。 田笑ふ

わらふ 門には福来る(句) 和氣ある家には、自ら福運めぐり来る。 田語 笑ふ顔に矢立たず(句) 次條に同じ。 田語 笑ふ顔に當らず(句)に同じ。 田語 笑ふ顔は打たれず(句) 怒れる拳、笑ふ口へは食はれぬ(句) 泣く口へは食はれるが、笑ふ口へは食はれぬ

を。 田見よ。  
わらふ 笑ふ・笑ふ(動四他) 嘲りて喜ぶ。あざける。嘲笑す。嗤笑す。  
わらふかぐ 蕨深香(名) 深く作りたる蕨香。 雅樂 蕨深香「宮つかに祭の使などするも、必ず蕨深香を穿くべし」  
わらふき 苑苑(名) 蕨(の)植(め)はじき(充) 蕨に同じかるべしといふ。 田古語 字鏡  
わらふき 蕨茸(名) 蕨にて屋根を葺く

わらび

こと、又その屋根。(茅葺・瓦葺・板葺など)に對して)  
わらぶきやね 蕨葺屋根(名) 蕨にせ

わらぶき 蕨葺(名) 蕨にせ 田葺に同じ。 田雪の山……わらぶきばかりになりて侍る」 和名 蕨葺。 孫傳目、菰俗云 蕨葺。一云、和良布太。 田草葺也

わらぶき 蕨葺(名) 蕨を穂としたる筆。 田城反城者「限筆(の)蕨筆 泥引(の)筆」 田詰めたる蒲團。

わらぶき 蕨蒲團(名) 綿の代りに、蕨に同じ。 田古語 和名 蕨筆。 古者以蕨爲筆。 和良不羊天

わらぶき 童(名) わらべ(童部) 田略。 田紀童子、ワラベ」 和名 童男、男乃和良倍。 田童女乃和良倍

わらぶき 童(名) 子供は風の子に 田童は風の子(句) 子供は風の子に 田童部證に同じ。

わらぶき 童氣(名) わらべの氣もち。子供らに感じ。 わらほごち。をきごころ。 田稚氣。 田佛新選 五氣「童氣に赤いも嬉し菊の花」

わらぶき 笑種・笑種(名) わらべはれさ 田わらべはれさ 童心(名) わらべの心をきごころ。 田こどもごころ。 わらほごち。 田吉野郡女稱「童心の椿が」

わらぶき 童(名) 子供は風の子に 田童は風の子(句) 子供は風の子に 田童部證に同じ。

わらべ

わらべな 童名(名) わらべはな(童名)に同じ。 田御伽名代紙衣「松山が童名を取り違へた」

わらべもち わらべ餅(名) 田幼いといふ語あるによりて、わらべ(童)に通はして「へるもの」 わらびもち 蕨餅の轉訛。 犬子集 幼(の)いにまづ参らせよわらべ餅

わらびもち 蕨餅(名) わらし(蕨餅)に同じ。 田きざり(中)拔草履を云ふ。 田因幡國の方言

わらむじろ 蕨筵(名) 蕨を織りて作り

わらんち 草鞋(名) 田わらんち(草鞋)の轉「わらんち(草鞋)に同じ。 田運歩色葉集「草鞋、ワランデ」

わらんち 草鞋(名) 田わらんち(草鞋)の轉「わらんち(草鞋)に同じ。 田運歩色葉集「草鞋、ワランデ」

わらんち 草鞋(名) 田わらんち(草鞋)の轉「わらんち(草鞋)に同じ。 田運歩色葉集「草鞋、ワランデ」

わらんち 草鞋(名) 田わらんち(草鞋)の轉「わらんち(草鞋)に同じ。 田運歩色葉集「草鞋、ワランデ」

わらんち 草鞋(名) 田わらんち(草鞋)の轉「わらんち(草鞋)に同じ。 田運歩色葉集「草鞋、ワランデ」

わりい

わりがら

堅者



(子唐割)

わりけび

わりした

わりしたおび 割下帯「名」わりふんぞじ  
(割積鼻帯)に同じ。  
わりすそ 割裾「名」わりひざ(割膝)の類  
かといふ。其角千山宅年忌。割裾や八  
少女神樂(かぐら)男より。  
わりすはま 割洲濱「名」紋所の一。二つ  
の洲濱を二巴(ふたまた)の如き形に組み合は  
せたるもの。  
わりだいこん 割大根「名」紋所の一。葉  
の附きたる二つの大根を、左右相向はし  
めて、圓形に描きたるもの。  
わりさか 割高「名」割合に高きこと。他  
と比して高價なること。(割安に對して)  
わりだけ 割竹「名」丸竹の先を幾つか  
に割りたるもの。昔は、夜警の用具とし  
(これを用ひぬ時は、鐵棒(てつぼう)、又罪人  
を叩くなどに用ひたり。われだけ。ささ  
ら。藤栗毛裏どぼりの如に、大の聲聞え、  
割竹の音、時の太鼓も、はや九つの數)  
わりだし 割出「名」割り出すこと。  
花合(はなあひ)に二枚物を、一枚打ち  
出すこと。  
わりだす 割出す「動四他」割算を行  
ひて、所要の數を算出す。所要の數を  
算出す。起算。ある物事を根據と  
して、案出す。  
わりたつ 割立つ「動下二他」割り込み  
て、攻め立つ。突貫してましく立つ。國  
姓(こけい)群中へ割って入り、八方無盡に割  
り立て、割立り立て、撫て捲る。  
わりち 割地「名」割り分ちたる土地。  
わりちやうぎ 割定規「名」二つの同様  
なる定規を、二箇の丸釘にて、腹合はせに  
重ねて、一つの定規として使用するもの。  
平面と直線とを檢査し、又は、直線を描く  
に用ふ。  
わりちゆう 割註「名」割書(がく)にした  
る註解。割註。夾註。  
わりつき 割接「名」臺木を割りて、接  
穂(ほ)を挿し込む方法の接木(ぎぎ)。  
わりつく 割附く「動下二他」わりあつ割  
當つに同じ。  
わりつけ 割附「名」わりあて(割當)に同

わりの

わりの 割角「名」紋所の一。枝一箇づ  
つの角二箇を、相向はしめて、圓形に描き  
たるもの。  
わりご 割床「名」一室の内を、屏風  
などに仕切りて、二つ以上寢床を敷き  
て寝るること。藤栗毛そんな手合(てん  
あひ)と、割床はあやまる。芝居の看板  
の一幅(いっぷく)廣き一枚の板に、下立役(しもだてやく)及び  
囃子方(はやし)の見習の者の名を記し、その  
上方に、他の看板の如く、定規を描くこと  
なく、その代りに幕を描き、木戸の前に立  
てたるもの。總部屋(そうべつ)。「内」。  
わりどだい 割土臺「名」土臺の、柱の  
わりな 割栄「名」いもがら芋(いもがら芋)を云  
ふ。(阿波國徳島の方言)一種の汁物。  
菜を、かぶらと共にわり付け、一束に切  
り、中味(なかな)にだしを加へて作る、古方の  
汁なり。わり菜汁。  
わりな 「名」次條の語の語幹 次條を見  
よ。源氏(げんじ)近き御いらへは、絶えて無し、  
わりなのわざと、うち嘆きたまひて」  
わりなし 「形」(理)無し(義)理詰  
にては解決しがたく、苦し。分別も、施す  
に方法無し。ことの外なり。分るせなし。  
せんなかなし。源氏(げんじ)待ちすぎず月日に  
添へて、いとしのびがたきは、わりなきわ  
ざになん」  
わりなき仲 「句」離れんとしても、  
離るる方法なき仲の義 男女の、情愛  
極めてこまやかなる関係。  
わりくに 割に「名」豫想又は他の値段な  
どと比較してすぐれたるにいふ語。わり  
あひに。わりかた。「た。又杖。  
わりはさみ 割挾「名」またふり。さんま  
わりはし 割箸「名」下端より半ば程の所  
まで、割目(きりめ)を附けおき、使用の際引  
き裂きて二本となす杉箸。「よ」。  
わりはん 判判「名」わりいん(割印)を見  
わりひん 破冰破氷「名」わりり砕きたる氷。  
山標記(やまひょう)破氷水。非(ひ)割水。  
わりびき 割引「名」定まれる價格の  
内より、幾割かを減ずること。英(えい)「商」  
「英 Discount」或一定の期限の後に支拂

わりき

はるべき證券を、その満期日の前に、現金  
に引き換へんとするに當り、その時より  
満期日まで(の利息に相當する金額を、證  
券面(しやうめん)の金額より差し引くこと。英(えい)「商」  
てがわりびき(手形割引)の略。四見掛に  
對して眞價を、又、報道に對して事實を、  
内端(うちへん)に見積ること。さしひき。  
わりびきがかり 割引係「名」銀行の、手  
形の割引を取扱ふ係、又その係の者。  
わりびきかんちやう 割引勘定「名」割  
引の計算を整理するために設くる。簿記  
の勘定科目。  
わりびききんかう 割引銀行「名」(商)  
「英 Discounted bank」營業資金を、主と  
して、手形割引の上に運用する銀行。普  
通の銀行は、皆、これに屬す。  
わりびきくさい 割引公債「名」(經)  
「英 Discounted public loan」應募額の、  
額面より少き公債。割引發行の公債。(打  
歩(うちぶ)の公債に對して)  
わりびきしけん 割引時間「名」電車に  
て、乗車賃の割引をなす時間。早朝の數  
時間をこれに充て、各車輛には、その意味  
の札を掲示す。  
わりびきしや 割引車「名」割引時間内  
に運轉し、乗車賃を割引する車輛。  
わりびきさか 割引高「名」割引する數  
額。或數より差引く、何割かの數。  
わりびきてがた 割引手形「名」(商)「英  
Discounted bill」銀行が手形割引によ  
りて受取りたる手形。  
わりびきてざりきん 割引手取金「名」  
「商」手形割引にて、割引人の受け取る金  
額、即ち手形面より割引料を差し引きた  
るもの。  
わりびきてんじや 割引電車「名」割引  
時間内に於ける電車。  
わりびきてん 割引人「名」(商)銀行に  
て、手形割引をしたる人。  
わりびきはつかう 割引發行「名」(經)  
「英 Discounted issue」公債を、額面價格  
より割引して發行すること。割引公債の  
發行。割引募集。(平價發行に對して)。

わりき

わりびきはつかうはふ 割引發行法「名」  
(經)割引發行の方法。割引募集法(平價  
發行法に對して)  
わりびきふあひ 割引歩合「句」(數)割  
引の率、即ち或數とその割引高との比。  
「數」手形割引に於て、差し引く利率、  
即ち手形面の金額に對する、割引料の比。  
わりびきほしふ 割引券集「名」(經)わり  
びきはつかう(割引發行)に同じ。(平價募集  
に對して)  
わりびきほしふはふ 割引募集法「名」  
(經)わりびきはつかうはふ(割引發行法)に同  
じ。(平價募集法に對して)  
わりびきれう 割引料「名」(商)手形割  
引にて、現金に引き換へたる日より満期  
日までの日數に應じて差し引く利子。  
わりびけ 割引「名」わりびき(割引)に  
同じ。  
わりひざ 割膝「名」左右の膝頭を、やや  
外方に離し開きて坐ること。舞女(まゆめ)五枚羽子  
壓頭を下げるに、隙もなく、割膝痛く、と  
もすれば、女子(むすめ)みずまひ、しどけなう」  
わりびし 割菱「名」ただだし(武田菱)に  
同じ。  
わりふ 割符「名」竹又は木片に、事を  
證する文字などを記し、これを二つにし  
て、一片を留め置き、他の一片を與へて、  
後日雙方を見合はせて證據とするもの。  
左は文字の筆始なるより、右手を留めて、  
左片を渡し、手許には、右片を留めおくを  
法とすといふ。わりふだ。わつぷ。符符。  
契。符節。勘合。「破符」運歩色葉集「破  
符、ワリフ」我(われ)會精山(こくわい)のこの割符、  
蒲(よもぎ)の入道殿より、密かに拜借申せしか  
ど」後に見合はせて、證據とすべき物。  
博多小女(はくたこ)鹿(か)「懸硯(けんいん)に入れおきし割符の手  
錢(てんせん)」。目昔(むかし)、替錢(かぎせん)に用ひし手形、又替  
錢(てんせん)きつぷ。庭園(てんえん)在來(ざいらい)湊湊替錢(みなみなかぎせん)浦浦問丸(うらうらもんまる)、  
同以(どうい)割符(わりふ)進上(しんじやう)之(の)下學集(げがくしゆ)「割符、ワリ  
フ。兩所通錢之義也」  
割符が合ふ「句」兩者の言ふ所、矛盾  
しをらず。符合す。天(あま)の綱(つな)鳥(とり)夫婦(ふうふ)の詞、  
割符も合ひ」

わりふしん 割普請「名」一つの普請を、幾つかに分割し、各、分擔して著手すること。新版祭文「屋根も、根太も、こりや、一時に割普請ぢや」。

わりふだ 割札「名」わりふ「割符」に同じ。わりふた 割蓋「名」二枚以上より成り、相合して、一つの蓋となるもの。下水溜掛、手桶などの蓋に多し。胸算用、風爐釜を仕懸け、割蓋の杉手桶に。

わりふね 割ふね「名」すりぬか「磨練」を云ふ。「古の宮女の語」。

わりふんどし 割褲「割袴鼻褌」。「名」下帶の「一」。麻布などを用ひ、長さ四尺ほどにて、中程より堅に三つに割り、その割りたる方を腰に纏ひて、前方にて結ぶもの。わりしたおび。

わりふやう 割符様「名」書判「ひ」を書くに、下に「一」の字を添ふこと。徳川家康の書判より起りたりといふ。徳川判。

わりふり 割振「名」わりあて「割宛」に同じ。「當つ」に同じ。

わりふる 割振る「動四他」わりあつ「割わりまし」割増「名」定まれる價額より、幾割かを増すこと。「割引に對して」。

わりましきん 割増金「名」割増の金。わりまつ 割松「名」松の割木。松の新。まつづれ 五人馬、火鉢に割松燃やして「俗つれづれ」割松明かして。

わりまへ 割前「名」割り當てたる部分。わけまへ。配當額。

わりむぎ 割麥「名」碾割麥「乾麥」と抑制麥「乾麥」との併稱。九麥平「麥」などに對して。

わりめ 割目「名」割りたるきは。二代男「石の割目」。

わりめし 割飯「名」ひきわりめし「碾割飯」。

わりもど 割元「名」わりもどさうだい「割元總代」の略。

わりもどじ 割戻「名」わりもどすること。わりもどじきん 割戻金「名」割戻の金。わりもどす 割戻す「動四他」賺金の殘餘を出金高に應じて、分ちて戻す。

わりもどさうだい 割元總代「名」おぼじやう「大庄屋に同じ」。

わりもの 割物「名」數を割り出すこと。狂言「目」「むづかしい割物でも仰せつけらるるか」と存じて御座れば「鐵算」算用は、むづかしい割物も、埒「を」をあけ。

わりものゑ 割物繪「名」寸法を割り出して描く繪。

わりや 割矢「名」紋所「一」。莖より二つに割きたる羽二枚を、斜に十字に重ねたるもの。「見よ」。

わりやあ 我やあ「句」われ「我」の條下をわりやす 割安「名」割合に安きこと。他と比較して安價なること。「割高に對して」。

わりわかつ 割分つ「名」わりあつ「割當わりわたり 割渡「名」割り渡すこと。又その數額。配當。配當額。」「て渡す。

わりわたす 割渡す「動四他」割り當てる惡「名」「わるし」惡しの語幹「わるきさま。わる。源氏」あなわるやといふを」。

わる 割る「破る」動下二目「一」箇の物を、二つ以上に離し分く。くだく。こはす。やぶる。山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

やぶる 山登「まさきわる飛驒の山」。

わる あがき 惡足撥「惡蹴」名一度に過ぎて騒ぎ狂ふこと。極度にいらだつこと。重帷子「彼の馬鹿を相手にして日がな一日、わるあがき。」「手習舞おとなしうして待つて居や。わるあがきせまい」。

わる あきなり 惡商「名」商「難平」に賣買すること。「取引所の語」。

わる あそび 惡遊「名」惡しき遊。いたづら。惡戲。放蕩、博奕などのなぐさみ。丹波興作「しこりばくちのわる遊」。

わる いたづら 惡戲「名」他人の迷惑にわるる戲。わるさ。わるふざけ。惡戲。

わる おち 惡落「名」演藝にて、演藝者の過失のために、觀客又は聴客に、意外の滑稽を感ぜしむること。

わる がる 惡がる「名」他人の迷惑にならるる。過度にふざけること。「代男」。

わる 氣道なしに 帶解けと、一つも口をあかせず、わるがる、有程盡して物しける。

わる がるじや 惡巧者「名」わるだしや「惡達者」に同じ。

わる がじこ 惡賢「名」惡き事に賢し。惡智恵あり。奸智に長けたたり。

わる がね 惡銀「名」あくせん「惡錢」に同じ。「代女」惡銀攫まして。

わる がみ 惡紙「名」粗惡なる紙。娼妓稱「わる紙」書いて、惡筆の文。

わる ぎ 惡氣「名」あくい「惡意」に同じ。惡意地惡氣廻氣。邪推。薩摩野「さしてもない事、苦口を言うて、我も腹を燃やしたり、人にも惡氣附けさんす」。

わる 惡氣が廻る「句」惡氣が廻る。邪推す。會我屋八「見顔して去」なれたが、定めて、惡氣が廻らう」。

わる 惡氣を廻す「句」惡氣を廻す。邪推す。俗つれづれ「太夫の名寄たきの本を売が貸しける、これにも惡氣廻して」。

わる くるさ 惡臭「名」惡しきにほひす。異様の臭氣あり。

わる くれ 惡辭「名」惡きせ。惡習。惡わるくち 惡口「名」あくち「惡口」に同じ。

わる くるくち 惡口「名」あくち「惡口」に同じ。

わる くるくち 惡口言「名」惡口を言ふ性質。又その人。「代男」伏見堀の惡口いひも、これをよしとぞ申しはべける」。

わる くるくち 惡口がまし「形二」惡口らしくあり。唐船頭今國難達さしあひの惡口がまし、かしまし」。

わる くるくち 惡口中間「惡口仲間」仲間「名」互に惡口を言ひあふ人。若風俗「惡口中間に、何事を見附けられける」。

わる くるくち 惡狂「名」惡遊「に耽ること。惡所ぐるひ。養生閣田川「莫大の黄金、惡狂に遣ひ果し」。

わる くら 惡御達「名」たちの惡き御達。口の惡き女房など。「古語」源氏「わたちの落ちとまり洩れたるが」。

わる さ 惡さ「名」惡き程度。わるいたづら「惡徒」に同じ。「惡作」。

わる さ 惡作子「名」わんぱくなる子供。いたづら子。

わる ざれ 惡洒落「名」わるじやれ「惡洒落」に同じ。源氏「源氏とあたらつくやれと、わるざれに、かたへに、そと取りのくれば」。

わる ざわざ 惡懸「名」他人の迷惑になる程に懸ぐこと。過度に騒ぐこと。

わる ざ 惡し「形一」よからず。正しからず。劣りてあり。わるし。あし。源氏「いとわるかるべき事」。

わる ざ 惡度「名」度を過ぎてあり。いやに感ず。源氏「源氏とあたらつくやれと、わるざれに、かたへに、そと取りのくれば」。

わる ざ 惡妻「名」六十一年の不作「句」惡妻は六十一年の不作に同じ。「諺語」。

わる ざ 惡耳を聞かす「句」惡むべき事を話す。

わる ざ 惡蟲が附く「句」「蟲が附く」に悪い物の煮肥「句」「味の無い物の煮太」に同じ。「諺語」。

わる ざ 惡くしたら「句」事によると、惡しき結果を招かんと氣遣ひていふ語。

わる ざ 惡くすると「句」前條に同じ。

わる ざ 惡くなる「名」くさる。腐敗す。わるじやれ 惡洒落「名」しつこく拙き洒落の言葉。三代男「惡氣張合すぐれ

わるじわ

て、惡酒落も言はず」**調和せぬ程に、過度に身を飾ること。**

わるじわ 惡鐵(名) 衣服などに生じた、見にくき鐵、二代男給・帷子(名)も、惡鐵寄りて

わるすまじ 惡澄(名) をかしき程にとりすまじこと。いやに氣取ること。

わるすれ 惡擦(名) わるずれること。

わるすれる 惡擦れる(動下二自) 惡く人ずれる。世故に通じて、人が惡くなる。

わるすぬ 惡推(名) 次條の略。薩摩男に執心引かれて、尋ね來たとの惡推か

わるすぬりやう 惡推量(名) じやする邪推に同じ。

わるだくみ 惡工(名) 惡智慧のたくらみ。惡しきばかりこと。奸策。

わるだじや 惡達者(名) 藝能の、氣品無くして、達者なること。わるがうしや。

わるだる 惡樽(名) 昔、水浴(名)に、殊更につまらぬ水掛の具を贈りて、水懸振舞(名)に與らんとせしこと。

わるち 惡血(名) あくち(惡血)に同じ。

わるちや 惡茶(名) 粗惡なる茶。下等の茶。麗聲笑「惡茶にても立てて出だされよ」

わるぢる 惡智慧・惡知慧(名) 惡賢き智慧。奸智。點智。鷲鳥はや、三歳の頃より惡知慧附きて

わるどめ 惡止(名) 辭し去らんとする人をお世辭心に、強ひて引き止むること。

わるびる 惡びる(動下二自) 臆して、醜く見ゆ。未練がましく振舞ふ。わるびる。平氣ちとも色も變らず、惡びれたる氣色も無く

わるふさげ 惡巫山戯(名) 他人の迷惑になる程にふざげること。過度にふざげること。

わるもの 惡者(名) 拙き者。劣りたる人。未熟なる人。へた。わるもの。「古語」源氏上手は、いと、いきほひことに、わるものは、及ばぬ所多かる」**心のよからぬ人。惡人。奸人。惡漢。惡徒。わる。**

わるもの

わるもの 惡物(名) 品質の劣れる物。粗惡なる品。下等なる物。

わるものすき 惡物好(名) 過度の物好。みだりなる好奇心。着鳥この廣い都に、女はいかなるもある。人の沙汰しけるは、これを惡物好といふ

わるものつくり 惡者作(名) 惡漢らしき扮装。梅屋破戸(名)、ぐわらり押し開けて入り來る二人の破落戸扮装(名)「」

わるるんりよ 惡遠慮(名) 過度に遠慮すること。みだりに辭退すること。

われ割破(名) 割れ破くこと。又その物。こはれ。かけ。くだけ。かけら。破片。著團土盤(名)のわれをもて

われ我(名) 自分。自分の身又は心。自己。自身。自我。自分の國又は仲間。

我と言へば 自分に關係ある事とだに言へば。拾遺われといへば、稻荷の神もつまらぬかな人のためとは所らざりしを

我に歸る 氣を取り戻す。氣が附我を忘る 自分が自分の存在を忘る。自失す。五人女この若衆、我を忘れて、みつからが手を、いたく締めさせたまふを

われ我(代) 第一人称。わ。あ。あれ。おのれ。わたくし。「吾余予」

おのれ。わたくし。「吾余予」そのの自身。その人自身。わもじ。御扇など參れば、われつかうまじに

第二人称。そなた。そち。なんぢ。おのれ。然われは知りたりやと仰せらるる我(の)やあ 我(我)はの詛。汝は。己は。貴様は。「俚語」

我(一)と 我(一)先ににに同じ。油槽「我」と卯月八日の手向(名)して

我劣らじと 我(一)我を勝ためとて。我先にと。我(一)と。源氏我劣らじと、さまざまの事をし出づめり

我面白 自分のみ面白く思ふこと。我面白の人喧し 自分のみ面白く、他人の迷惑を顧みぬこと。「諺語」

われ

我思ふ、故に我あり 哲「羅 Coggio etc. sum.佛 Je pense, donc, j'existe」佛蘭西の哲學者デカルト(Descartes)が、その哲學の出發點として、一切の疑の中に疑ふべからざる根據を發見せんとせし結果發表せる語。即ち知覺は、吾人の思维の根柢となるものなるが故に、これを、亦、疑はざるべからざれども、疑ふは思ふの一種にして、吾人が斯くの如き思を抱くことは、いかにしても疑ふべからざる事實なれば、從ひて、又、斯くの如き思を抱く者、即ち吾人の存在も、亦、疑ふべからざる事實なりとの意。デカルトは、この意識の直接の證明に、確實なる知識の第一歩を得て、その他を演繹的に説明せんとせしなり

我か、人か 或は、我にてあるか。我か、人かの略。源氏汗もしととなりて、我かのけしきなり

我賢に 我以外に賢き者は無しとばかりに。誇りて。かしこににて。リこぶりて。我賢にに。源氏我がしこにうちあざ笑ひて語る

折れかかちたる歌を詠み出で、えもいはぬよしはみごとしも、我かしこに思ひたる人、憎くも、いとほしくも、覚えはるわざなり

我か、人か 心亂れて、我なるか、他人なるかの辨も無きこと。古今天彦の言づれしかと今は思ふ我か人かと身を迫る世に

我か人かにもあらず 我にあらざること。空想、おとど、心惑ひて、我か人かにもあつたたまふ

我から 他人を恨むまでもなく、自分の心のため。人やりならず。古今「蟹の刈る藻に棲む蟲のわれからと音」をこそ泣かめ世をば恨みじ

我苦し 我ながら苦し。落然いかならんさまも、我苦しう、心動くべくもおぼさねど

我こそあらめ 自分が最もすぐれたる。保馬恐らくは、弓矢取つても、打物取つても、我こそあらめ、その上、判官(名)も、軍の奉行を仕らせらるる上は、我こそあらめ

我こそはと 我はとに同じ。

我賢に 自分以外に賢しき者無し。源氏我がかしう思ひ沈めたまふにはあらねど

我賢に 自らさかしがり。えらがる。りこぶる。然おしはかりごとうちし、すすろなる物うらみし、我さかしがる

我賢に 我賢にに同じ。源氏我がかしに、人を無きになし、世をそしるほどに

我先にと 自分が一番先にならんとて。我(一)に。我劣らじと。先を争ひて。われがちに。保馬我先にと、興に争ひ乗られけるこそ、あはれなれ

我健し 自分以外に健き者無し。得意になる。源氏かしこく教へつるかなと思ひたまへて、我たけく言ひそしはるに

我と 自分(自)に同じ。太平記、我と手を碎き、合戦仕り候はずば

我とは無しに 我にては無きに。我と同じ身の上にてはあらねど。古今「ほととぎす我とはなしに卯の花のうき世の中になきわたらん」

我ながら 自分ながら不思議なるくらゐに。源氏我ながら、うたて、心憂の身やと思ひ續けて泣きぬ

我とわが手に 我てつから手づからに同じ。

我にて 自分の經驗によりて。己が身に引き比べて。拾遺春はなほ我らにて知りぬ花ざかり心のどけき人はあらじな

我にもあらず 自分ながら、自分とは思はず。氣を失ふ。自覺を失ふ。うつし心無し。我を忘る。源氏中宮、我にもあらず、涙に沈みておはします

われ

れたり。保馬恐らくは、弓矢取つても、打物取つても、我こそあらめ、その上、判官(名)も、軍の奉行を仕らせらるる上は、我こそあらめ

我こそはと 我はとに同じ。

我賢に 自分以外に賢しき者無し。源氏我がかしう思ひ沈めたまふにはあらねど

我賢に 自らさかしがり。えらがる。りこぶる。然おしはかりごとうちし、すすろなる物うらみし、我さかしがる

我賢に 我賢にに同じ。源氏我がかしに、人を無きになし、世をそしるほどに

我先にと 自分が一番先にならんとて。我(一)に。我劣らじと。先を争ひて。われがちに。保馬我先にと、興に争ひ乗られけるこそ、あはれなれ

我健し 自分以外に健き者無し。得意になる。源氏かしこく教へつるかなと思ひたまへて、我たけく言ひそしはるに

我と 自分(自)に同じ。太平記、我と手を碎き、合戦仕り候はずば

我とは無しに 我にては無きに。我と同じ身の上にてはあらねど。古今「ほととぎす我とはなしに卯の花のうき世の中になきわたらん」

我ながら 自分ながら不思議なるくらゐに。源氏我ながら、うたて、心憂の身やと思ひ續けて泣きぬ

我とわが手に 我てつから手づからに同じ。

我にて 自分の經驗によりて。己が身に引き比べて。拾遺春はなほ我らにて知りぬ花ざかり心のどけき人はあらじな

我にもあらず 自分ながら、自分とは思はず。氣を失ふ。自覺を失ふ。うつし心無し。我を忘る。源氏中宮、我にもあらず、涙に沈みておはします

我は爲(シ)て、人のぼらけを嫌ふ

「句」自分も爲したる事を、他人が爲す時は、嫌ひて禁制す。『諺語』醒睡(さる)月次(し)の連歌にて、宗匠たる人、朝ぼらけといふ詞をせられたれば、句柄(くわ)が面白しと、一座皆感ずるを聞きあて、末座より夕ぼらけといはれぬ。又、その宗匠、あら珍しやといはれぬ。又、その儀ならば、晝ぼらけとなほしけるを、宗匠、それは、晝ぼらけ(な)言葉ぞとおつこめたるに、右の作者愛く、これ、これ、我はして人のぼらけや嫌ふらん」

我はと「句」自分のみ、他にすぐれたりと誇りて。我と。我こそはと。源氏

「われはと思ひあがりたまへる御方方」我も我もと「句」各自に劣らじと。我先にと。われがちに。榮花(さか)せんかたなくおぼされて、我も我もと、いてたち騒がせたまふ」

我より古を作(す)「句」『宋史の禮志に「孝宗欲不用易月之制一日、自我作(す)何害」とあり我、故事となるべき新例を開く。舊慣に泥(ぬ)まず予を起す「句」予(を)起すに同じ。我を我と思ふ「句」臣下などが、自分を重んじてくる。自分に心を寄す。平家「重盛こそ、天下の大事を聞き出したん、なれ。我を我と思はんずる者どもは、皆、物具(ものぐ)にて参れ」

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われいちど我一と「句」われ(我)の條下を見よ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

われおもひろ。我面白「名」『書』手柄岡持(たけ)の狂歌狂文等を集めたるもの。二卷。

み聲の響。われがひ。破貝「名」われたる貝。夫木「和歌の浦ふるきくだけのわれがひも拾へる歌にまたまじりぬる」

われから「名」『動』割殻の義にて、乾くに随ひて、その體の割るよりいふとぞ。甲殻類に屬する節足動物。海藻の間などに棲み、體附せて長く、大なるも一寸内外、胸部の大部分を占め、肢は鉤状をなし、その第四脚と第五脚とは極めて、小なるを常とし、或は缺けることあり。古今「蟹の刈る藻に棲む蟲のわれからと音(こ)をこそ泣かぬ世を恨みじ」

われから食はぬ上人は無し「句」持戒堅固の高僧にても、海藻に附著せるわれからのみは、我知らず食す。『諺語』

われき。割木・破木「名」われたる木。夫木「三尾山や柳のわれ木の片おちに捨てられながらふしは忘れず」

われくるし我苦し「句」われ(我)の條下を見よ。

われさかじに我賢しに「句」われ(我)を見よ。われさかじに我賢しに「句」われ(我)を見て用ふ第二人稱。わりさま。

われじく我じく「副」自分らしく。わが身の事の如くに。『古語』萬葉立ちわかれ君がいまさば敷島の人是我じく齋(い)ひて待たむ」

われしらす我不知「副」心づかずに。思はず知らず。無意識に。ふと。

われりりがほ我知願「名」自分のみ知りてありといふが如き願つき。

われすまふ割相撲「名」『われ割』を見よ。『引分(ひきわけ)』の相撲。手習(てなひ)二人が相撲も割相撲」

われたけし我健し「句」われ(我)の條下を破れて「副」思ひくだけで、強ひて。あながちに。わりなく。『古語』伊勢「男、われて逢はんといふ。女も、はた逢はじと思へらず」

われどち我どち「名」自分たちの仲間。一「車の方など見おこせて、我どち言ふ事も、何事ならんとおぼゆ」

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

われなへ。破鍋「名」われ目のある鍋。ひびの入るたる鍋。『大なるだみ聲の響。われなへ(破鍋)』参照。

わろびる

き車ども立ち込みぬれば、わろびとの車、寄りつくべうもあらねば」

わろびる 悪びる「動下二自」わろぶ(悪ぶ)に同じ。「古語」落着、傍の、いとわろびれすぎたるを。『わろびる(悪びる)に同じ。保元随分の勇士どもも、わろびれて進みえず』

わろぶ 悪ぶ「動上二自」わろく見え又思はる。様よからず。「古語」源氏(然)わろびたる人を。『源氏中納言』わろびたる世をありわづらひて」

わろん 和論語、倭論語「名」書『後鳥羽院御覽の際、我國の論語なりと宣ひしよりこの名を得』神明部・人皇並びに親王部・公卿部・武家部・貴女部・釋子部の六門に分ちて、各、善美の言行を輯録せるもの。十卷。寛文九年の刊行。後鳥羽院の御代に、清原良業、勅を奉じて撰せしもの。由傳ふれど、偽書なりといふ。

わろもの 悪者「名」わろもの(悪者)に同じ。源氏男も、女も、わろものは、わづかに知れるかたの事を、残なく見せつくさんと思へこそ、いとほしけれ」

わろもの(悪者)に同じ。

わろん 和黃岑「名」植「ちゃんばき」(古城菊)に同じ。

わわく「名」わわく(狂惑)の訛か「わやく。横著。狂惑。明惠上人傳、いよいよ、人の心かたましく、わわくにのみなりて、恥をも知らず」

わわく「動下二自」破れ亂る。綻び破る。破綻す。「古語」萬葉集もなき布屑布(わわく)の水松(の)のことわわく下(わわく)れる」

わわくほふ わわく法師「名」わわくなる法師。横著なる僧。續教訓抄明賢といふわわく法師」

わわくる「動四自」わわるに同じ。著聞「人に語り、或は、人にも言はせて、わわくりけるが、あまりに事過ぎて」

わわけ「名」わわけてあること、又その物。散紅の袖にはつれしまみよりも汝(わわけ)がつづりのわわけをぞ思ふ」

わわめく

はし。亂雜なり。名義抄「輕、ワワシ・カロシ・イルガセ」増廣隨身も、わわしくののしれば」

わわめく「動四自」わわやとす。亂れわわらば「貌」亂れて落ちつかぬさま。一説、名詞にて、わわけたる葉なるべしと。『古語』萬葉玉に貫きけたすたらむ秋萩の末(わわらばにおける白つゆ)わわりつく。わわり附く「動四自」わわりて縋りつく。日本橋補船五百機(わわき、わわりつき)「くる」

わわる「動四自」亂れ騒ぐ。騒亂す。わわわおん「和韻・和韵「名」文「他人の作れる詩に對し、同韻の字を用ひたる詩を作して、これに和すること。原韻字を、同一の順序に用ふる次韻と、原韻字を用ひながら、順序は必ずしも同一ならしめざる用韻と、同韻中の韻字ながら、必ずしも原韻字を用ひざる依韻との三種あり」

わわ「名」弱末(わ)の略なるべしといふ。若き梢又は枝。「古語」延喜式「椎枝、古語所謂、志比乃和惠」

わわ「和繪」に對して

わわ「猥褻」に對して

わをぞこ 我男・吾男・和男「代」わ(我)を見よ 男子を親みていふ第二人稱。わをのこ(我女)に對して 字遣「わ男、彼處にありし時は」

わをどり 輪踊「名」輪狀に並びて、廻りながら踊ること、又その踊

わをのこ 我男・吾男・和男「代」わ(我)を見よ 男子を親みていふ第二人稱。(我男)に同じ。平家物語「は、宣旨の御使と名乗るを」

わをんな 和温「名」をんな(溫和)に同じ。わをんな 我女・吾女・和女「代」わ(我)を見よ 女を親みていふ第二人稱。(我男)に對して 字遣「させる事なき侍あり。字(わ)さだとなんいひけるを、……、なぞ、わ女がさだかといふべきことか」狂言ども「ちっとも忘れ候はぬぞ、わ女」



ゐ

【發音】わ行第二の音。もと子音wが母音iに結び附きて發せしものにて、その發音の方法、位置は、中古まではわ及びの條下に説けるが如くなりし等なれど、後には、子音wの脱落し、母音iのみとなりし結果、假名は舊來のままながら、實際の發音は、あ行のいとは何等異なる所なきに至れり。長音は、いと書くとゐと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。

【漢語の發音】漢語の發音を有する文字が、nの韻を有する文字の直後に續く時、そのゐをニと轉呼し、mの韻を有する文字の直後に續く時、ミと轉呼することある場合に就きては、に(國)とみ(國)との條下を見よ。

【漢字の音に、う列の頭音の下には、古來、必ずゐを用ひて、いを用ひず。例へば、すゐ(水)・つゐ(對)・ゐ(類)の類にて、これ實は、(國)の條下に記せる古の拗音ゐ(ゐ)と同類のものにして、羅馬字を用ひて記せば、元來一音節なるswai, swai, waiに相當し、複音節なるswai, tsai, waiには非ざるより生じたる假名遣に外ならず。西洋語のwiを寫すにゐを用ふることは、その元來の發音を復活せしめたるものにして、これに代ふる

ゐ

にうい又はういを以てすることもあり。【字源】平假名ゐは漢字「爲」漢・吳音共に「き」の草體變體平假名は「遣」漢・吳音共に「き」の草體、を「居」(訓牛)の草體、并は「井」(訓子)の草體より出て、片假名も「井」の略體、又萬葉假名として、前記「爲」遣「居」井の外、字音に據れるものに「委」菱「胃」渭「謂」章「偉」位「尉」威等訓を取りたるものに「座」猪「藍」等あり。

井「名」居(井)の轉義にて、水の溜りある處の義ならんといふ。古、泉の湧き出づる處、又は、流水の一部などを、共同の水汲場又は用水路として使用せしもの。【井戸】に同じ。萬葉集「井戸の眞間」の井見れば立ち平(井)し水汲ましけむ手兒奈(井)し思ほゆ」

井に坐して、天を觀る「句」『韓愈の原道に、坐井而觀天、曰天小者、非一斛水也』とあるに本づく。狭小なる見天を以て、萬事を是非する譬。管を以て天を窺ふ。【諺語】

井の蛙「句」次條に同じ。【諺語】天子集貞徳「五月雨は大海知るや井の蛙」井の内の蛙「句」次條に同じ。【諺語】井の内の蛙、大海を知らず「句」莊子の秋水篇に「井蛙不(可)以語於海」者、拘於虛也」とあるに本づく。見解の狭小なる譬。井の蛙、井の底の蛙、井蛙(井蛙)。井魚(井魚)。管見。【諺語】井の内の目目雜魚(メダカ)「句」淮南子に「井魚不(可)以語大、拘於隘也」とあるに本づく。前條に同じ。【諺語】三才男「この廣い戀の路に、井の中の目目雜魚」

井の底を知る大空「句」次條に同じ。井の底の蛙「句」井の内の蛙に同じ。【諺語】井を塞ぐ「句」用水を塞(き)止む。堰(き)を造る。字彙「堰、井世久」

亥「名」次條の語の轉義。【十二支】の中に、最後に位するもの。【十二支】を方向に配していふ。西より三十度北

ををわ ゐれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ